赤松中学（あかまつ・ちゅうがく）

生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。
「アストロノト！」で第３回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。
本作・武装学園小説「緋弾のアリア」は、同作家の２シリーズ目となる。

こぶいち

ゆずソフト原画の覆面担当。
代表作は「ぷらばん」「EXE」「夏空カナタ」。
趣味はゲーム、飲食。
ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。
http://tyalisune.blog87.fc2.com/

カバーイラスト：こぶいち　装丁：西垣雄ユウコ（ムシカゴグラフィクス）

MF文庫J
あ-05-06
580

緋弾のアリアⅢ

赤松中学

ISBN978-4-8401-2720-2
C0193　¥580E

9784840127202

定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー

19201930058O6

緋弾のアリアⅢ　蜂蜜色の罠

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称「武偵」を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアと、そのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジの前に、峰理子が再び帰ってきた。「一緒にドロボーやろうよ！」という怪しい依頼にためらう二人だったが、理子のたくみな口車に乗せられる形で協力することになってしまって……。罠がひしめく館から、リュパン家の秘宝を盗み出せ!!　敵組織のナンバー2『無限弾のブラド』がいよいよ出現――。絶体絶命の大スケールアクション＆ラブコメディー第3弾!!

MF文庫J 赤松中学の本

- アストロノト！（イラスト bomi）
- アストロノト！2（イラスト bomi）
- アストロノト！3（イラスト bomi）
- 緋弾のアリア（イラスト こぶいち）
- 緋弾のアリアⅡ 切れる最武装（イラスト こぶいち）
- 緋弾のアリアⅢ 蜂蜜色の罠（イラスト こぶいち）

赤松中学（あかまつ・ちゅうがく）

生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。「アストロノト」で第３回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。本作・武装学園小説「緋弾のアリア」は、同作家の２シリーズ目となる。

Illustration

©こぶいち

名ゲインバ作業の専属担当。
代表作は「ぷらばん」「EXE」「星空カナタ」。
趣味はゲーム、映画、
ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。
http://tyatsune.blog87.fc2.com/

緋弾のアリアIII

蜂蜜色の罠

Trial the Scarlet Bullet

赤松中学

MF文庫J

J 35-06

緋弾のアリアIII

赤松中学

ISBN978-4-8401-2720-2
C0193 ¥580E

9784840127202

19201930005806

定価：本体580円（税別）

メディアファクトリー

緋弾のアリアIII　蜂蜜色の罠

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称「武偵」を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアと、そのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジの前に、蜂理子が再び現れてきた。「一緒にドロボーやろうよ！」という怪しい依頼にためらう二人だったが、理子のたくみな口車に乗せられる形で協力することになってしまって……。異がひしめく館から、リュパン家の秘宝を盗み出せ!!　厳重極まりないセキュリティ!!　敵組織のナンバー２「無限罪のブラド」がいよいよ出現――。絶体絶命の大スケールアクション＆ラブコメディー第３弾!!

J 赤松中学の本

アストロノト！［イラスト bomi］

アストロノト！2［イラスト bomi］

アストロノト！3［イラスト bomi］

緋弾のアリア［イラスト こぶいち］

緋弾のアリアII［イラスト こぶいち］

緋弾のアリアIII［イラスト こぶいち］

ラノベ、コミック、アニメが全部入り！
メディアワ☆モバイル！
http://medima.tv

MF文庫J、アライブ、フラッパーがケータイで読める！
ゼロの使い魔など人気タイトルの表紙、カラーイラスト他、3000枚以上の待受画像などなど、超充実のラインナップがキミをまっている！

新刊ラインナップ

緋弾のアリアIII

Aria the Scarlet Ammo

蜂蜜色の罠（ハニー・トラップ）

赤松中学

P11 1弾 月下の双剣双銃（カドラ）

P40 2弾 武偵高の理子

P109 3弾 狼とレキ

P159 4弾 潜入作戦（スリップ）

P198 5弾 高度296メートルのビリヤード

P278 最終弾 大変なものを盗んでいきました

P287 エピローグ Go For The NEXT!!!

Contents

東京武偵高校 専門科目一覧

強襲科（アサルト）
拳銃・刀剣その他の武器を用いた近接戦による強襲逮捕

狙撃科（スナイプ）
主に狙撃銃を使用した遠隔からの戦闘支援

強襲科 不知火 亮

諜報科（レザド）
犯罪組織に対する諜報・工作・破壊活動

尋問科（ダギュラ）
逮捕した犯罪容疑者への尋問

探偵科（インケスタ）
探偵術と推理学による調査・分析

狙撃科 レキ

強襲科 神崎・H・アリア

鑑識科（レピア）
犯罪現場や証拠品の科学的検査

装備科（アムド）
装備品の調達・カスタマイズとメンテナンス

探偵科 遠山キンジ

車輌科（ロジ）
車輌・船舶・航空機の運転操縦

探偵科 峰 理子

通信科（コネクト）
通信機器を用いた情報連絡によるバックアップ

車輌科 武藤 剛気

情報科（インフォルマ）
情報処理機器を用いた情報収集と整理

情報科 ジャンヌ・ダルク

衛生科（メディカ）
武偵活動の現場に於ける医療・救助活動

救護科（アンビュラス）
武偵病院に勤務する医師の育成・医療活動の実践

SSR 超能力捜査研究科
超能力・超心理学による犯罪捜査

CVR 特殊捜査研究科
特殊条件下に於ける犯罪捜査

超能力捜査研究科 星伽 白雪

教務科（マスターズ）
武偵高の教職員

教務科 綴 梅子

教務科 小夜鳴 徹

緋弾のアリアⅢ

蜂蜜色の罠（ハニー・トラップ）

赤松中学

MF文庫J

口絵・本文イラスト●こぶいち

編集●笹尾明正

1弾　月下の双剣双銃

どうする。
どうするキンジ。
「キーくん、ぎゅってして」
ギュッてしてるのはお前の方だろう。
――峰・理子・リュパン4世！
ベッドに押し倒された俺は、心の中でその名を呼ぶ。
「くん……くん。はあぁぁ……キーくんのニオイだあ……理子これ好き、大好きぃ……」
理子は俺の頭を抱きしめ、髪に顔を埋めてくる。
背丈に似合わず発育した胸が、思いっきり俺の顔面に押しつけられている。
ま、参ったな。
「理子ね、こないだ戦った時からキーくんのこと忘れられなくなっちゃったんだぁ。はじめて――本当の恋ってもの、したみたい。キーくんキーくん、好き、好き、大好き……」
理子は俺の眼前まで、童顔を下げてくる。
大きなふたえの目が、幸せそうに俺の目を見つめてくる。

蜂蜜色のゆるいウェーブヘアが俺の前髪と溶けるように絡み合い、その柔肌からは……バニラみたいな香りが、漂ってくる。

頭がボーッとしそうなほどに甘い、甘い、女の子女の子したニオイだ。

「だからキーくん、今は何も考えないで。ただ、理子の『好き』を受け入れてほしいの」

洗脳するように、「好き」を連発してくる理子。だが――

だがな。

そもそも理子は、俺の兄さんを手にかけた女。

ＡＮＡ６００便のハイジャックで、俺たちのことも殺そうとした女だ。

それにこの子は、この部屋にだって……アリアに化け、俺を騙して引き込んでいる。

なりたくないヒステリアモードにだって、ムリヤリさせられた。

信用できるワケがない。

「――冗談がうまくなったな、理子」

そう。今の俺はヒステリアモード。

アリアに化けた理子に接触されたおかげで、そっちに切り替わっている。

今の俺なら、飛躍的に高まった戦闘能力でこの子をはね除けることもできるだろう。

しかし……できることなら、女性の意思を力で曲げたくはないな。

そしてこの感情は多分、理子の計算通り――なんだろうな。

「キーくんひどぉーい。理子の気持ちはウソじゃないもんっ！　その証拠に、そこにあるお洋服……キーくんが着てほしいの、なんでも着てあげちゃうよ？」

理子は床のメイド服やナース服、園児服などのマニアックなコスプレ衣装を示す。

「そのカッコで、なんでも言うことをきいてあげちゃう。くふっ。なぁーんでも、だよ？」

「なら、まず話す時間をくれないかな」

「それはダメな仕様なのです！　いま、理子の脳内もうキーくんでいっぱいなんだもん！　理子はもうスイッチ入っちゃってるの、自分で自分を抑えられないの！」

薄桃色に上気した顔で、理子は俺の下っ腹にまたがったまま上体を起こした。

「だが、理子――」

と言う俺の声を遮るように、理子は自分の制服のタイ留めを、ぱちん。

むしるように、外してしまう。

「心配しないで。理子さっきちゃんとシャワー浴びたからっ」

「キ、キレイ好きなのはいいことだ」

「ごめんねキーくん、強引な理子を許して。理子は悪い子なの。欲しいものは、誰かの物でも盗っちゃう子なの。だって、ドロボーなんだもん！　キーくんがアリアのものでも、盗んじゃう！」

「しかし、理子――」

「なーに？」
「『武偵殺し』は、俺の兄さんのことも盗んだ」
「――まだ、殺したって思ってる？」
くふ、と笑う理子は――
とうとう、セーラー服の白いブラウスをたくし上げようと手をかけた。
「……どういう意味だ？」
トン。
理子の胸元に指を押し当て、俺はその制服を止める。
「あんっ」
触られた理子はそれだけで嬉しいのか、ぴくん、と切なげに目を細めた。
「そのままのイミ。っていうか、お兄さんはキーくんラブになる前の理子の恋人さんだし。あっ。でも安心して。理子、キーくんのお兄さんとは――こういうことしてないから」
それは――
そうだろうな。
兄さんは、こういうことは出来ない人だから。
「だから理子は正真正銘、まだけがれ無き乙女なのでぇーす」
「証拠はあるのか」

「くふっ。このあとすぐ分かるよ」
「違う。兄さんが生きている、その証拠だ」
「――H、S、S」
――！
俺の背筋に、雷のような衝撃が走る。
「理子は誰も殺してないもーん。だから、『武偵殺し』なんていうのは間違ったあだ名。正確には『武偵擲い』かなぁー？」
『武偵殺し』とあだ名された、峰・理子・リュパン4世は――
かつて、何人もの優秀な武偵を消している。
その犠牲者の1人となった兄さんは、シージャックで理子に襲われた。
だがその場で兄さんが今の言葉、『HSS』を口にする可能性は極めて低い。
それは……兄さんが独自に名付けていた、ヒステリアモード――心理学用語での名称をヒステリア・サヴァン・シンドローム（Hysteria Savant Syndrome）と言う――の略称なのだ。
兄さんは俺と同じように、その言葉を他人には厳重に隠していたのに――
――理子が、知っていた。
理詰めで考えれば、それは兄さんが生きている事とイコールではない。
だが、可能性を示すには十分な証拠といえる。

兄さんが生きている。

その、可能性を――！

「はい！　ここで選択肢でぇーす！」

理子は俺にまたがったまま、両手の人差し指で自分の両頬をついた。

「キーくんは、りこりんを今から受け入れますか？　『はい』か『いいえ』を選択してね。『はい』なら、イベントシーンの後で――お兄さんの話をしちゃう。いっぱいしちゃう」

くふっ、と笑った理子は――

再びベッドに手をつき、甘い吐息のかかるような距離にその童顔を近づけてきた。

「キーくぅーん。このまま理子をカノジョにしちゃおうよぉ。理子はとーってもおトクな女の子だよ？　キーくんはいつでも好きな時にこのお部屋に来て、理子に好きな事をしていいの。いつでも待ってる。お外でも理子はＯＫだよ？　いつでも、したい時に、したい場所で、理子に何をしてもいいの……」

誘惑するように、理子はピンクの唇を俺の耳元に寄せ――

「そうすれば、ＨＳＳ……キーくんは『ヒステリアモード』って呼んでるんだっけ？　あのチート状態にも、いつでもなれるでしょ？」

と、囁いた。

さあ――どうする。

どうするキンジ、だ。今度こそ。本当に。
今までの遺恨を理由に理子を受け入れなければ、俺は兄さんに関する恐らく唯一の情報源を失うことになるだろう。
逆に、今ここで――流れに身を任せて、理子を受け入れてしまえば……
（兄さんの……話を……聞ける……！）
ああ、兄さん。
俺の目標であり、恩人であり、しかしあまりにも突然に姿を消し、俺の人生を１８０度変えてしまった人。
ああ――ダメだ。
ダメなんだ。
俺は、兄さんのことになると、正常な判断ができなくなる。
それはヒステリアモードでも変わらない。
理子。
お前はさすが、怪盗リュパンの血を引く女だよ。
お前は俺の、兄さんへの崇拝にも近いこの想いを分かった上で――その選択肢を突きつけたんだろう。
（……クソッ……！）

理子の制服を押し留める俺の指から、つつ、と力が抜けて――

理子が、「やったぁ♪」という笑みを作り。

す、すすす、と、見せつけるように武偵高のセーラー服をめくり上げ、形のいいヘソ、くびれた腰、金色の下着に包まれた豊かな胸が――見えかけた、その時。

理子は急に、不機嫌そうに口を尖らせた。

「……でも理子、ハーレムルートってキライなんだよね」

がっしゃあああああん!!

「あたしのドレイを盗むな!!」

SWATみたいにガラス窓を蹴り破って、神崎・H・アリアが。

ワイヤーを伝って、外から突入してきた。

――ばんっ!

理子は身を捻るようにしてベッドを降りる。

アリアはベッドでワンバンしながらワイヤーを切り離し、アクロバットみたいな動作で、じゃきじゃき!

ひらめく臙脂色のスカートの中から、二丁拳銃を抜いた。

バッ！　ババババッ！
眩いマズルフラッシュと共に、問答無用の.45ACP弾がブッ放される。
ざあっ！
理子は転がりながら銃弾を躱し、舞い上がる無数の衣装の中から――赤いランドセルをつかみ、起き上がりざまに背負った。
「あぁんもー。アリアが出るまで、もうちょっとかかると思ったんだけどなー」
――その一瞬でさらに、でかい懐中時計も拾い上げている。
「この……汚らわしい、ドロボーの一族！　あたしのモノは盗めないわよ！」
モノ扱いされてることはともかく、俺の頭をまたぐように仁王立ちするアリアはなぜか最初っから……かあああああっ。
赤面モード、全開である。
頭から湯気を出しそうな真っ赤っ赤ぶりだな。
これ、ある程度、俺たちの光景を覗き見してたんだろうな。
「アリアぁー？　イベントシーンに別ヒロインが飛び込んでくるなんて……ちょぉーっとシナリオ的にムリあるんじゃなーい？」
ぷうぅぅ。
理子が、ほっぺを膨らましている。

「キーくんだってその気だったんだよ？　アリアだって見たでしょ？　キーくん、最後は理子が制服脱ぐのを止めるのやめた。もう、理子の胸に溺れる3秒前だったんだからぁ」

「お……おぼっ!?」

色恋沙汰が大の苦手なアリアは、わたた、わたわた。

拳銃を落っことしかねない勢いで動揺してる。

何を想像したんだよ、お前。

「そう。女の子の胸の前にひざまずかない男子はいないのでーす。あっ、でも」

にやー。

理子はイヤミったらしくその大きな眼を細め、

「くふっ。アリアには関係ないか」

と、アリアの平らな胸を見た。

アリアは、わあー！

という口になり、ぎぎん！

形のいい眉を思いっきりつり上げる。

言葉が出なかったのは、絶句しているということらしい。

「か、か、風穴！　あけてやる！　あけてやる！　あけてやるからっ！」

がん、がん、ががん！

アリアはお得意の、オリジナル地団駄を踏み始める。
あ、危ないっ、お、俺、頭を踏み割られるぞっ。
「胸だけじゃない。理子は男の子の好きなもの、ゲームでいっぱい勉強してるんだもん。お子様アリアと違って、男の子を喜ばせる知識、いーっぱい持ってるんだからぁ」
無数のコスプレ衣装を示してから、理子は、ぴき。
頭に指で二本ツノを作った。
「それを初めて実践しようとしたのにジャマするなんて、ぷんぷんがおー。だぞっ！」
そして、ぽい。
その手に持っていた懐中時計を、宙に投げる。
「――！」
アリアの目の前で、それが――
カッッッ――――!!
小さな太陽になった。
閃光が、室内の全てを真っ白に塗りつぶしていく。
――やられた！
閃光手榴弾。
アルミ、チタン、マグネシウムの合金粉末を瞬時に燃焼させて強烈な光を放つ、強襲科

ではおなじみの目くらまし兵器だ。音がしなかったところを見ると、改良版らしい。
この閃光をいきなり見せられた人間は、どんな歴戦の猛者でも萎縮する。
なのでその隙に制圧してしまえ――と授業では教わったものだが、今回その閃光を見せられたのは、俺たちの方だ。
「――きゃっ！」
Sランク武偵のアリアも本能には抗えず、きゅっ！
体を縮め、俺の頭の上にしゃがみ込む。
俺が文字通り尻に敷かれてから……数秒して、ようやくアリアは膝立ちになり……鬼の形相で周囲を見回した。
「り……理子ッ！　どこよ!?」
密かにヒステリアモードが補強された俺も起き上がるが、理子の姿は見当たらない。
「扉を開閉する音は無かった。たぶん――」
言いながら窓に駆け寄ると、頭上に、動力つきのワイヤーで女子寮の屋上へと上昇する理子の姿が見えた。
「いたぞ、屋上に向かってる！」
「――追うわよキンジ！　ここで会ったが１００年目だわ、風穴あけてやる！」

非常階段を上りながら聞いたところによると、俺がアリアに化けた理子に呼び出された後……自習室を出た武藤と不知火が偶然アリアとすれ違い、『キンジを女子寮に呼ぶのはいいけど、先生に見つからないようにしろよ』などと話しかけてきたのだという。

不審に思ったアリアは情報科に問い合わせながら女子寮に駆けつけ、寮の監視カメラに映っていた俺を追跡調査して……すぐに、あの部屋を割り出したらしい。

このカンの良さと行動力。

この子もさすが、名探偵シャーロック・ホームズ卿の曾孫といったところだな。

「――理子！」

ばん！

とアリアが蹴り開けた扉の向こうでは――

屋上のフェンスに腰掛けた理子が、子供のように足をぷらぷらさせていた。

夜空に輝く、満月。

月明かりが、理子の笑顔を――どこか妖艶に、照らす。

「あぁ……今夜はいい夜。オトコもいて、硝煙のニオイもする。理子、どっちも大好き」

ちぃ、と、月明かりを反射させたその瞳が短い光の尾を引く。

それは、獲物を前にしたケモノのような瞳。

ハイジャックの時に見た、あの眼だ。

「峰・理子・リュパン4世――今度こそ逮捕よ！　ママの冤罪、償わせてやる！」

アリアは、じゃきッ。

白銀のガバメントを理子に向ける。

そのガバメントの握把に飾られたカメオの女性――アリアの母親・神崎かなえさんは、イ・ウーという集団によって何件もの冤罪を着せられている。

その組織のメンバーを捕らえようと、アリアは世界中を駆け回ってきた。

そして――この峰・理子・リュパン4世は、その組織の一員なのだ。

「やれるもんならやってみな。ライム女」

にやぁー、と白い歯を見せて笑った理子が、ぽん、とフェンスから屋上に降り立つ。

「言ったわね。カエル女」

と、2人はイギリス人とフランス人の蔑称を応酬する。

21世紀のホームズとリュパンによる、英仏戦争の幕開けだな。

横からで済まないが、遠山の金さんの子孫こと……日本も、参戦させてもらうぞ。

6月の重い雲に、月が、遮られた時――

ばっ！

理子が、駆けた。

――速い！

「キンジ！　アル＝カタ戦でいくわ！　離れ際に援護しなさい！」
叫んだアリアが、二丁拳銃を発砲しながら理子の正面に突っ込んでいく。
「くふっ！」
初弾を側転で躱した理子が、屋上の中央でアリアと交錯した。
たんッ！
そしてその場で月面宙返りを切り、アリアの頭上を飛び越える。
がちゃっ――と、理子が背負うランドセルが空中で開いた。
開いた中からは小ぶりな拳銃――ワルサーP99が2丁滑り出てきて、ぱししっ。
理子の小ぶりな両手に握られる。
バッ！
ババッ！
振り返りざまのアリアと理子の銃弾が、お互いの脇を通過する。
閃く銃火が、暗闇をまるでストロボのように照らした。
（アル＝カタ戦か……！）
武偵と武偵の近接戦には、通常の拳銃戦とは全く異なる戦闘技術――アル＝カタというスキルが用いられる。
先月のアドシアード閉会式ではチアに応用されていたが、アル＝カタは元々武術。

防弾服の着用を前提とし、銃弾を打撃技として使う格闘術なのだ。
「――はッ！」
その場でスピンするように振り返ったアリアが、低い姿勢から理子を撃つ。
ひゅらっ。
長いピンクのツインテールが、二重らせんを描いて本体の動きに続く。
理子はそんなアリアのおでこを掠めるようにまた宙返りを切り、くりんっ。
身を捻りながらアリアの背後に着地した。
「くふふっ！　鬼さんこっちら！」
「こッ……この！」
アリアは地面を転がりながら、反撃の銃弾を放つ。
だが――がきんがきんっ！
左右同時に弾切れを起こした銃が、スライドをオープンさせてしまった。
アリアのガバメントは理子のワルサーよりパワーでは勝るものの、装弾数で劣るのだ。
「――はっ！」
が、アリアは新体操のような動作で、チビな身体を伸ばしつつ側宙を切り――
じゃきじゃきんっ！
同時に、スカートの中に隠していた予備弾倉を再装填していた。

「かわいー！　戦うアリアってかわいー！　アリアかわいいよアリア！」

早口言葉のようにそんな事を言った理子（りこ）は――

――笑って、いた。

アイツ。

戦いを、楽しんでやがる。

強襲科（アサルト）にも何人かいたが、あのアドレナリンに酔った表情。典型的な戦闘狂（ガンモンガー）だな。

「遊ぼ遊ぼ、おチビちゃん、もっと遊ぼっ！　くふふふっ！」

「こ……このおっ！」

銃弾が飛ぶ線のような光が、お互いの身体（からだ）を捉（とら）えようとせめぎあう。

銃口から放たれる光の短剣は、それでも相手に当たらない。

こんなハイレベルな、しかも二丁拳銃（けんじゅう）同士のアル＝カタ戦――見たこともない。

大したヤツらだ。動物番組に興奮してソファーで跳ねてたアリア、教科書にギャルゲーの同人誌を重ねて読んでた理子と……それぞれ、同一人物とは思えないな。

そしてここから見る限り、2人は互角。

発砲音が――止（や）み。

手持ちの弾を全（すべ）て撃ち尽くしたらしい2人が、一旦（いったん）、距離を取った。

くるくるくるくるッ、とそれぞれ風車のように両手の拳銃を回し――サッ、とスカート

の中のホルスターに収めると……

じゃき、じゃき。

鏡像のように、2本の小太刀と2本のナイフを抜く。

「あんたブサイクだから、いま気づいたんだけど」

アリアがちょっと背を逸らし、理子をムリヤリ見下ろすような視線を作って言う。

「髪型、元に戻したのね」

さっき、おチビちゃんと言われたことに――

皮肉で言い返してやる、ということなのだろう。

アリアは先日のハイジャックで自分が切断した、理子のツーサイドアップのことを持ち出した。

今の理子は改めて髪の毛を結い、髪型を元に戻している。

「よく見ろオルメス。テールが少し短くなった。お前に切られたせいだ」

男喋りで言った理子に、アリアはわざとらしくほほほと笑った。

「あら。ごめんあそばせ」

「言ってろ、チビ」

「何よブス」

「チビチビ」

「ブスブスブス！」
が……ガキ同士のケンカになっちまったな。急に。
「チビチビチビチビ」
「ブスブスブスブうっぷぇ！」
アリア、舌かんだか。
と心の中でツッコミつつ、俺は、そろそろか……と。
腰のホルスターから拳銃を抜き、ポケットからバタフライ・ナイフを取り出した。
なってからしばらく経ってはいたが、スパッツも無しで派手なアル＝カタを繰り広げてくれてしまった2人のせいで……ヒステリアモードは、まだ健在だ。
今のやり取りでお互いしか見えなくなったアリアと理子が、ざっ――！
と疾風のように距離を詰めた、その中間に。
俺は2人の背丈に合わせるため、片膝を突きながら――
――割り込んだ。
ギィイインッ！
アリアの日本刀が、俺の右手のバタフライ・ナイフの峯と切り結び。
同時に、左手のベレッタを理子の制服の下――脇腹にそっとあてがう。
「――キンジ!?」

アリアは犬歯をむいて、俺の行動に驚きの声を上げた。
理子は、フンっ、と鼻を1つ鳴らす。
俺は……
2人のどちらにも視線を合わさず、少しだけ、うつむいてみせた。
「――悲しいよ」
普段の俺とは違う、低く憂いを帯びた声。
はっ――
というアリアが息を呑む音は、ドキン、という心音が聞こえそうなほどに明瞭だ。
「キ、キンジ……！　あんた、また……？」
ヒステリアモードを見たのは4度目という事もあってか――
アリアは、俺の変化に気づいてくれたようだった。
そして条件反射的に、すぐさま頬を赤らめ始めている。
そんなに恥ずかしい存在なのかな。ヒステリアモードの俺は。
「今は堪えてくれ、アリア。それに――愛らしい仔猫同士のケンカを鑑賞するのは、俺の趣味じゃない」
とアリアを流し目で見れば、わぐ、わぐ。何か言おうとして、でも言えなくて、の口をしている。

「……こ、こね、こね、ね……？」

ノドの奥から漏れ聞こえてくる声は、言葉になっていない。

刀に籠もる力も、へにゃへにゃ、と抜けている。

まあ……この子はこれでよし、だな。

「――理子」

と呼びかけるが、理子は応えない。

「本気じゃない恋も、本気じゃない戦いも……味気ないモノだとは思わないかい？」

理子は、明らかに本気じゃなかった。

本気だったなら――あのハイジャックで使った、髪で武器を操る『双剣双銃』を出してアリアをもっと苦しめたハズだ。

一体、どうしたんだい？

という俺の視線に――

理子は少し淋しげな目つきを返してきた。

そして……とん。

俺とアリアから一歩退き、ぽんぽん、とナイフを頭上に放りなげる。

「半分ハズレ。理子、キーくんには本気なんだもん」

理子は背中のランドセルを振ってカバーを開け、落ちてきた2本のナイフを見もせずに

中に受け止め――頭を振って、カバーを閉じた。
ふぁさ。
ゆるい天然パーマの髪が、柔らかくなびく。
「でも、半分アタリ。今の理子は万全じゃない。だから、アリアとは……まだ決着つける時じゃないんだよ」
「そうかい」
俺は膝を伸ばし、カチャッ――
バタフライ・ナイフを手のひらの中で回転させ、刃を収めた。
「――アリア。理子と戦っちゃダメだ」
「キ……キンジ!?　あ、あんた理子に何されたの!?　――どうして止めるのよっ！」
がう！
と犬歯をむいて怒るアリアは、俺が理子に寝返ったと早合点しているようだ。
「アリアを犯罪者にしたくないからだよ」
「さすがキーくん！　あったりー！　分かってくれちゃった!?」
理子はぽんぽん手を叩きながら、その場でくるんと一回転した。
ふわっ。
制服のプリーツスカートが、アリアを茶化すように広がる。

「理子とキーくん、カラダだけじゃなくてココロも相性ぴったりだねー！」

ねー、と首を少し横に傾けて俺に笑いかける理子。

アリアは……俺と理子だけが分かり合っているような空気に少なからず戸惑いを覚え、焦っているような表情になった。

「……犯罪者……って、どういうことよっ」

ぎろ、と赤紫色の眼も鋭くしている。

引いた刀はまだ鞘に収めていないが、ヒステリアモードの俺の意見には一応、聞く耳を持ってくれるらしいな。

「司法取引、だろう？　理子」

「あったりー！　そうでぇーす！　理子はもう4月の事件についてはとっくに司法取引を済ませているんですよー、きゃはっ！」

――司法取引。

アメリカではおなじみのこの制度は、犯罪者が犯罪捜査に協力したり共犯者を告発することで、罪を軽減――もしくは無かったことにできる制度だ。

これは法の公正さを損ない、偽証や冤罪を生み易いなどのリスクを伴う危険な制度なのだが……増加する犯罪に司法が対応しきれなくなった日本でも、近年、導入された。

「つまり理子を逮捕したら、不当逮捕になっちゃうのでーす！」

ちっちっち、と立てた人差し指を口の前で振る理子に……
アリアはぎりぎり、ぎりり。
歯ぎしりして、二刀流の刀を怒りに震わせた。
「ウソよ！　そんな手にあたしが引っかかるとでも――」
「ウソかもしれないが、本当かもしれない。俺たちはここでそれを確かめられない」
そのアリアを、俺が制止する。
もし、理子が本当に司法取引を済ませていた場合――これ以上戦えば、俺たちには暴行罪・不当強襲罪・不当逮捕……いくつ罪が重なるか、分かったものではない。
万一それでこっちが逮捕・起訴されることになったら、アリアはかなえさんを助けられないし、俺も理子に兄さんの話を聞くどころではなくなってしまうのだ。
それは、アリアも分かっていたらしく……
ぐぬぬうううううう。
悔しそうな声をノドから出しつつも、なんとか黙ってくれた。
（アリア、ごめんな）
司法取引のこともあるが、何より理子は――兄さんの事を知っている。
俺がお前を制止したのは、そっちの理由の方が……済まない、正直、大きいんだ。
ヒステリアモードが解けてきたのを感じつつ、そう心の中で懺悔（ざんげ）していると……

びしっ！

それでもアリアは、右の刀を突き刺すように理子へと向けた。

「でも、ママに『武偵殺し』の濡れ衣を着せた罪は別件よ！　理子！　その罪は最高裁で証言しなさい！」「いーよ」「イヤというなら、力ずくでも……って……え？」

きょと。

アリアはセリフの途中で割り込んだ理子の声に、その紅い瞳をまんまるにした。

「証言してあげる」

「ほ……ほんと？」

再び言った理子に、アリアは疑うフリをしながらも嬉しさを隠しきれていない。

基本的に人の話をすぐ信じやすい子なんだよな、アリアは。

悪い男に目をつけられたりしたら、だまされて落ちるところまで落ちるタイプだろう。

「ママ……アリアも、ママが大好きなんだもんね。理子も、お母さまが大好きだから……だから分かるよ。ごめんねアリア。理子は……理子は……」

そこまで言うと理子は顔を伏せ、

「お母さま……ふぇ……えぅ……」

ぽた。

ぽたた。

足元に、きらきら光る涙を落とし始めた。
「……ふえぇえぇえぇえぇえぇ……！」
理子はいきなり、泣き始めたのだ。
ぐじぐじ、と、手の甲で目元からあふれる涙を拭っている。
そんな理子に、アリアは……
「え……えっ……えっえっ？」
自分の目の前で何が起きているのか分からず、オロオロ。
これ、あたしが泣かしたの？　って顔で困り果ててる。
「ちょ、ちょっと。なに泣いてんのよっ。ほ、ほら……何よ。ちゃんと話しなさい」
制服の背に寸詰まりの日本刀を収めると、アリアは泣きじゃくる理子に母性でも目覚めたのか……なだめるような口調になってる。
本当に騙されやすい子だな。
おい、よく見てみろアリア。いま理子、口の端がニヤッて笑ったぞ。
だが――まあ、何にせよ、とりあえず闘争の気配はこれで完全に霧消したな。
とりあえずこの場は、一件落着だ。
（しかし理子……お前は一体、何が目的なんだ？）
と、俺は安堵の息をつきながらも、アリアに背中を撫でられている理子に眉を寄せる。

理子はなぜ、俺とアリアのいる武偵高にノコノコ帰ってきたのか？

――そんな俺の疑問に答えるように、理子はえうえう泣きながら語り出した。

「理子、理子……アリアとキーくんのせいで、イ・ウーを退学になっちゃったの。しかも負けたからって、ブラドに――理子の宝物を取られちゃったんだよぉー」

ぴりっ……

と、周囲の空気が張り詰める。

振り向けば、アリアが――今の一瞬で、紅い目に殺気をみなぎらせていた。

「……ブラド。『無限罪のブラド』……!?　イ・ウーのナンバー2じゃない……！」

ナンバー2……？

「そーだよ。理子はブラドから宝物を取り返したいの。だからキーくん、アリア、理子をたすけて」

きらきら、と涙に濡れた瞳を俺たちに向ける理子。

「……たすけて……って。何をしろっていうんだ」

と訊くと――

理子はごしごしと手の甲で目元を拭い、「泣いちゃだめ理子。理子は本当は強い子。いつでも明るい子。だから、さあ、笑顔になろっ」などとわざとらしく独り言し、す、と雲間から再び現れた満月を背に――

「キーくん、アリア、一緒に――」
にやっ、と笑顔になって――
言った。
「ドロボーやろうよ！」

2弾　武偵高の理子

武偵少年法により、犯罪を犯した未成年の武偵の情報は公開が禁止されている。
そのプロフィールをやり取りすることは武偵同士の間でも禁忌とされ、知る事ができるのは被害者と限られた司法関係者のみ。
マスコミにも公開されないため、報道でも『A少年』とかされるあれだ。
これは明らかな悪法で改正も検討されているが……人権上の配慮がどうのこうのでダメなんだそうだ。絶対に。
だから俺とアリアも、あのハイジャックの犯人が理子だとは誰にも言っていない。
2人揃って納得いかねぇんだけどな。
で、翌日の一般科目の授業が終わったあと――
「たっだいまぁー！」
いきなり例のヒラヒラ改造制服で教室に現れた理子に、2年A組は、わぁー！　と、超盛り上がった。
（あ、アイツめ……）
苦々しい気分でさりげなく探偵科のクラスメートに聞いてみたところ、理子は4月から

長期の極秘犯罪捜査でアメリカに行っていて、昨日帰ってきた……ということに、なっていた。

理子が自分でそういう情報を流したんだろう。

何にせよ、手を打つのが早いヤツだよ。

「みんなー、おっひさしぶりー！　りこりんが帰ってきたよー！」

教壇に上がってくるりんぱっと回った理子に、クラスのアホどもが喜んで集まっていく。

理子のそばに駆け寄った順番を覚えておこう。それがA組のアホランキングだ。あと腕を振りながら「りこりん・りこりん！」などとコールしてる奴らとはもう友達をやめよう。

……とはいえ、まあ……

理子が『武偵殺し』だったという事を知らないんだから、あいつらがテンションを上げるのは——分からないでもない。

理子は外見だけ見れば美少女だし、あのヒラヒラでフリフリな改造制服も一部の男子が見れば泣いて喜ぶカッコらしいのだ。俺にはその良さが全く分からんがな。

「理子ちゃんおかえりー！　あーこれなにー？」

「えへへー。シーズン感を取り入れてみましたー！」

理子は赤ランドセルを背負っていて、その側面にてるてるぼうずをぷらぷらさせている。

イタイ奴め……と俺は眉を寄せるが、それも女子には「かわいー！」と大ウケだ。

ここがまた、困った点である。

理子は、クラスのマスコット的存在。つまり人気者なのだ。

性格は明るいし、おバカキャラで知られているので男子にも女子にも警戒心なく受け入れられている。

これではたとえ俺が理子には気をつけろと警告したところで、「昼行灯」とか「ネクラ」とか最近は不名誉なことになぜか「たらし」などと女子に呼ばれている俺の言う事より、みんなはあの偽りの笑顔に騙されて理子の方につくのだろう。

つまり、クラスは理子の味方……か。

俺とアリア、着実に外堀を埋められてるな。

「くふっ。キーくんもおいでよー！」

みんなにちやほやされながら手招きしてくる理子に、俺はフンとソッポを向いてやる。

ばき、という音がしたので隣を見ると、アリアが机に顔を突っ伏して怒りに震えながらエンピツをへし折っていた。

アリア、分かるぞその気持ち。

だがモノにあたるな。

モノは大事にしろ。

ドレイの俺も、お前の中ではモノなんだろうからな。

で、放課後に帰宅した俺とアリアは……
「あー腹立つはむぅ！」
「全くだ」
「理子にはいずれ、オシオキが必要ねはむぅ」
「おう。やれ、やっちまえ」
「そしてはむ、はむぅ、風穴地獄にはむぅ」
「なんだか凄そうな地獄だが、おいアリア。そのくらいにしとけ。腹壊すぞ」
「うるふぁい！」
ソファーに腰掛け、1はむぅ＝1ももまんのペースでヤケ食いをするアリアが――英国貴族とは思えない口の周りに餡をつけまくりの顔で怒鳴った。
八つ当たりでその風穴地獄とやらに落とされても困る。ので、俺は松本屋のももまんをわんこそば状態で食い続けるアリアの腹の心配は止めることにする。
アリアは、がさがさ。がささっ。
カラになった松本屋の紙袋をちっこい手で探ると、ぐしゃぐしゃ！　と丸めてうしろにポイした。
おい。ゴミ箱、お前のすぐ脇にあるだろ。

という言葉がノドまで出かかったが、口に出すほど俺も命知らずではない。

ぐい！　と腕組みして、ぐぐい！　と黒ニーソのあんよを組んだアリアは、噴火寸前の活火山、メルトダウン間際の暴走原子炉といったご様子だ。

L字型ソファーの、アリアから最も離れた部分に腰を下ろした俺は、腫れ物に触るような気分で――

「で、いいのかお前は。理子は俺たちに盗みの片棒担ぎをさせるつもりだぞ」

と、溜息混じりに尋ねる。

あのあと理子が説明したところによると、まずは理子が独自に下調べをするから俺達は1週間ほど待機していろ――との事だったのだが……

「よくないに決まってるでしょ。リュパン家の人間と組むなんて、ホームズ家始まって以来の不祥事になるわ。けど、今は状況が状況よ」

アリアが首を左右に振ると、しゃら、しゃら。

ピンクの長いツインテールが曲線を描いて揺れた。

「理子がママの裁判で証言するって言うんだから……これも必要悪と割り切って、本当にやってもいいって思ってる。それに、聖書にも書いてあるでしょ。汝の敵を赦せ、って」

汝盗むなかれ、とも書いてあるがな。

「柔軟なのは結構なことだけどな。泥棒はつまり窃盗罪だ。前科一犯、つくんだぞ。まぁ

武偵なんて、その辺が身ぎれいなヤツの方が少数派だけどな……それも覚悟の上か？」

違法改造のベレッタを提げてる俺が言うのもアレだがな。

「ああ。そこ。そこは心配しなくていいのよ。これは犯罪にはなり得ないわ」

「……何でだよ？」

「理子が言ってた『ブラド』ってのは、イ・ウーのナンバー2――相手がイ・ウーなら、もはや法律の外。仮に窃盗容疑で逮捕されても、起訴されないわ」

「ど……どういうことだよ？」

尋ねるが、アリアは頭のうしろで腕組みなんかをして……それ以上何も言わない。

3秒……5秒……

沈黙が流れる。

「……っていうかな」

俺はテーブルに身を乗り出す。

「いいかげんその、イ・ウーとやらについて教えろよ。まあ、おおかた秘密結社か何かだとは思うが……お前、俺がイ・ウーの事を聞くといつもすぐはぐらかすのは何でだ。時・・・

「パートナーだから教えられないの」
「なんだそれ」
「聞いたら、あんた、消されるわよ」
消される……だと？
なんだそれ。
「……殺される、って意味か？」
「それで済まない。戸籍、住民登録、銀行口座、レンタルショップの会員情報に至るまであんたの痕跡は全て消える。あんたは存在しなかったことになる、この国に」
「何だって……？」
「イ・ウーの事はイギリスでも王国A機密。日本でも特Ｉ級国家機密だわ。ヘタに知って公安0課や武装検事に狙われたくないでしょ？」
……公安0課。武装検事。
日本で一番物騒な単語が出てきたな。
どっちも、国内最強の仕事人じゃねえか。職務上で人間を殺しても罪に問われることのない……いわゆる『殺しのライセンス』を持つ、闇の公務員だぞ。
アイツらの強さはシャレで済まない。
もし狙われたら——仮にヒステリアモードの俺でも、危ういかもな。

「そんなことよりね、キンジ」
俺が黙っていると、アリアは今の会話を無かったことにするカンジで続けた。
「あんたはどうするの。やるの？」
「あ……ああ」
なんか流れ的に、イ・ウーの事はムリヤリ流されちまったな。
「ふーん。なんで理子を手助けするのよ」
「それは……お前に関係ないだろ」
「……カワイイ子に泣きつかれたから、助けるってわけ？」
「なんだよそれ。それはどちらかと言えばお前だろ。泣いて済むなら武偵はいらない」
「じゃあ、なんでよ」
俺が理子に力を貸すのは――兄さんの情報のためだ。
俺は、兄さんは、去年の浦賀沖海難事故で死んだと思っていた。
しかしそれが、生きている可能性が示唆されている。昨夜の、理子の話で。
……兄さんの生死を、確かめたい。
そして生きているなら、なぜ兄さんが突然姿を消し――その結果、俺が人生を１８０度変える事になったのか、直接会って、確かめたい。
そのためには、唯一の情報源――理子に協力するしかない。

それが、今の俺の立場だ。

「キンジ？　どうしたの」

俺がまた黙ってしまったので、アリアが少し眉を寄せる。

「あ、いや……お前には関係ないことだ」

兄さんの事は……俺の、個人的な問題だ。

それに俺の中では、誰にも触れられたくない心の深い所にある悩みでもある。

たとえパートナーにでも、気軽に話したくはない。

「――知ってるんだから」

不機嫌そうなアリアのアニメ声に、俺は顔を上げた。

知ってる……？

何をだ。

「ふん。あんたが言わなくてもだいたい分かるわよ。理子はブリッ子だから、男子ウケがいいもんね。むっ、むっ、胸もあるし」

な……

なんか、アリアが……

ヘンなことを言い始めたな。

「武偵は闇、毒、女に堕ちる。あんた……昨日の夜、あの部屋で、り、り、理子に……」

ぎろろろろ、とスゴイ睨み目になりながら、アリアは、きゅいいいいーん。
何を想像したのか、電源をＯＮにしたニクロム線みたいに一気に赤くなった。
そして、びしっ！
キバみたいな犬歯をむき、『犯人はおまえだ！』ってカンジに人差し指を突き出す。
「へ、へ、へンなことされて、トリコになったんでしょ!!」
……
……
……はい!?
「ど、ど、どんなハレンチなことされたのよ！　包み隠さず白状しなさい！」
「なんだそれっ」
「ちゃ、ちゃんと話しなさいっ！　な、な、なにされたのっ！」
「待て、待て。なんでお前がそんなこと聞きたがるんだ」
「え、あ、それはその、う……うるさいうるさい！　こッ――このピンク武偵！」
色的にピンクなのはそっちだろ、というツッコミは置いとくとして、ぎー！　と両手を振り上げたアリアは、やはり理子が俺にまたがっていた光景をノゾキ見ていたらしい。
そして、究極的にありえん勘違いをしてるのだ。
「あのなぁ……どこから見てたのか知らないが、俺と理子は別に何もしてない。誤解だ」

「ウソいいなさい！　ふふふ2人で、ベベベッドに入ってたじゃない！」
「あ、あれはムリヤリ乗っかられたんだ」
「あのねキンジ、人間には足ってもんがあるのよ？　自分で歩いていかないと、ベッドのそばまでは行けないの！　あんたは少なくとも理子の部屋の奥まで入って、ベッドサイドまで行った。それはマチガイないわよね!?」
「そ、それは……そうだが」
「ほらみなさい！　どーして？　どーしてあんたはホイホイそんなとこまで行ったわけ？　どうせいやらしい事でも期待したんでしょ!?　ちょっと理子に胸があるからって、鼻の下伸ばして――サイっテー！　ほら、申し開きがあるんなら言ってみなさいよっ！」
そ、それは……
まあ、確かに、あの時の俺は導かれるままに部屋の奥――ベッドサイドまで歩いた。
だが相手が理子だと分かっていれば、そんな所までお邪魔はしなかったろう。
あのとき、理子は――アリアに変装していたのだ。
いや、じゃあアリアだったら俺は部屋の奥までホイホイついてくのか？　と言われればそこは議論が分かれるところだが、いやいやそれもマズいぞキンジ。「アリアだと思ったから一緒にベッドまで行った」なんて答えたら、ブッ殺されるだろ。
――答えに窮した俺は、

「あー、っていうかだな。なんでお前がそんなことに腹立てるんだよっ。百歩譲って何かあったとしても、お前には別に関係ない事だろ!?」

必殺、逆ギレで返すことにした。

「関係あるわよ！」

慌てたような仕草で、握った両手を胸の辺りに寄せるアリア。

……？

俺が理子にまたがられてたことが、なんでアリアに関係あるんだ。

と俺が眉を寄せる横で、アリアは、ぎゅ～～～～っ！

駄々をこねる子供のように目をつむった。

「あんたは、あたしだけのものなの！」

アリアの、セリフに――

びょん。

心臓が1つジャンプして、そのまま止まるかと思った。

いや、本当に何秒か止まったかもしれない。

い、いきなり何言ってくれちゃってるんだ。この子。

「――どんな条件を出されたのか知らないけどっ！」

ぎろろろっ。

アリアは俺を涙目になって睨むと、ぼぼぼぼとさらに赤熱化しながら、

「あんた絶対、理子に騙されてるわよ!?　こないだ白雪が持ってきた本に書いてあったけど、お、女の子は、ほん、本当に好きな男には、つ……付き合ってもいない段階では、あ、あんなにベタベタできないものなんだからねっ！」

超つっかえつつも、苦手なはずの恋愛分野の事をべらべら喋り出した。

一体……どうしたんだ。

セリフの端々で視線を泳がせるし、妙な汗もかきだしてるし、なんだよそれ。

熱でもあんのか。

「ど、どういう理屈だ。話が見えないぞ」

「リュパンの一族は、世界中から選りすぐった少数精鋭のパーティーで泥棒を働くことで有名なのよ！　理子があんたのこと『相性ばっちり』とか言ってたのは……きっとあれ、あたしのドレイを色じかけで横取りして、自分が将来作るパーティーの一員にしようとしてるんだわ！　そんなの絶対、絶対、ゆるさないんだから！」

がうっ！　と犬歯をむくアリア。

「あんたは、あたしだけのドレイなの！　だから他の人に仕えちゃダメなんだからね！

そこんとこ、ちゃんとわきまえときなさいよ!?　いい!?」

あ、ああー。そうか。

『あたしのもの』って。そういうことか。

俺はドレイ＝所有物、ってことか。そういえばそうでしたね。

ったく、心停止しかけて損したぞ。妙な独占欲を発揮させやがって。

「と、とにかくまあ、1回ぐらいは許すけど、理子とはあれっきりにしときなさいよ？裏切ったら風穴あけまくって人間レンコンにしてやるからねっ！」

人間レンコン。

また新しいアリア用語が出てきたな。

そろそろ情報科（インフォルマ）に頼んでｗｉｋｉでも作ってもらうか。

「だいたいあんたは、ネクラなふうに見えてけっこうたらしなんだから。し、白雪のときだって……朝から晩まで、イチャイチャイチャイチャ……」

アリアはネチネチと、俺の不名誉な最新ニックネームに加えて過去の話まで出してきた。

これ、理子の事でイライラしてるのの八つ当たりも入ってるな。完全に。

とうとう――アリアがギロッとこっちを睨み、

「し、白雪には、キ、キキ、キスまで許して……あ、あたしにも、し、したクセに……」

がるるるる

とライオンっぽい威嚇音を鳴らし始めたので、俺は保安上の理由から「ションベン」と宣言しソファーを立った。

「うー梅雨寒だな」

などと呟きつつ、さりげなく安心・安全の防弾制服も羽織っておく。

うむ。

2か月に及ぶアリアとの共同生活で、俺の中にも危機管理能力が養われてきたな。

（白雪といえば……あいつ、いま島根だっけ？）

トイレに避難したかわいそうな俺は、白雪お手製のドアノブカバーをぼんやり見ながら考える。

白雪は――またS研の合宿で、出雲大社だかどっかに行っている。

で、明日の午後、帰ってくるという。

ちなみに白雪をアリアと仲良くさせてお守り役に仕立てようという淡い夢を抱いた俺が先月、ドレイ2号が合宿ばっか行っててていいのか、不公平だろとアリアに文句を言ったら、白雪とあんたでは育成方針が違うからいいのと一刀両断されている。

曰く、白雪は特技の超能力を鍛えるのが重要で、その育成はアリアじゃできないから、武偵高のプロに任せるとの事だ。

つまり調教師アリア様は俺の育成に専念して下さるわけだ。ありがたすぎて目頭が熱く

なるね。俺じゃなくて自分の背の育成とかをしてくれませんかね調教師さま。

一方の白雪も俺の部屋に出入りする権利を与えられる分にはアリアと組むことに異存はないらしく……

元々犬猿の仲だったアリアと白雪は今そうやって、ある程度の距離を保ちつつ俺を包囲するようにつるんでいるのだ。

一言でまとめよう。

――いい迷惑だ。

（だが……アリア。理子と組むのは、白雪と組むのとワケが違うぞ……？）

俺は腕組みする。

白雪とアリアのケンカはそもそも、なんだかよく分からん白雪の私怨が引き金だ。

それに何だかんだ言っても白雪とアリアは武偵と武偵。一時仲違いしようと、いざ魔剣とジャンヌ・ダルク30世との戦闘になった時にはちゃんと連携できていた。

しかし――

理子とアリアは、犯罪者と武偵。

代々対立してきた、世界的な大泥棒と名探偵の末裔同士だ。

それに裁判で証言すると言ってはいるものの……理子はアリアの母親に冤罪を着せた、アリアにとってはカタキにも等しい存在である。

そんなヤツの依頼……『大泥棒』とやらを、物事を我慢することが幼児並みにできないアリア（アイツ）が、冷静にこなしきれるだろうか？

（……まぁ、ムリだろうな）

普段の様子を見るに、アイツにそこまでの了見があるとは思えん。

つまり今回、俺（おれ）が立つべきポジションは……アリアと理子（りこ）をミッション完了までうまく組ませて、作戦を成功に導くことだろう。

（あの『双剣双銃（カドラ）』２人を、俺が……かよ……）

できんのか。そんなこと。

だが……できるできないじゃない。

やるしかない。

正直なところ、いくらアリアのパートナー役をやっているとはいえ――俺にとっては、イ・ウーとかいう組織の事は最終的には他人事（たにんごと）だ。

だが今回の件だけは、理子の件だけは、他人事で済まされない。

兄さんの情報が報酬である限り、作戦全体がポシャってくれては困るのだ。

だから、やるしかない。どんなに危険でも、な。

……はぁ。

――また、命懸けだな。

翌日、武偵高では中間テストが行われた。
午前中ぶっ続けで行われた一般科目のテストを終えた俺たちは、昼休みを挟み、いまはスポーツテストを受けている。
そのテストも8種目すべて終わらせた俺は、テスト会場となった第2グラウンドの隅に腰を下ろした。
見渡したグラウンドの光景に、頭痛がしてくる。
（……普通じゃねえ……）
やってる事は普通の50m走や反復横跳びだ。そこまではいい。
だが、集まった先生・生徒たちがこれっぽっちも普通じゃないのだ。
……まず、曇り空の下でホイッスルを吹いたり竹刀を振り回したりしている試験監督の教師ども。
香港マフィアの首領の愛娘で口癖が「死ね！」と「殺す！」、人間バンカーバスターのあだ名を持つ強襲科の鬼教官・蘭豹。その蘭豹と親友で、授業中の今もタバコらしき何かを吸ってラリっている尋問科の綴。背後に立ったというだけの理由で生徒に手刀を叩き込み骨折させた事のある、狙撃科の南郷。諜報科のチャン・ウーに至っては、来てはいるらしいのだが声だけ聞こえて姿が見えない。もう……助けてください。

そんな先生たちに教えを授かる生徒たちが平凡に育つハズもなく――

走ったり跳んだりしている生徒たちも、これっぽっちも普通じゃない。

まず見るだけでも危険なのはC研、特殊潜入捜査研究科の女どもだ。C研とは要するに色じかけの技術を磨く学科で、絶世の美少女しか入科できない上に、日焼け跡で高校生とバレないようハイレグのブルマなんかをはいてやがるから目のやり場に困る。

こんな所にまで帯銃してくる強襲科や諜報科の生徒。体育着は自由だからと、普段から羽織っているマントをつけたまま1500m走をしてる超能力捜査研究科の生徒もいる。同じくS研のアイツなんか、いま垂直跳びしたあと一瞬ちょっと浮いてなかったか？

このように……

見てるだけで気が滅入ってくる、いろんな意味でアブない連中の吹きだまりなのだ。武偵高とは。

改めて目の当たりにすると、一刻も早く普通の高校に転校したいという自分の目標が強く思い出されるな。

……しかし……

その目標も、今後は見直さなければならなくなる……かもしれない。

そもそも俺が武偵を辞めたくなったのは、兄さんが非業の死を遂げたからで。

もし、理子が言うとおり兄さんが生きていたら。

俺は――
どうするんだろうな？
――パァン！
というスターターの音に視線を向けると、そこでは、たったったたたーっ、とアリアが50m走をやっていた。
『2－A　神崎』と書いた丸首の体育着に、ショートパンツをはいている。
揺れると痛いらしく、ツインテールを解いてロングにした髪をなびかせて走るアリア。
その姿に、ふっ、と俺の口から苦笑が漏れる。
ちっけぇ。
運動会の小学生みたいだな。あれ。
だがまあ、俺は……
ああやって等身大の女子らしい事をしてるアリアのことは、そんなに嫌ってはいない。
身長と胸さえあれば、いつC研からスカウトが来てもおかしくない美少女だしな。
だが……ゴールした後、強襲科の後輩に預けていた拳銃を左右のふとももに装備し直すアリアの姿が、彼女が普通ではない、戦う少女なのだということを俺に告げてくる。
――あいつは――どうするんだろうな。
自分の母親、神崎かなえさんを救い出せたら……その後。

また武偵として、働くんだろうか。
普通の高校に通ったりは、しないんだろうか。
もし……
もし俺とアイツが同じ普通の学校に通ったりしたら、どうなるかな。
普通の男子高校生と普通の女子高生として、出会い直せたり――
などとぼんやり考えていたら……目の前を陸上部と思われる女子のスパッツが横切ったので、俺は持っていた体力テストの結果シートに視線を逸らした。
チクショウ。武偵高さんよ。体育は男女別にしてくれよな。マジで。
まかり間違ってヒスったりしたらどうしてくれんだ。
と、そのまま、嘆息するほど高2平均をなぞっている通常モードの自分の運動力を見ていると……
シートに影が差した。
「？」
と顔を上げると、俺と頭と頭をくっつけるようにして、
「うっわ。なにそれ。バカキンジモードのあんたって、体力までバカになるのね」
ロードレーサーが使うようなプラボトルから、ちゅー、とスポーツドリンクで水分補給しながらのアリアがイヤミを垂れてきた。

イラッ。

「っせーな。現文とか古文じゃウトウトしてるくせに、体育だけ元気になりやがって」

「……よっと」

アリアはミニあんよを大きめに包むバッシュみたいなスニーカーの踵を返し、俺の隣にすとんと体育座りしてきた。

ふわ。

少し汗をかいたせいか、クチナシみたいなその身体の香りが女っぽく漂ってくる。

俺は……ちょっと座り直して、距離を取る。

アリアは割と、こういう距離感に無頓着なヤツだ。

一言で言って、困る。

それでなくても男女2人っきりで並んで座ってるヤツなんてまずいない。

家で一緒にテレビ見てるんじゃねーんだ。

TPOってもんを考えろよな。

「……ずいぶん張り切って走ってたな」

「そう見えた？」

「誰かにいいところを見せて、認めてもらいたかったのか？」

「なにそれ」

……

……あれ？

今のは、俺も自分に……なにそれ、だ。

なんでか、妙なことを聞いちまったな。

……なんでだ？

アリアは膝小僧を抱え、ちょっと傾けた顔をそこに乗せて少し考えている。

そして俺と視線が合うと、

「まあ、私の能力は――パートナーが認めてくれれば、それでいいわ」

と、言った。

……？

これも……あれ？　だな。

これ、昔のコイツだったら『別に誰も認めてくれなくていい』と来る所だったのに。

体力テストと身体検査のあと……

時間割によれば、俺の所属する探偵科は自由参加で生物の小テストを受けられることになっていた。

先にテストを受けた武藤のリーク情報によれば、この試験は通常カリキュラム外の内容

2-A
神山奇
2-

について行われるが――超楽勝で、0・1単位つくらしい。

0・1単位とはいえ、俺にとってこれはとても貴重だ。

武偵高では生徒が仕事で授業に出られないことが間々あるため、単位制で進級・卒業の可否を決めている。

で、俺は強襲科にいたころ民間の依頼を受けてかなり欠席していたこともあり……その単位、特に生物がちょっと不足しているのだ。

こういう救済措置みたいなテストは、着実に受けておかねばならない。

というわけで制服に着替え、映画館みたいに広い情報科棟の大視聴覚室にお邪魔すると……この時間は探偵科と救護科だけがテストを受けられるらしく、ガラガラだ。

何だ。なんか妙に女子が多いな。やだな。

俺はプリントを受け取ると、女を避けて一番後ろの列に座る。

この列は、俺しかいない。

よしよし。

で……プリントによれば、これから武偵高の非常勤講師が監修した『遺伝学』についてのDVDを上映するとある。

それをちゃんと見て、問題文の空欄にあてはまる内容を書き取りせよ、だとさ。

なるほど楽勝そうだ。

「ほらほら、皆さん。騒がないでちゃんと着席してください。ほら、ＴＰＯをわきまえて」

ぽんぽんと手を叩きながらの、先生の声。

見れば、何人かの女子が教壇を囲んできゃあきゃあ盛り上がってる。

その中心にいるのは――

救護科の非常勤講師、小夜鳴だ。

なるほど。この小テスト、どうりで女子がいっぱい来てるわけだ。

小夜鳴は海外の大学を飛び級で卒業したとかで、どう見ても20歳ぐらいなのに武偵高の非常勤講師をやっている遺伝学者だ。

メガネの奥の目は明らかにイケメンのそれで、スラッとした細身で長髪が似合い、背は高く、鼻も高く、ブランドもののスーツにネクタイでキメてて、足は長く――

まあつまり、トレンディードラマにでも出てきそうな、完璧な美青年なのである。

性格は――聖人のように優しい。

しかも礼儀正しく、誰にでも敬語で喋る。武偵高の教師どもの中では希少種だ。

歩くモテ要素ともいえるこの小夜鳴は、非常勤ということもあってこういう特別講義にしか顔を出さない。が、来るたび今みたいに女子が集まってキャーキャー騒ぐ。うぜえ。

女子どもがつけたあだ名は、「王子」ときている。

ていうか女子がつけるあだ名は納得いかん。俺だって女子にとっちゃ人畜無害な存在の

ハズなのに、なんでこっちは「ネクラ」で向こうは「王子」なんだ。イケメンと凡人とで差別しすぎだろ。

俺はこの体質のせいもあり女子にモテたいとはこれっぽっちも思わないが、そういう女どもの不公平には腹が立つ。

人間は、見た目じゃねーだろ。

「ほらほら君たち、これじゃあＤＶＤを始められませんよ。席に戻らない子は……単位、あげませんよ？」

困り果てたカンジで言う小夜鳴に、女子たちは単位を落としちゃかなわないとしぶしぶ席に戻っていった。

ざまあ。

と、顔には出さず内心笑っていた俺の……左隣に。

「ダーリンっ♪」

いま来たところらしい理子が、着席してきた。

ふわわん。

例のヒラヒラ制服のスカートが広がって、俺の黒ズボンの左腿を包むように乗っかる。

「り、理子……なんで来るんだよっ」

「だって理子も探偵科だもーん」

「違う、なんでわざわざ俺の隣に――」
見上げ目線で俺の顔をのぞき込んでくる理子に文句を言いかけた時、室内が薄暗くなり……DVDの上映が始まった。
『遺伝。親の特徴が子に伝えられる遺伝。その法則について学ぼう』
DVDに録音されたナレーターの声が響く中で、理子が俺の左腕を胸に抱いた。
むに、と左肘に何か夢のように柔らかいものが押しつけられたので――慌てて体を傾け、そのみずみずしい物体を避ける。
「なにしやがんだっ」
「キーくぅーん。理子のこと、さわって」
「な――何でだよ!?」
「さわってほしいから」
「理由になってないだろッ。なんでいきなりそんな事――」
「いっぱい、いっぱい……さわって。どこさわってもいいんだよ？」
すり寄る理子から漂うバニラみたいな香りに、俺は呼吸量を減らして対抗する。
「テ、テスト中だぞ。先生に見つかったらどうするんだ」
「そのスリルがイイんじゃーん。くふふっ。理子、悪い子なのぉー」
じゃれるように、理子は俺に頬ずりなんかをしてくる。

「やめろって、お前はネコかっ」
「にゃ〜〜〜にゃ〜〜〜」
理子は手首をネコみたいにくねっと曲げて引っかくフリをし、
「ハグして、ハグしてよキーくぅーん……だっこ、だーっこぉー」
と、長机の下でヒラヒラ靴下の足まで搦めてきた。
ま、マズい。
な……なんだこれ。
なんだか分からんが、微妙にヒスりそうになってきた。
だが——ま、まだ大丈夫だぞ。
視聴覚室には先生も同級生もいる。その緊張感が、俺の理性をなんとか保たせているようだ。
耐えろ。
耐えるんだキンジ。
なんで唐突にこんな不幸に陥れられてるのかは分からないが、とにかく、耐えろ！
「あー、キーくんガマンしてるぅ。ガマンはカラダによくないよぉー？」
ふぁさっ、と。
理子は上半身を倒し、俺の膝の上にしなだれかかってきてしまった。

ロリータ風とかいうアレンジでフリフリに改造された制服が、くすぐったい。
「なでなでして」
「するかバカ」
「してくれなきゃ悲鳴上げて、キーくんにヘンなことされたって先生に言いつけちゃうぞ」
「……なん……だと……？」
真っ青になる俺の膝の上で、理子は寝返りをうつように上を向いた。
その結果、俺が理子を膝枕（ひざまくら）しているような姿勢になる。
「がおー。マジで叫んじゃう5秒前ぇー。さーん、にーい、いーち」
「わ、分かった分かった！」
せ、背に腹は代えられんッ。
――がば。
俺は……ボールをつかむように、理子の頭を右手で鷲掴（わしづか）みにした。
緩（ゆる）くウェーブした蜂蜜色（はちみついろ）の髪に、俺の五指が埋もれるようになる。
「あぁん。ちょっとイタイ。もうすこし、やさしくして……」
思ったより柔らかな理子の髪はアリアほどつやつやしてなくて、毛先はいたずらっぽくぴょんぴょん跳ねる癖っ毛で……だが、そのアバウトさが理子の性格と相まって――ちくしょう。

腹立たしいぐらい、コイツはコイツで可愛いんだ。一般論で言えばだがな。

なでなでっ。

ヤケクソ気味に撫でてやると、理子は、ふにゅうぅー。

心底幸せそうに、その大きなふたえの目を細めた。

「ん……いいかんじ。でも、もうちょっとゆっくりして」

なで……なで。

「こ、これでいいか。もういいだろ」

「もっともっとぉー」

幼児退行したような理子を、俺は赤くなりながらあやす。

なで……なで……なで。

……なで……なで……なで……なで。

こんなとこアリアに見つかったら7回ぐらい殺されるぞ。

あふぅ、と理子はもう天使にでもなったかのような幸せそうな溜息をつく。

『あるパーティーで、女優のマリリン・モンローがアインシュタイン博士にこう言った。

「私の美貌とあなたの頭脳を兼ね備えた子供ができたら、素晴らしいとは思いません？」

プロポーズともとれるマリリンの言葉に、アインシュタイン博士はこう切り返した――

「やめておきましょう。私の顔とあなたの知能を持つ子供が生まれるかもしれませんよ？」

……このジョークは我々に、「遺伝」と「変異」を学ぶ上でのヒントを与えてくれる』

DVDのナレーションに続く、かりかり、という音。

（……い、いかん！）

前方を見渡すと、生徒たちが上映されてる映像の内容をプリントに書き取っている。

まずい。

DVDの内容を書き取らないと、僅(わず)かとはいえ生物の単位がもらえなくなる。

それが積もり積もって、一般教科の単位が不足したら、普通の高校へ転校するしない以前にヤバい。留年だ。

俺は慌(あわ)ててシャーペンを手に……ん、ん？

シャーペンがない。

さっき、机の上に置いたハズなのに。

「くふっ。キーくんのシャーペンなら、かくれんぼしてるよー？」

腹の下から、理子が小声で言ってくる。

「ぬ……盗みやがったのか。いつの間に」

「理子はドロボーさんですから」

「返せっ」

「はぁーい」

と、理子は……胸を反らすようにして突き上げてくる。
な……何やってやがる。
と思った俺の目玉が――飛び出しそうになった。
小柄なカラダに似合わず、やたらに体積のある理子の胸の谷間から……俺のシャーペンの先端が、突き出ていたのだ。
む、むむ胸に、挟まってるぞ。
「はい。取っていいよ？」
「い、いいよってお前」
「ほらほら、ＤＶＤがどんどん進んじゃいますよー？　Ｄ・Ｖ・Ｄ！　Ｄ・Ｖ・Ｄ！」
理子は小悪魔っぽく笑って小さく手拍子なんかしてやがる。
ち、ちくしょう。
ありえん。
だが……このままでは単位が……！
や、やるしか、ない……！
理子の静脈が透けて見えそうに白い肌から顔を逸らしつつ、俺は。
強襲科時代に時限爆弾を解体した時のような、いやそれ以上の決死の覚悟で、セーラー服の胸元に、すす、す……と、右手を入れていく。

すす、すすす……あ、ああ。
ちくしょう。や、やわらけぇ。あったけぇ。なんだこれ。
「んっ……ちなみにいま、理子ノーブラなんだぁー」
余計なこと言うんじゃねえ！
耐えろ……！
耐えろキンジ！
ヒスる、な、よ……！
ごそ……ごそ。
か、顔を逸らしてて、目で見てないからよく分からん。こ、これか？
「あ、あっ。それちがうっ」
理子が少し本気で焦った声を出したので、俺も慌てて手を引っ込める。
「な、なんだっ」
「キーくん――ってば、意外と大胆。い、今のは理子もちょっとビックリしました」
なぜ敬語になる。
シャーペンのケツの消しゴム部分を触ったと思ったんだが。
「でもキーくん、心配しないで。理子、キーくんになら何でもさせてあげちゃう。みんなあげちゃう。だから、もっぺんがんばろ？」

「……なんで、こんなことを頑張る必要があるんだよ……！」
「これはキーくんが理子を使ってヒステリアモードになる訓練なんだよ。一緒に大泥棒を成功させるには、適切なタイミングでヒステリアモードになる必要があるからね」
そういう……こと、かよ……
だが理子の思惑、訓練うんぬんは今はおいておこう。
いま重要なのは俺の単位。すなわちシャーペンの奪取だ。
俺は改めて顔を背け、歯を食いしばりながら理子の胸に手を伸ばす。
俺の手が、マシュマロのように柔らかい谷間に改めて差し込まれた——そのとき。
ぱっ。
と、明かりがついた。
「……？」
前方のスクリーンを見れば、『おわり』の文字が。
……お、おわり……？
ハッ——と気配に振り向く。
俺たちの横には、小夜鳴先生が立っていた。
り、理子に夢中で気づかなかった。
一番後ろの列に座っている俺と理子の姿は、他の生徒には角度的に見えていないが……

先生は、俺の手が理子の胸元に突っ込まれているのをバッチリ目撃していらっしゃる。

「は、はい先生！　理子はぜんぶ回答済みでーす！　じゃ、そーゆーことで！　ばいばいきーん！」

理子は、ぽーん！

と起き上がって先生に自分のプリントを押しつけ、もろ手を挙げて逃げ出した。

スカートをヒラヒラさせて視聴覚室から出ていく理子の、クマさん型リュックを呆然と見送った俺は……

こめかみに血管を浮かせてメガネを光らせる小夜鳴の、

「と、遠山くん。ＴＰＯって言葉……知ってますか？」

に始まるお説教と……後日、鑑識科や装備科に混じってＤＶＤを見せられるという即席追試の命令をコンボでくらうことになるのだった。

その後、もう誰もいない情報科棟の出口ロビーをトボトボ歩いていると……

かちかち。かちち。

憎き理子が、ＰＳＰをやって待っていた。

「あ」

俺に気づいた理子はゲームをスカートの中にしまいつつ、慌てた様子で廊下の角の陰に

隠れる。
そして『ねえ、さっきのこと、まだ怒ってる？』って感じに角から半分だけ顔を出して小動物っぽくこっちを見てきた。
その横をプイッと通り過ぎようとすると……
「てへっ」
とか言って舌を出し、自分で自分の頭をちっこくゲンコツなんかしやがった。
「……で、ドロボーとやらの詳しい話はいつするんだ」
と膨れっ面で言って外に出ると、雨が降っている。
マズいな。
傘、持ってないぞ。
——と思ったら、ばさ。
俺の頭上に、腕を上げた理子が折りたたみ傘を広げた。
ピンクでフリルだらけの、いかにも理子らしい傘だな。
……で？
「半分貸したげる。相合い傘しよっ」
やっぱりか。
「ありえん」

「明日の『大泥棒大作戦』会議から仲間はずれにされたくない人は、傘にお入り下さい」
「……」
これは、ガマン……するしかないな。兄さんの情報がかかってるワケだし。
と、俺は仕方なしに理子の傘に入る。
しかしなんだ、その『大泥棒大作戦』ってのは。『大』が2つ入ってて語呂が悪いぞ。
「キーくんと相合い傘、うっれしいな。あっめあっめ降っれ降っれもぉーっと降れー♪」
速攻やんでくれ。
理子と肩を寄せ合って歩く俺は、こんな光景、アリアに見つかったら最悪だぞ……と、溜息をつく。
が、その考えは甘かった。
忘れていたのだ。
――見つかったら、もっと最悪なヤツを。
「くふっ。キーくんってふだん女子から距離置いてるけどぉー、実際二人っきりになるとけっこう面倒見いいんだよねー。ベッドの上でも優しかったもんねー？　で、誰だお前」
急に鋭い声で男喋りになった理子が――
バッ！
と傘を真上に投げ、ガッ！　俺の胸ぐらを突然つかんで、自分と共に屈ませた。

「――!?」

一瞬前まで理子の首があったその高さを、

――ヒュゴッ――!

……日本刀……!?　の、刃が通過した。

慌てて振り向くと、俺たちの背後には――やっぱり、

「し、白雪!」

が、臙脂色のセーラー服姿で立っていた。

右手には抜き身の銘刀イロカネアヤメ、左手には時代劇に出てくるような緋色の唐傘をさしている。

「――キンちゃん、下がってて」

そ、そういえばコイツ、超能力捜査研究科の合宿から今日帰ってくる予定だったな。

星伽白雪。

生徒会長で園芸部長で手芸部長で女子バレー部長で偏差値75オーバーの超人的しっかり者で、今どき珍しい黒髪ロングの大和撫子で、古式ゆかしい巫女さんで――

しかし時たまなぜか鬼神のようなバーサーカーになる、俺の困った幼なじみだ。

ていうか今の横薙ぎ、避けてなかったら俺も斬られてなかったか!?

「りこりんとキーくんの甘い甘ぁーい時間をジャマするなんて……え～?　だあれぇ～?」

わざとらしい～くレディースみたいにガンを垂れる理子に……

――ぴゅん。

極道の妻みたいな視線を返しつつ、刀を一振りして雨水を払う白雪。

「私は、超能力捜査研究科の星伽白雪。あなたこそ誰ですか。神聖な学舎で相合い傘なんてうらやま、じゃない、ハレンチな……キンちゃんが嫌がってるの、分からないんですか。今すぐ離れなさい。今のひと薙ぎは警告です」

警告で首斬んのかお前は。

「なんでぇー？　遠山キーくんと峰りこりんは、彼氏・彼女なんだよぉ？　相合い傘するぐらい、あったりまえじゃーん」

ぷくう、とほっぺたを膨らませた理子は、ひら、ひら、とつむじ風に乗って滞空していたフリル傘をうまくキャッチする。

よく見ると、理子の腕時計と傘は――細いピアノ線で繋がってるようだった。

あの腕時計がリールになっていて、傘を引っぱり寄せられる仕組みなんだな。

「カレシ、カノジョ……？　あは。あはは。春は本当にヘンな子がわくね。おかしいね、キンちゃん」

あははは、と瞳孔のかっぴらいた目で笑う白雪。

春……っていうかまあもう梅雨だけどな。おかしいのが湧くってのは正しいな。

今のお前も含めてな。
「ふ、ふふ。峰さん、取り消すんなら今のうちだよ」
白雪は、ひく、ひく、と十字みたいな血管を浮かせたこめかみを震わせつつ、敵に少し余裕のあるところを見せたいのか目を閉じて苦笑いしている。
「私とキンちゃんは……キ、キスしたことだって、あるんだから」
「ぷぷっ！　キス止まりですか！　理子はキーくんと、もうBまでしちゃったもんねー」
「びぃ――――!?」
いきなりカッと目を開いた白雪が、絶叫する。
「しゃすおたらっとぉ#ぷぇ$うま&うま%！」
「こ、壊れるな白雪！　あと理子も余計なこと言うんじゃねえ！」
俺のツッコミは――
スルぅーっ。
精霊流しのように、音もなく流されていき。
「こ、ここ、この！　2匹目の分際で！　行きますよ！　キンちゃんは渡さない！」
白雪はブルブル震える日本刀で理子を指し――
「来な。りっこりこにしてやんよ」
戦闘狂のケがある理子は、にやー、と好戦的な笑みを浮かべた。

や、闘る気だぞこれ。2人とも……！

――痺れるような殺気が、雨の降る周囲に満ちて――

バッ！

白雪が唐傘を投げ捨て、刀を八相に持ち変えた。

「くふっ！」

それを見た理子は傘を盾のように突き出し、相手の視界を塞ぐ。

「――!?」

パァンッ！

いきなり自分の足元に撃ち込まれた銃弾に、踏み出そうとしていた白雪の足が止まる。

理子のフリル傘は、先端が仕込み銃になっていたのだ。

傘を地面に転がした理子は、敵の背後に回り込みながら――

ぶわあっ！

白雪のスカートをめくりやがった！

「――きゃあっ!?」

と日本刀を放り投げ、その場にしゃがみ込んでしまう白雪。

さくっ。飛んできた刀が、俺の傍らにあった木を貫通した。あっぶね！

「おおー！　ゆきちゃん黒だぁー！　『白雪』なのに矛盾してるよ！」

理子は自分を追いかけるように転がってきた傘をキャッチして、パンパン手を叩く。
てか……ゆきちゃんって誰だ？
あ。白雪のことか。
「じゃーねキーくん！　明日の会議の場所と時間、あとでメールするねー！」
ちゅ！☆
投げキッスなんかをして、理子は……スキップしながら逃げていってしまった。
なんて――逃げ足の速いヤツだ。
これで、アリアからも白雪からも無傷で逃げたことになるな。結果的に。
さすが怪盗リュパンの曾孫だよ。
（で……？　こっちはどうなった……？）
地べたにしゃがんだままの白雪を恐る恐る見ると……
耳まで真っ赤にした顔を両手で覆い、ひんっ、ひんっ、と泣きじゃくっている。
「ひうっ、ひいんっ、し、死なせてくださいっ！　せ、生徒の模範たる、生徒会長の私が、ひんっ、神聖な学舎で、こんなはしたないクロパンツを、えうっ、コッソリはいてるのを暴露されたからには、も、もうお嫁に行けません！　キ、キンちゃんのところに、お嫁に行けませんっ！　ひぇうぅー！」
そのまま、来ない方向でよろしくお願いします。

理子は白雪のスカートを後ろからめくっていたので、俺の方からは何も見えていない。ゆえにその内側に隠された色が黒だろうが白だろうが無関係だったのだが……白雪はこの一件が相当ショックだったのか、立てないほどヘナヘナになっていた。

それを雨の中に見捨てていくワケにもいかないので仕方なしにおぶってやると、気分が悪いから救護科に連れていってくれと言う。ので、連れてきた。

救護科棟、10階。

応急室なる狭い部屋に入ると……あれ？　無人だ。

白雪がここに連れてってと言うから、先生でもいるのかと思ったんだけどな。

「……他をあたるか」

「う、うん」

白雪は俺におんぶされたまま、がちゃ、と、扉のノブを後ろ手につかんで……ん？　なんか、妙に力を入れたな。

「あ、あれ」

「どうした」

「開かないよ。出られないね。困っちゃったね」

なんか棒読みっぽく言って、俺の背中から降りる白雪。

あれ、お前立てるんじゃん。
「足……もう大丈夫なのか？」
「う、うん。おかげさまで治りました。ありがとうございましたっ」
ぺっこり。
白雪は90度ぐらいのお辞儀をしてから、さっさっ、と前髪を整えだした。
……。
まあいいか。
で、ドアノブを見ると、確かに何やら鍵穴が溶けたようになって壊れている。
あち。触ったらなんか、異様に熱かった。一瞬だから火傷はしなかったが。
なんだこれ？
「……参ったな。拳銃でも壊せなさそうだし、窓から出るにしてもベルトのワイヤーじゃ7階が限度だし……情けねーけど、大声で誰か呼ぶか」
「そ、それがね、いま思い出したんだけど……今日は救護科、ほとんど誰もいないかも」
「なんでだよ」
「今日は非常勤の小夜鳴先生が、小講堂で遺伝子工学の講義してくれててね……救護科の子は全員出席だった……かも」
「かもってお前、もっと早く思い出せよ。しょうがねーなぁー……」

「ご……ご、ごめんなさい、ごめんなさいっ、ごめんなさいっ」
「……いいから。何度も謝んな」
仕方ない。
誰か装備科のクラスメートでも呼んで、専用工具で開けてもらうか。
と、俺が携帯を取り出すと……
「――ごめんなさいっ！」
白雪がその携帯をむしり取って、しゃっ、とカーテンの向こう側に入ってしまった。
「こ、こらっ！　何やってんだ、携帯返せ！」
しゃっ。
と、カーテンを開くと。
白雪は……奥にあった白いベッドの上に正座していた。
俺の携帯を両手で握りしめ、背を丸めてる。
絶対返すもんか、のポーズだな。
まあ、それでも……黒いストラップシューズをちゃんと脱ぎ、床に揃えているあたりはとっても白雪なんだが。
「おい、どうしたんだ」
白雪の長い黒髪は白いシーツの上に優美な曲線を描き、うつむく前髪の下には影ができ

――その影で、目は隠れている。
「……しょうが…なかったんだもん…だってキンちゃんさまが、またあんな愛人を……」
ん……なんだ？
ボソボソ言うから、よく聞こえん。
「……だから監禁して…今だけでも…私だけのキンちゃんに……」
な、なんかコワい単語が混ざってませんでしたか今？
「……そして星伽に帰る前に『既成事実』を作っちゃえばいいの……あの2匹目にも負けない、すごい既成事実――既成事実、既成事実、既成事実、既成事実、既成事実……！」
「し、白雪っ。なに独り言してんだよっ」
壊れたレコードみたいに同じ言葉を繰り返し始めた白雪を、俺はちょっとゆする。
「はっはい！」
びくうっ！
慌てて顔を上げた白雪は、テンパってはいるものの……一応、正気に戻ったらしい。
「携帯返せ」
手を突き出すと、白雪は携帯を握った両手を胸の前でいやいやさせた。
「――そんなことよりキンちゃんさまっ！　重要なお話が！　ふ、2つあるの！」
「……聞くから。そしたら携帯返せよ？」

「はいっ！　えっと、1つめは私、キンちゃんのことを調べ……じゃない、占いました」
……調べてもいたんじゃないか？
俺のスケジュールを知ってて、情報科の前で待ち伏せしてたんだから。
まあ話が長引いても何だ。そこは聞かないでおこう。
「そしたらその……ちょっと、普通じゃない結果が出ちゃって……」
「すでに微塵も普通じゃないけどな、俺の日々は。で、何だって」
「キンちゃんは――『狼と、鬼と、幽霊に会う』って出たの。それも、近いうちに……」
狼と、鬼と、幽霊？
なんだそりゃ。オオカミは絶滅した。鬼と幽霊は空想の産物だ。
目の前で見せられたから、超能力までは許す。だが俺の世界はお前とは違う。そこまで人間社会からおさらばするつもりはないぞ。
とはいえ、コイツの占いはよく当たる。
ので、少し考えてみて……すぐ思い浮かんだのは……
狼のミミとシッポを生やして、がおーとか言う理子。
トラジマのビキニを着て、あの鬼のツノみたいな髪飾りで俺を刺すアリア。
四谷怪談みたいな白装束でふよふよ浮いて、うらめしやーと泣く幽霊白雪。
……これじゃねえのか？

「まあ……分かった。その警告は心に留めておく。で、2つめは？」
「……その……私、今夜からしばらく、星伽に帰ります」
え。
「星伽って。実家にか？」
「うん。このあいだの『魔剣』がらみで禁止事項を破っちゃったお詫びもあるんだけど、星伽でも何だか、いろいろあったみたいなの。だから……1か月ぐらい、行ってきます」
「そうか。まあ、ゆっくり里帰りしてこい。1か月と言わずゆっくりしてこい」
――よっしゃ。
俺は心の中でガッツポーズする。
これで俺の周囲からしばらく、危険な女子が1人いなくなるぞ。
だが喜びを顔に出してヘソを曲げられてもいかん。
まだ笑うな。こらえるんだ。
「私からのお話は以上です。それにしても……このお部屋寒いね、キンちゃん。あっ、ヒーターこわれてる」
なんで見ただけで分かるんだ。
と思ってベッドの向こうに回って確認したら、確かに壊れてた。
「なんかこのヒーター……刀で斬られたような跡があるんだが……」

「寒いね！」

「ん、んん？　ああ。まあ、今日は寒いな。梅雨冷えってヤツだろ」

と言っても、肌寒い程度だが……

思い出してみれば俺たちはこの部屋から出られないわけで、寒さはちょっと辛いな。

「キンちゃん！　助けがくるまで、た、体力を失わないようにしなきゃいけませんね！」

なんか急に声を大きくした白雪は、ばふ。

ベッドにかかってた白い毛布をかぶり、カメみたいになった。

なんかまた……珍奇な行動を始めたな。

「おい白雪。カメになりたきゃなってもいいが、その前に俺の携帯……」

と声を掛けると、ごそごそ、と毛布の下で動いていた白雪亀は……

ぱさ。

と、毛布の中から、セーラー服のスカーフを排出した。

武偵高の女子制服のスカーフは、タイと一体化した世にも珍しいデザインをしている。

このセーラー服は世間でも意外と人気があり、ネットでもかわいいと評判なのだが、その複製・販売は武偵法により規制されており、臙脂色という珍しいカラーをしているのも、一般の高校生と武偵高の生徒を識別し易くするためで……って違うだろキンジ！

コイツ、なんでいきなりスカーフはずしてんだよ！

真っ青になった俺の前に、ふぁさっ。
白雪はさらにブラウスを出してきた。
「ま、待て！　白雪お前！　なっ、なに脱いでんだ！」
「ゆ、雪山で遭難したときは、ハダカで温め合わないと凍えちゃうんだよ！」
――って！
いくらなんでもそれはムリがありすぎるだろ！
あ、あああ。スカートまで出てきたっ。
「ここは雪山じゃねえ！」
と、テンパるあまり当たり前すぎるツッコミしかできなくなった俺の腰に――じゃき！
毛布の下から飛び出てきた鎖鎌の分銅が、ベルトの上から巻き付いた。
「う、うおっ!?」
ぐい。ぐぐい。
ひ、引っぱられる。こ、この力。尋常じゃないぞ。鬼道術で力を強くしているっぽい。
中に、引きずり……こまれ……る！
「いいんです！　もう巫女じゃなくなる覚悟はできてますっ！　星伽が何だぁ！」
「お前こそ何だ！　イミが分からねえから！　放せ！」
「キンちゃんさま、どうか、どうかお情けを下さいっ！　私が武偵高をお留守にする前に、

き、既成事実！　既成事実！　既成事実ぅ！」

既成事実！　のかけ声ごとに引っぱられた俺は、ついに毛布の下に引きずり込まれ――

暗闇の中で、ごち！

「いてっ！」

「きゃん！」

興奮しすぎた白雪が、俺のおでこに形のいい富士額を思いっきりぶつけてしまった。

クラッと来たのか、ふっ、と鎖から力が抜ける。

（い、今だ！）

そのチャンスに、俺は強襲科にいた頃の寝技格闘訓練を思い出しつつ、どたんっ。

白雪の下から脱出し、ベッドから床に落ちて尻もちをついた。

俺の腰に巻き付いていた鎖に鎌が引っぱられてきて、足元に転がる。

ついでに、ころん。俺の携帯も落ちてきた。

「……？」

携帯をポケットに押し込んだ俺の頭には……毛布が乗っている。

と、いうことは……？

俺は状況を確認するために、しゅる、しゅる、と毛布を自分の上から除けていく。

「あ、あっ……待って！」

見えてきた白雪は、しゅるる、とシーツを引っ張り上げて黒下着の胸を隠した。
まぶしい雪肌の美脚が、シーツからはみ出てほとんど全部見えている。
脱ぐのを忘れてたらしく、靴下だけははいてるけどな。
「……！」
ずざ。
俺は腰に巻き付いた鎖を解くヒマもなく、分銅を掴んだまま立ち上がった。
や、やっぱ、キレイだ。文句ナシの美少女だ。白雪は。
（……マズい……ヒスる……！）
ヤバい。この血流。ヒステリアモード性の流れだ。この状況で——
もしヒスっちまってから白雪に、つまり女子にヘンな『お願い事』をされてみろ。
ランプの魔神みたいに何でも言うことを聞いちまう俺のことだ。
取り返しのつかない事になりかねんぞ！
「あ、あ……電気、ついてるから……そ、そんなに見ないで……でも、見たかったら……好きなだけ……み、見て……」
どっちやねん。
赤色灯みたいに真っ赤になって言う白雪に心の中でツッコみながら、俺は——
唯一の退路、窓に背中を押しつけた。

「キンちゃんさま……つ、続きをどうぞ……！」

どうぞめしあがれ、と言わんばかりの自分差し出しっぷりの白雪を前に……俺は握った鎖鎌をチラッと見てから、イチかバチかの脱出作戦を試みることにした。

「わ、分かった。分かったから白雪。お前こそ、そんなにこっち見んな。俺だって恥ずかしいんだ。顔伏せろ」

「わ、『分かった』……って……いうことは……キンちゃんさま……！」

「ほら、顔伏せろって。伏せっ！」

「は、はいっ！　わんっ！」

白雪は、べたぁぁあ。

言われた通り従順に顔を伏せた。というか土下座した。

よし。ここまでは計画通りだ。

「じゃ、じゃ、じゃあ脱ぎ終わったら声を掛けてください！」

何を脱ぐんだ俺が。と白雪に背を向けた俺は——がらっ。

窓を開け、その縁によじ登った。

「——えっ!?　キンちゃん！　ここは10階だよ、ワイヤーじゃ降りきれないんだよ!?」

「ああ。だからこれ、借りるぞ！」

俺は鎖鎌を掲げつつ、ベルトのワイヤーを引っかけた窓からリペリング降下を敢行する。

び――ッ。

と、強襲科（アサルト）で習った通りの姿勢で3階まで降りて……

ごそごそ。

宙ぶらりんの状態で、ワイヤーと鎖鎌（くさりがま）を繋（つな）ぐ。

そして、地上に向けて伸びた鎖を伝って……じゃりじゃりじゃり……どちゃ。

……ふぅ。

あんまりスマートな方法じゃなかったが、なんとか脱出できたな。

「キンちゃぁーん！　続きは星伽（ほとぎ）から帰ってきてからねー！　続き！　約束だよー!?」

見上げれば10階の窓では白雪（しらゆき）が、手メガホンでそんな事を叫んでいた。

あのあと白雪は青森の星伽神社に出発したわけだが……

その後、道中からメールを送ってきている。

怖くて数えてないけど、30通ほど。

メールはいつものごめんなさい連呼に始まり、途中から応急室での事の『続き』の話にすり替わっていき……なんだか知らんが、俺（おれ）は白雪が帰ってきたらその『続き』なる行為をすることが確定しているようだった。白雪の中では。

（……俺、そんなこと言ってたか……？　必死だったから覚えてねーぞ……）

最後の方のメールは、よっぽど楽しみなのかハートマークだらけ。空恐ろしい。

ていうか、俺、あいつが帰ってきたらどうすりゃいいんだよ。

何をされるのかは分からんが、逃げようとしたら今度は本気で拉致監禁されかねんぞ。

「なに泣きそうな顔してんのよ。突入するわよ」

アリアの声に顔を上げるが……

扉の小窓の向こうに広がる光景に、俺をさらなる憂鬱が襲う。

一難去ってまた一難とは、このことだ。

――ここは秋葉原。

別名、『武偵封じの街』。

秋葉原は常に人が溢れかえっていて銃が使いにくく、路地が入り組んでいるため犯人の追跡もしづらい。理子はやっと準備が整ったらしい『大泥棒大作戦』の会議を、なんでかその秋葉原でやろうと提案してきたのである。

俺もこの街には土地勘がなく、この店に着くまでかなり迷った。

アリアも初めての秋葉原には最初から目を丸くしっぱなしで、さらに歩いてると自分を見た人々がなぜか「ツインテだ」「アホ毛だ」「ミクだ」などと囁き合うから「???」という顔をずっとしていた。アリア安心しろ。俺も分からん。

「……いくぞ」

俺は強襲科のころ犯罪組織のアジトに突入した時と同じ気分で、扉の取っ手をつかむ。
背伸びして扉の小窓から室内を窺っていたアリアも、扉の脇に移動し――
緊張の面持ちで、こくり。うなずいた。
がちゃ。
扉を開けると――
「「ご主人様、お嬢様、お帰りなさいませー！」」
そう――ここはいわゆる、メイド喫茶。
理子はこの店を待ち合わせ場所に指定してきたのだ。
店の入口は狭い階段の踊り場にあり、退路が無かったので――実はこれが理子の罠で、いきなり襲われる可能性もあると疑っていたんだが……取り越し苦労だったようだ。
ずいぶん、友好的に迎えられたな。
メイド喫茶。
テレビやネットで見た事があるから知ってはいるが……入った事など、もちろんない。
本当にメイドさんがいるんだな。
それにしても、なんて……入りづらい店なんだ……
これならまだ、犯罪組織のアジトの方が入りやすかったぞ。
キンジ。お前はよくやった。ここまで来た度胸は認める。だから帰ってもいいですか。

「……じ、実家と同じ挨拶だわ……まさか、日本で聞くとは思わなかった……」

と、隣のアリアも引いている。よかった。コイツも俺側の世界の住人で。

勝手が分からない俺は、案内されるままにアリアと奥の個室へ入っていき……やたら胸を強調したメイド服でニコニコと俺を見上げてくるウェイトレスさんに愕然としていたら、アリアに耳を引っぱられて強制的に着席させられた。

室内はピンクと白を基調とした、少女趣味バリバリの内装。お、落ち着かねえ。

メイドさんが個室から出ていくと、いきなりアリアは腕組みしてみせた。

「……な、なによあの胸、じゃなくて衣装っ！　いくら給料が良くても、あれはないわ。イギリスならともかく、日本で着るなんて場違い。恥っずかしい。なんて店なの。あたしだったら絶対着ない。絶対絶対、あんなもの着ないっ！」

ずいぶん早口に、メイド喫茶の悪口を俺にまくし立ててきたな。

落ち着かないんだろうな。

なるほど。ここは武偵封じの街だ。

「理子さまお帰りなさいませ！」「きゃあーおひさしぶりー！」「理子さまがデザインされた新しい制服、お客様に大好評なんですよー！」

間がもたなくて枝毛を探していたアリアと水ばかり飲んでいた俺の耳に……メイドさん

たちの歓声が聞こえてきた。
理子が来たようだ。
ていうかアイツ、ここのＶＩＰなのか。
「ごっめぇーんチコクしちゃったー！　いそぐぞブゥーン！」
ゴスロリ制服にしましまタイツ、首にはでかい鈴を増設した理子が走ってやってくる。
飛行機のマネなのか翼のように広げた両腕には、ゲームやらフィギュアやらでぱんぱんになった紙袋を提げていた。それのせいで遅刻したのか。ブッ殺すぞ。
「んと、理子はいつものパフェといちごオレ！　ダーリンにはマリアージュ・フレールの春摘みダージリン、そこのピンクいのにはももまんでも投げつけといて！」
と勝手に注文をしてしまった理子は、まるで水を得た魚だ。
なるほど。ようやく分かったぞ。
秋葉原――自分のホームグラウンドに俺たちを連れてきて、話し合いのイニシアチブを取るって寸法か。
理子。狡猾なヤツだよ、全く。

「……まさか、リュパン家の人間と同じテーブルにつくとはね。偉大なるシャーロック・ホームズ卿もきっと天国で嘆かれてるわ」

イヤミったらしく文句を垂れつつ、アリアはもふもふとももまんを食う。
かたや理子は、来たときはこれ絶対ネタだろと思ったタワーのような巨大パフェをすでに半分まで平らげていた。
……鼻にクリームついてるぞ。
「理子。俺たちは茶を飲みに来たんじゃない。まず確かめておくが――アリアと俺にした約束は、お前、ちゃんと守れるんだろうな？」
紅茶を一息に飲んでしまった俺は、理子に少し強く念を押しておく。
――アリアには、神崎かなえさんの裁判で証言すること。
――俺には、兄さんの情報。
女子寮の屋上で戦った後、理子はそれを約束している。
俺たちに『ドロボー』を手伝わせるかわりに、な。
「もちろんだよダーリン♪」
ウィンクして言った理子は、いちごオレのマグカップを両手で持ち、んくんく飲む。
「誰がダーリンか」
「ぷは。キーくんに決まってるじゃーん！　理子たちコイビトじゃーん！」
「コンマ1秒たりともお前とそういう関係にあったことはねえ！」
「ひどいよキーくん！　理子にあんなコトまでしといて！　やりにげだ！」

「なんもやってねえだろそもそも！」

だんっ、だんっ！

アリアが、静粛に、静粛に！　と言う裁判長みたいに机を叩いた。

……拳銃で。

「そこまで。風穴あけられたくなければ――いいかげんミッションの詳細を教えなさい」

み、民間の施設内でもお抜きになられますかそのガバメント。

と固まる俺の横で、理子は――

「お前が命令すんじゃねえよ、オルメス」

いきなり乱暴な男言葉と三白眼になって、アリアを射殺すように見た。

アリアすら一瞬怯ませる凄みを見せたウラ理子は、がちゃん。

紙袋から出したノートパソコンを開いて起動させつつ、テーブルに放り投げる。

「横浜郊外にある、『紅鳴館』――ただの洋館に見えて、これが鉄壁の要塞なんだよぉー」

くるっとオモテ理子に戻った理子が示すディスプレイを、覗き込むと……

地上3階・地下1階建てと思われる建造物の詳細な見取り図と、そこにビッシリ仕掛けられた無数の防犯装置についてが資料にまとめられていた。

それだけではない。少しタスクバーを触らせてもらうと、侵入と逃走に必要と思われる作業が……想定されるケースごと、予定日時ごとに、驚くほど緻密に計画されてある。

これは……凄いぞ。ぶっちゃけ。
ここまで緻密な作戦計画、プロでも半年はかかる仕事だろう。
「これ……あんたが作ったの」
「うん」
「いつから」
「んと、先週」
パフェの残りを食べながら言った理子に、アリアが赤紫色（カメリア）の目を丸くする。
そりゃ目も丸まるよな。そもそもアリアは作戦なんかロクに立てず、誰（だれ）よりも早く現場を強襲し、圧倒的な戦闘力で一気に事件を解決しちまうのがやり口なんだから。
「どこで誰に作戦立案術を学んだの」
「イ・ウーでジャンヌに習った」
ジャンヌ。
このあいだ俺たちと戦った、魔剣（デュランダル）ことジャンヌ・ダルク30世――か。
「キーくん、アリア。理子のお宝は――ここの地下金庫にあるハズなの。でもここは理子にも1人じゃ破れない、鉄壁の金庫なんだよ。もうガチでマゾゲー。でも……息の合った優秀な2人組と外部からの連絡役が1人いれば、なんとかなりそうなの」
「それで、あたしとキンジをセットで使いたいってワケね」

と、アリアはツインテールを揺らしてイスの背もたれに寄りかかる。
「……で、理子。ブラドはここに住んでるの？　見つけたら逮捕しても構わないわね？　知ってると思うけど、ブラドはあんたたちと一緒にママに冤罪を着せたカタキの1人でもあるんだからね」
……そうだったのか。
「あー、それムリ。ブラドはここに何十年も帰ってきてなくて、管理人とハウスキーパーしかいないの。管理人もほとんど不在で、正体がつかめてないんだけどねぇー……」
などと話題を変える理子に、アリアは「それならそうと事前に教えときなさいよ」ってカンジに口をへの字に曲げた。
……む。危険な兆候だなあれは。
アリアはガッカリすると周囲に八つ当たりする傾向がある。
ここは2人の会話に割って入って、話題を変えておこう。
「まあ……分かった。で、俺たちは何を盗み出せばいいんだ」
「――理子のお母さまがくれた、十字架」
「あんたって――ほんと、どういう神経してるのっ!?」
がたん！
アリアは眉をつり上げ犬歯をむき出し、立ち上がった。

やっぱ来た。怒るの早ぇなぁ。瞬間湯沸かし器かよ。
「あたしのママに冤罪を着せといて、自分のママからのプレゼントを取り返せですって!?　あたしがどんな気持ちか、考えてもみなさいよ！」
「おいアリア、落ち着け。理子の言うことでいちいち頭に来てたらキリがないぞ」
「頭にも来るわよ！　理子はママと会いたければいつでも会える！　電話すればすぐ話せる！　でも、あたしはママとアクリルの壁越しに、ほんの少しの間しか――」
「うらやましいよ、アリアは」
と言った理子に――
「あたしの何がうらやましいのよ！」
アリアはとうとう、ガバメントを振り上げた。
だが……理子は、銃を抜かない。
かわりに淋しそうに視線を落とし、足を、ぷら、ぷら……と、小さく振った。
「アリアのママは、生きてるから」
「……っ」
アリアが、赤紫色の瞳を少しだけ見開く。
「理子には――お父さまも、お母さまも、もういない。理子は、お二人がお歳を召されてからやっとできた子なの。お二人とも、理子が8つのときに……亡くなってる」

「……」

「十字架は……お母さまが、理子の5歳のお誕生日に下さった物なの」

と言った理子から、アリアは、つ、と決まり悪そうに拳銃を下ろし……

すとん。

視線も逸らして、着席した。

まあ……アリア。言いたいこともいろいろあるだろう。お前の気持ちも分からないでもないが――ここは堪えてくれ。

「あれは理子の大切なものなの。命の次ぐらいに大切なものなの。でも……」

理子は少し顔を伏せたかと思うと……

「ブラドのヤツ。アイツはそれを分かってて、あれを理子から取り上げたんだ。それを、こんな警戒厳重な所に隠しやがって……ちくしょう……」

憎悪に満ちた声で、ボソボソと続けている。

そのブラドってヤツが本当に憎くて、憎くて、しょうがないといった感じだな。

じわ……と、目にはうっすら悔し涙まで浮かべ出している。

……そんなにかよ。

「ほ、ほら。泣くんじゃないの。化粧が崩れて、ブスがもっとブスになるわよ」

ぽん。

そんな理子の前に、アリアは横を向きつつトランプ柄のハンカチを投げた。
さっき、今は亡き理子の母親についていろいろ言ってしまったお詫びのつもりかな。
「ま、まあ……とにかく、その十字架を取り戻せばいいんだな？」
と、場の空気を元に戻すように俺が言うと、こくり。
理子はアリアのハンカチで少し目を押さえ、涙を吸い込ませながらうなずいた。
「泣いちゃだめ理子。理子はいつでも明るい子。だから、さあ、笑顔になろっ」
自己暗示をかけるように独り言した理子が顔を上げた時、ちょうどメイドさんが入ってきて……楚々とお冷やを注いで回ってくれた。
おかげで少し雰囲気も和やかになり、理子はいつものいたずらっぽい笑顔を取り戻す。
「……とはいえ……このマップね」
ぱし、とノートパソコンを閉じながら、理子はテーブルに身を乗り出す。
マップ、と言ってるのは——第三者が入ってきたから、ゲームか何かの話を装っているんだろうな。
「ふつーに侵入する手も考えたんだけど、それだと失敗しそうなんだよね。奥深くまではデータが無いし、お宝の場所も大体しか分かんないの。トラップもしょっちゅう変えてるみたいだから——しばらく潜入して、内側を探る必要があるんだよ！」
「せ……潜入？」

「どうすんだよ」
アリアと俺が尋ねると、理子は――
ばんざーい！　という感じに両手を挙げて宣言した。
「アリアとキーくんには、紅鳴館のメイドちゃんと執事くんになってもらいます！」

――はい？
俺とアリアは、ハトが大口径の豆鉄砲をくったような顔を見合わせる。
……メイドちゃん……
……執事くん……
……だ……と……？
2人揃って、ひく、ひくひく、と頬が引きつっていく。
さっきメイド衣装をさんざん批判していたアリアは……ぷるぷる震えるちっこい指で、
こ……これ？
と、横で小鳩のように首を傾げている笑顔のメイドさんを指すのだった。

3弾　狼とレキ

潜入捜査。

暴力団、企業、ナイトクラブなど、捜査対象となる組織に武偵を潜入させて情報を集め――場合によっては、その場で犯罪者を強襲・逮捕する捜査手法である。

つまりは、騙し討ちだ。

日本では長らく違法とされてきたこの手法も、激増する凶悪犯罪に対抗するため今ではすっかり適法化した。

武偵高で主にこれをやるのはC研の女子たちで、他には探偵科、諜報科、強襲科がたまにやる。俺も金持ちの子息子女だけが通うエリート高校に潜入したことがあるし、有名な話じゃ、不知火はホストクラブに潜入したことがあるとか。

で、来週から――

俺とアリアは横浜の古い洋館・紅鳴館に、『執事』と『メイド』に化けて潜入する。

捜査のためではなく、ドロボーのためにな。

兄さんの情報という見返りがあるとはいえ、俺よ。どうかと思うぞ、技術の悪用は。

――紅鳴館の関係者は主人のブラド・謎の管理人・雇われのハウスキーパー×2名。

で、このハウスキーパーたちが休暇を取るらしく……管理人が帰って来るのに加えて、臨時の雑用係を2名募集していたそうだ。

そこに理子は派遣会社の営業を装って接触し、紅鳴館から採用通知をもらっていた。

……理子のこういう手回しの早さには、いつも舌を巻かされるよ。

まあ、やろうとしてる事はドロボーとしての潜入なんだけどな。

で、その前に――

なんで俺は、こんな所に潜入してるんだろうね？

「だよねー」「ですよねー」「あれはクサいよねー」「でも、なんであたしたちだけ再検査なんでしょうかね？」「しらなーい。めんどいよねー」

女子たちの声が、鋼板に開けられたスリット越しに聞こえてくる。

ここは救護科棟1階、第7保健室。

理子は潜入作戦に向けて俺とアリアそれぞれに特訓メニューを作ったと言う。で、俺の特訓その1と称して、放課後にここへ来いとメールで指示してきたのである。

で……文句を垂れつつも来てみたら保健室は無人で……しばらく、途方に暮れていた。

そうしているうちに廊下から女子たちが何人か喋りつつ入ってきたので、強襲科で習った抜き足で奥の物陰に隠れたのである。

そしたら女子たちはいきなり、次々と制服を脱ぎ始めやがったのだ。

――ハメられた。

と気づいた時にはもう遅く、俺が逃げ込める場所は……

このでかいロッカーの中しか無かったと、そういう次第だ。

家の防弾物置といい、なんかこういう閉所が住処になりつつあるな、最近の俺は。

「……で、なんでお前もいるんだ武藤」

「そいつぁヤボな質問だぜキンジ」

ロッカーの中になぜか居たこの先客は、武藤剛気。

車輌科の腕っこきで、俺とは入学以来の腐れ縁ってヤツだ。

しかしこの大男、ロッカーの中ではジャマ以外の何者でもない。

「キンジも女子の再検査、ノゾキに来たんだろ？」

「この状況で言っても説得力は皆無だと思うが、真実だから言っておく――違う」

「しかしキンジ、お前もさすがだな」

「何がだよ」

「ここに目をつけてた事だよ。ここは武偵高で最も逃走経路が作り易い、ノゾキに適した保健室なんだぜ。なんたって1階だしな。外にノゾキ防止用の茂みがあるが、それを逆に利用して迷彩塗装した大型バイクを隠してある。もし見つかったら、2ケツで逃げんべ」

こういう事になると武偵としての能力をいかんなく発揮するな、武藤は。

「さーて本日のメニューは……おー大漁大漁。平賀文に、峰理子に、諜報科のふぅかぁ。あっレキがいる。しかし……星伽さんはいねぇなぁ。おっ。お前のアリアも来たぞ」

なにが俺のアリアか。

「おいキンジ、なに顔伏せてんだ。もったいねーな。スキマからちゃんと見ろよ」

「だからノゾキに来たんじゃないって言ってるだろ」

と小声で武藤に無罪を訴えたとき、ぶるるっ。

マナーモードにしてたケータイが振動した。

イヤな予感がしたので見てみると……理子からメールだ。

うわ。なんだこのデコメ絵文字だらけのメールは。うぜえ。

『キーくん☆　そこのロッカー、昨日カラにしといたから快適でしょ？　んで、りこりん以外にもヒスれそうな女の子がいたらちゃんと覚えといてね？　理子、キーくんが欲しいっていうその子のアイテム、なんでも盗んじゃうから！』

ギャル文字の判読は困難だったが、解読したところ、そういうことらしい。

あ、アイツめ……

そういえば理子は、ドロボーを成功させるために俺をヒステリアモードにする訓練をさせたがってたな。これがその、特訓ってワケか。

ん？

2通目が来た。

『あとキーくんがちゃんと見てるか確認！　「10秒以内に理子の下着の色を返信せよ！」正確に回答できない場合、ロッカー大開放のペナルティーが与えられまーす！』

ま、マズいだろ……これは！

伏兵・武藤に教えてもらおうかとも思ったが、メールを打つ時間を計算するとそれでは間に合わない。メールを読むだけでも、既に5秒消費しちまってるし。

女子の下着姿を見るような、ヒステリアモード化の危険は出来るだけ冒したくない。

だが、理子に騒がれたら命が危ない。

なぜならこの部屋には双剣双銃の鬼武偵――アリア様がいるんだからな！

「ど、どけ武藤っ！」

俺はヨダレを垂らしてるアホを押しのけつつ、扉のスリットに目を押しつける。

見えてきたのは――

女子。女子。女子だらけ。

下着姿の女子たちが、理子を探す中でどうしても目に飛び込んできてしまう。

俺のベレッタを改造ってくれた、装備科の平賀さん。無邪気な人とは思っていたが下着まで無邪気とは。何ですかそのバックプリントのガキパンツは。

だがこれは俺には好都合だ。あれならセーフ。ガキっぽくて性的興奮には至らない。

諜報科の1年、風魔。お前はなぜ女のくせに褌をはいている。忍者の子孫かなんか知らんがキャラ作りすぎだろ。コイツもセーフ。性的興奮どころか、もはやギャグだ。

そして人体模型のように突っ立ってる狙撃科のレキ。ジャスコで上下セット980円で売ってそうな、何の飾りっ気もない木綿の純白インナー。当然セーフ。

残り――3秒。

他にも女子は何人かいるが、角度的に、あるいは姿が重なっているため見えない。

よかった。神は俺に味方してる。失礼だが性的魅力に乏しい女子たちが遮蔽物の役割を果たしてくれたおかげで、ヒステリアモードにならずに済んだぞ。

で、わざと体重計に肘をつき、自分のカラダをこっちにアピールしている理子は――

ハニーゴールド

と、俺は既に返信画面にしておいたケータイに素早く打ち込んで送信する。

ちくしょう、高級そうなランジェリーなんか着けやがって。チビのくせに。

ピカピカ、と理子が指でくるくるさせていた携帯が光り、メールを見た理子がこっちに『OK』ってカンジにウィンクしたので……

俺は深い安堵の息をつきつつ、体の真芯の血流をチェックする。

性的興奮は――よし、ちょっとキワドイが、してないぞ。乗り切った。

この勝負、俺の勝ちだ！

そうさ。俺もガキじゃない。女子の下着姿ぐらいでいちいち興奮なんか――
――ドキン。
目を閉じれば良かったものの、歩き出した理子の姿に気を取られた俺は――ロッカーの前に引っぱって来られた女子の姿に、心臓を大きく跳ねさせてしまっていた。

アリア。

トランプ柄のガキっぽい下着をつけた、アリアの姿に。
――えっ、いつの間になったんだよ？
と思うほど呆気なく、気づけば、俺は。
なってしまっていた。
ヒステリアモードに。
ど……どういうことだよ、これ？
今、ならないよう、しっかり意識していたハズなのに。
こんなこと……初めてだ……
「さぁーてアリア、先生が来る前にスリーサイズを測っちゃおうか！」
なんだかオヤジっぽい手つきでしゅるるとメジャーを伸ばす理子に、アリアはちょっと

赤くなって一歩退いている。
「……な、なんでスリーサイズなのよっ。やらしいわね」
「メイド訓練用の服とかエプロンを作るためだよ！　理子ってば、実はロリータ業界ではちょっと有名なデザイナーさんだったりもするんだよねー！　はい！　ではまず胸囲からいってみよー！」
「きょ、胸囲……!?」
すっ！
アリアは無い胸を白い両腕で隠し、理子のDはありそうな胸を睨んだ。
「あ、あんたそれイヤミのつもり!?　あ、あたしが、ががが……人より若干ほんの少し、わずかに発育が遅いからって……！」
「なーに言っちゃってるのアリアんや！　ちっぱいはステータスなんだよ!?」
「……なによそれ？」
「世の中には、貧乳の方がスキな男子もいるの。それも無視できない割合ね！」
「ふんっ。そんな話……ウソよっ。それにあたしは男子なんか興味ないから関係ない」
「ふーん。じゃあこの話は終了でいっか。はい、それでは測りまーす」
「……で？　無視できないって、どの位の割合なの？　情報元は？　サイズでも何でも測らせるから、その辺詳しく教えなさいよ。いつの統計？　N値はいくつ？」

背後から理子にサイズを測らせつつ、アリアは……妙に詳しく聞いてるな。
誰か気になる男子でもいるのか？
まあ、それこそ俺には全く関係のない事だがな。
と、俺はスリットから目を離し……ふてくされてる武藤に「悪かったな」と目配せしてからロッカーの壁面に背をもたれかけさせた。
結果的に、俺はヒステリアモードにさせられてしまったわけだが――
このモードで困った事になり得るのは、女子と一緒にいる場合だ。今ここにいる武藤は男子だから、心配はいらない。
つまりここでしばらく安静にし、モードが解除されるのを待つ。これが正解だろう。
（だが……）
俺の事はそれでいいとしても……
少し、気になるな。さっき見えた女子たちのメンツは。
平賀さんのご先祖様は、平賀源内という江戸時代の発明家だ。後輩のふぅこと風魔は、高名な忍者の末裔。レキは分からないが、アリアや理子は言うまでもなく……見た限り、この部屋の女子は優れた血統のお嬢さんたちばかりだ。
どうして彼女たちだけが、この『再検査』とやらに選ばれたんだろうな？
などと考えていると――

——がら。

という扉が開く音がして、女子たちが色めき立った。

「……誰か入ってきたのか？」

小声で武藤に聞くと、

「ああ。講師の小夜鳴だぜ」

飽きずにスリットから室内を見ていた武藤が、少し苛ついた声を返した。

「アイツよ、善人面して……女子に手ぇ出すとか、そういうウワサあんだぜ？　小夜鳴が間借りしてた研究室から、フラフラになって出てきた女子生徒がいたとかよ」

それは——聞き捨てならないな。

ヒステリアモード解除までの時間が延びてしまいそうだが、少し監視させてもらおう。

武藤と頭を寄せるようにして室内を見ると、白衣を着て入ってきた小夜鳴先生は……

「……ぬ、脱がなくていいんですよー？　再検査は採血だけですから。メールにも書いたじゃないですか。はい、服着るっ！」

と、奥の丸イスに着きながら苦笑いしていた。

そして、窓の外に視線を向け……

「——Fii Bucuros... Școală bună. Nu este interesant de sânge...」

……何か、呟いたな。

『フィー・ブッコロス』……ブッ殺す？　いや、たぶん日本語じゃなかった。何だろう？

一方――女子たちは右往左往しながら、それぞれの服を取りに行っていった。この集団カンチガイ、さすがに羞恥心（しゅうちしん）が原始人レベルの武偵娘（ブッキー）たちでも恥ずかしかったらしい。

……が。

1人、服を取りに行かない女子がいる。

レキだ。

柄どころかラインすら入っていない、水着のような純白の下着姿で――

窓の方へ、カメラのように眼（め）を向けている。

……武藤のバイクがバレたのか？

「……」

レキは引き続き、じー……っと、動かないでいる。

……。

……ゼンマイでも切れたのかな。

……。

……それにしても、潔（いさぎよ）いほどの無地だな。そのインナー。

髪型もばっさりショートにしているし、『ロボット・レキ』のあだ名を持つあの子は、オシャレとかそういう事には全く関心がないらしい。

一部の男子が主張している通り、よく見るとレキはとても美形なのだが……無口、無表情、無感動。そして外見に無頓着。無のオンパレードで、目立たない子なんだよな。

その、レキが。

――ぴく。

動いた。

かと思うと――ダッ、と、リノリュームの床を蹴って走ってくる。

こっちに――！

「お、おおっ!?」

武藤が焦った声を上げたかと思うと、レキは、ばんっ！

いきなり、俺と武藤が詰まっていたロッカーを開け放ってしまった！

「!?」

そして伸ばした左右の手で俺と武藤のネクタイを掴み、2人いっぺんに巴投げするような動きで引っぱった。

「ま、まて！　謝る！　あや――！」

武藤の叫び声は、こっちを見た女子たちが悲鳴を上げるより早く――遮られた。

がっしゃあああああん!!

という、窓ガラスの割れる音に。

「――!?」

ドオンっ！　という衝撃がロッカーを襲う。

まるで紙細工みたいにひしゃげたロッカーが、冗談みたいに吹っ飛んだ。

レキが引っ張り出してくれたお陰で――俺は間一髪、助かった。しかし、大柄な武藤はレキの力では素早く引っ張り出すことができず……その遅れが、命取りとなった。

「武藤！」

レキの脇で回転受け身を取った俺は、ロッカーごと吹っ飛ぶ武藤を目で追う。

どがんっ！　とロッカーが倒れ、武藤の片足がその下敷きになった。

「――ッ！」

武藤は激痛に顔をしかめたが、そこは武偵。すぐさま腰のホルスターから銃を抜いた。

コルト社のロングセラー銃、パイソン。

命中精度は悪く回転式弾倉、武偵の銃には不向きだが――.357マグナム弾を使用でき、その威力は抜群。武藤の体格があってこそ撃てる、大砲みたいな拳銃だ。

「――ウソ、だろ……？」

だが、武藤はそう呟いただけで……その引き金を引かない。

ロッカーにのしかかった相手の姿に、目を奪われている。

それは俺も、そしてこの室内の全員も、同じだった。

それは、銀色をした、巨大な――
――狼（おおかみ）。
だったのだ。
オオカミ。
武藤じゃないが、ウソだろ、だ。
だが、ソイツはここにいる。犬じゃない。狼だ。動物にはさほど詳しくないが、猛獣については強襲科（アサルト）で習ったから知っている。
圧倒的な殺気、どこか気品すら感じさせる逞（たくま）しい肉付き――
そしてこの、１００キロに迫ろうかという巨体。
間違いない。絶滅危惧種（きぐしゅ）・コーカサスハクギンオオカミの成獣だろう。
しかし、なぜ……こんな所に!?
（レキ……）
今の一瞬で俺たちをロッカーから出し、潰（つぶ）されるのを防いでくれたレキは……とっくに俺らが居たことに気づいていたのだろう。何も言わなかっただけで。
そして、ロッカーめがけて狼が襲ってくるのを発見し、俺たちを救出しようとした。
この鋭さ、危険察知力――さすが、Ｓランク武偵だな。
「……お前ら、早く逃げろ！」

女子たちに叫んだかと思うと、武藤は――ドォンッ!!
天井へ向けて威嚇射撃を行った。
通常、動物は大きな音に弱い。しかし――この狼は、357マグナム弾の轟音に全く怯まなかった。
そして、丸腰で柔肌をさらしている女子たちめがけて跳躍する。
「――武藤、銃を使うな！　跳弾の危険性がある！　女子が防弾制服を着ていない！」
ヒステリアモードがまだ続いていた俺は、叫びながら――
狼に、飛びついた。
まるで剣山のように荒いその毛皮を掴み、がしゃんっ！
ヘタすれば人間より大きいであろうその狼を、薬品棚のガラスに突っ込ませる。
ぐるるおうんっ！
初めて吼え声を上げた狼が、俺の胸を引き裂こうと爪を立て――どんっ！
俺に跳ね返るようにして、真後ろにジャンプした。
「――くッ！」
なんて一撃だ。
カウンターで掌底を叩き込んで威力を減衰させたが、一瞬遅かったら――防弾防刃制服うんぬんとは関係なく、肋骨ごと内臓を破壊されていただろう。

さっき薬品棚に突っ込んだ時、何かイヤな薬でも顔にかぶったのか……狼は、ぶんぶんとその頭を左右に振った。

そして、向こう側で立ちすくんでいた小夜鳴先生を――

「――あっ！」

体当たりで、跳ね飛ばした！

先生は身長計を倒しながら転倒し、狼は自分がブチ破った窓から逃げていく。

しくじった――俺は優先順位を誤った。

小夜鳴先生は、武偵高の先生とはいえ非常勤講師。戦闘訓練を一切受けたことのない、一般人だ。

同じ丸腰なら、生徒の女子たちよりも彼の方が非力だったのだ。

なのに、ヒステリアモードの俺は――何よりもまず女子の身の安全を守ろうと動いてしまった。

そのせいで、先生が……！

「追いなさいキンジ！　先生はあたしたちが手当てするわ！」

アリアの叫びを背に、俺はうなずきながら立ち上がる。

小夜鳴先生だけじゃない。学園島には、学生向けの施設で働く民間人も大勢いる。

あんな猛獣を野放しにしていたら――大ごとになるぞ。

ブチ割られた窓に向かう俺は、
「使えキンジ！　そこの茂みの向こうにある！」
武藤が投げてきたバイクのキーを、走りながらキャッチするのだった。

武藤、お前、ノゾキが見つかったらどこまで逃げるつもりだったんだ？
保健室の外、茂みの向こうに隠されていたのは――
ＢＭＷ・Ｋ１２００Ｒ。
世界最強のエンジンを搭載したネイキッド・バイクじゃないか。これ。
ま、まあ……アリアや理子から逃げ切るにはこのくらい必要かもしれないけどな。
と、俺がキーを挿して電源をＯＮにした時――ガンッ。武藤が改造して増設したらしいキックスターターを踏み台にしてエンジンをかけながら、ひらり。
ドラグノフ狙撃銃を背負ったレキが、下着姿のまま俺の後ろに２人乗りしてきた。
「――レキ!?　戻れ！　防弾制服を着ろ！」
「あなたでは、あの狼を探せない」
確かに……レキの言う通り、あの素早い狼はもう見える範囲にはいない。
追跡・探索には、レキのドラグノフについたスコープが必要かもしれないな。
それに……女性の意思をムリに曲げることは、できない。ヒステリアモードの俺には。

「――しっかり掴まってろ」
ドルルルル……！
ローに入れてアクセルを引くと――
こちらも獣のように、１２００ccの直列4気筒エンジンがうなり声を上げた。

オートバイを使った追撃戦は強襲科で習った。特に市街地での場合は、バイクの加速度と制動性能が勝負を分ける。
その点ではこのＫ１２００Ｒは完璧だった。僅か2・8秒で時速１００キロに届くし、最高品質のフロントサスが急制動の衝撃を魔法のように和らげる。
そして、搭載ナビことレキは――
「人工浮島の南端、工事現場です」
下着姿でも全く恥ずかしがることなく、俺の後ろから狼のいそうな場所を教えてくれる。
「見えたのか」
「工事現場の中に、足跡が見えました」
よ、よくそんな物が肉眼で見えるな。さすがは視力6・0のレキだよ。
と感心しながら、俺は無人の工事現場に侵入していった。
確かに……土嚢が幾つか食い破られ、散らばった砂に足跡がついているな。

レキは、チャッ。
狙撃銃を背中から胸の前に持ち直す。
それを見た俺は、少し――暗い気持ちになる。
「麻酔弾でも持ってるのか」
「いいえ」
「……そうか」
猛獣駆除は、武偵の仕事の中でも辛いものの一つだ。
今回のように十分な準備ができない場合、最悪、無垢な動物を射殺しなければならない。
「通常弾で仕留めます。追って下さい」
相変わらずだな――レキ。
強襲科にいたころ何度か組んで仕事をしたが、この子はどんな任務を遂行するときでも眉一つ動かさなかった。自分の任務を、感情抜きで、１００％確実にこなす。
俺がギアをローにして、そろり……と、狼の足跡を追跡していくと……
「――!?」
足跡の続いていた方向とは真逆――バックミラーの中に、銀狼が映っている！
――罠か！
この狼、一度わざと砂の上に自分の足跡をつけて、その足跡を丁寧に踏んで後退し――

自分の行き先を偽装した上で物陰に潜んでいたらしい！
「賢いヤツだ！」
俺はとっさにバイクをスピンさせ、車体を盾にして無防備なレキを守ろうとする。
どんっ！
体当たりしてきた狼は、Ｋ１２００Ｒと押し相撲するように一瞬押し合ったが――
奇襲で勝てなければ即時撤退するよう訓練されているのか、すぐ退いた。
そして、ばんっ！
人工浮島にできた、海まで落ちるクレバス――10メートルはあろうかという工事中の亀裂を飛び越え、向こう側まで跳躍する。
ふん。なるほど。その亀裂、こっちには越えられないと思ってるわけか。
ヒステリアモードの俺は、ガガンッ！　左手でベレッタを2発撃ち、工事現場の足場を1つ、公園の滑り台みたいな形に倒させてもらった。
そいつを即席のジャンプ台にして――急加速しながら、跳ぶ！
そして若干ドリフト気味に、筆記体の英文みたいなブレーキ痕を作りつつ着地する。
「――私は一発の銃弾――」
後ろのシートでは、そう呟くレキがいつの間にか事もなげに立ち上がっていた。
な、なんてバランス感覚だ。

斜め上に向けられたドラグノフの銃口の先には、建設中の新棟がある。
その新棟を囲む工事用の足場を、たんっ、たたんっ。
狼が、銀色の毛並みを煌めかせながら上へ上へとジャンプしていた。
完全に、レキの射程圏内だ。
「銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない」
ああ、お前はそうなんだろうな。
「ただ、目的に向かって飛ぶだけ――」
許せ狼。

――タンッ――

真鍮の空薬莢が、きらっ、と宙を舞い……
非情な銃弾は――
狼の背中を掠めただけで、命中しなかった。
――なんと。
レキが狙撃を外すなんて、初めて見たぞ。
この子は2キロ先に置いた文庫本でも撃ち抜けるような、天才児なのに。

「……少し、嬉しいよ」
「何がですか」
「外したからさ。レキもやっぱり人間だったんだな」
「？　私は元から人間です」
「可愛いところもあるじゃないか。あの狼が、かわいそうになったのかい？」
ヒステリアモードの俺は苦笑いするが……
レキはそれでも無表情のまま、ちゃき、と狙撃銃を肩にかけ直した。
2発目は撃たないつもりらしい。
狼は、たんっ……ともうひとっ跳びして、新棟の屋上に逃げてしまった。
だが、あの向こう側は海。もうどこにも逃げられないだろう。
俺がバイクを停めて降りると、レキも、すとん。俺の横に降り立つ。
そして普段通り、抑揚のない声で言った。
「――外していませんよ」
俺が仕留めるから、レキは下で見張っててくれ――と言ったが、レキはそれを無視して新棟の屋上までついてきた。
まだフェンスの無い屋上には、海に浮かぶような東京のビル群を背景に……

銀狼が、颯爽と立っていた。

あまりに場違いな、それがゆえに美しく、何か魔的なものさえ感じさせる光景だ。

狼は俺たちを毅然とした態度で睨んでから……ぷる、ぷるる、と震え……

「……？」

どうっ……

重い音を立てて、その場に倒れた。

見ればその背、首のつけ根あたりに小さな汚れみたいな擦り傷がある。

「――脊椎と胸椎の中間、その上部を銃弾で掠めて瞬間的に圧迫しました」

レキが――

俺ではなく、狼に語りかけている。

「今、あなたは脊髄神経が麻痺し、首から下が動かない。ですが――5分ほどすればまた動けるようになるでしょう。元のように」

……そ、そうだったのか。

さっきは、銃弾を外したと思ったが――

レキは命中させるどころか、もっととんでもない神業をやってのけていたらしい。

やはり、神童だな。

アリア以上に、敵に回したくない子だよ。

「逃げたければ逃げなさい。ただし次は――2キロ四方どこへ逃げても、私の矢があなたを射抜く」

噛んで含めるように、しかし余計な感情を交えず語るレキを……

狼は、まるでその言葉が分かっているかのように見つめている。

1分。2分……マズいな。ヒステリアモードが切れてきた。

俺は万一に備え、腰に提げたベレッタを祈るような、頼るような気持ちで抜く。

「――主を変えなさい。今から、私に」

その言葉に、応えるように。

舌を出して荒い息をしていた銀狼は、藻掻くように何度か宙を引っかいてから、よろ、よろ、と起き上がった。

麻痺が少しずつ解けてきたらしい。

よた、よた、と歩いてきた手負いの銀狼は……

ごくり、と生唾を飲み込む俺の前を通り過ぎ……

レキのふくらはぎ、その柔肌に、すり。

すりすり。

頬ずりした。

まるで犬みたいに、恭順の意思を表しているな。

これも……凄い事だ。

さっきまで俺たちを殺そうとしていた猛獣を、たったの数分で手懐けるとは。

俺は感心しながらも、とりあえず安堵の息をついて拳銃を収める。

「……で、どうするんだ？　その狼」

「手当てします。服従していますから」

「それからどうする」

「飼います」

「か……飼う？」

「そのつもりで追いましたから」

「そ、そうだったのか……でも女子寮はペット禁止だぞ。まあ、そんなルールは厳密には守られてはないと思うが、ソイツはでかすぎる」

「では武偵犬ということにします」

お、おいおい……

武偵犬とは警察犬や軍用犬の武偵版で、武偵高では鑑識科や探偵科が犯人の追跡に使う犬だ。狙撃科で飼ってるヤツなんて、見たことないぞ。

ていうか、それ以前にな。

「……そいつは犬じゃなくて狼だろ。常識的に考えて」

「似たようなものです」
「いや、でも」
「お手」
と言われると、狼は早くもちゃんとレキに片手を出した。
……変わり身早えなー、お前。
まあお前も死にたくないんだろうな。普段アリアに「お手」してる俺と同じで。
そう考えたら急に親近感が湧いてきたな。
「……まあいいよ。レキの意思を尊重して、その狼のことは任せる。あと……」
「？」
「……そろそろ、服を着てくれないか？」
未だに下着姿のレキから視線を逸らしつつ……
俺は頭の片隅で、先日の白雪の占いを思い出していた。
俺は――『狼と、鬼と、幽霊に会う』――か。

狼の事は調査も含めてレキに任せ、翌日の放課後。
あのあとノゾキの罪で暴力ツインテールに追い回された俺は、全身数十か所の打撲傷を癒す間もなく……潜入作戦の訓練ということで理子の部屋に呼び出されていた。

理子によれば、俺を執事にするのは比較的簡単だが、アリアをメイドに化けさせるのは至難の業らしい。

まあ、うなずけるよな。

アリアはメイドの仕事とは対極に位置する『戦闘』のプロだ。ベビーシッターをやれと言われた殺し屋ぐらい困惑してるに違いないと思っていたら……実際そうだった。

「理子ぉ！　へ、ヘンなとこ触んじゃないわよ！」

「よいではないか、よいではないか！　おぉーアリアいいニオイ！　クンカクンカ！」

「へ、ヘンタイ！　ヘンタイ2号だわあんた！」

「へんたい理子さんが本気出したら、アリアなんかとっくにハダカエプロンだよー!?」

理子の部屋の奥から……アリアと理子のカオスな会話が聞こえてくるな。

さっき、まずはカッコから入るよ！　と理子がメイド服を出してきたのだが……貴族のアリアはあの服を着ることにやたら抵抗があったらしく、手にとって真っ赤になったまま硬直してしまっていた。

ので、まずは制服の上にエプロンだけを着けるところから始める事になったのだが……理子お手製のエプロンのデザインが、もうアリア的にはムリだったらしい。こんな子供っぽいフリフリのはイヤ！　などと犬歯をむいて拒否るので、とうとう怒った理子がアリアにエプロンをムリヤリ着付けする流れになったのだ。

で、俺はその間、後ろを向いてなさいと命令されている。
なんだかなぁ。
まあ、それはそうと……
さっきアリアが言ってた『ヘンタイ2号』って……あれ、1号、きっと俺だよな。
「うぉーできたよ！　制服エプロンだよキーくん！　アリアかわいいよアリア！」
「分かったから落ち着け理子。近所迷惑だろ」
「アリアを見てあげて！　穴が開くほど見てあげて！」
穴が開くほど見たらこっちが風穴開けられるだろうが。
と心の中で毒づくが、いま俺らの依頼人は理子だし、見ないワケにもいかない。
「いーやぁー！」
クローゼットの陰から理子に引っ張り出されてきたアリアは……
か……
かわいい、な。
セーラー服に重ねられた白いエプロンは胸の部分が大きなハート型になっていて、腰の前に垂れてる布にもハート型のポケットがある。
いかにも、少女趣味の理子がデザインしそうなエプロンだよ。
「はい！　じゃあアリア、まずはご主人様にご用件をお伺いしてみましょう！」

「……なに、それ……」
眉を寄せて理子に訊ねるエプロンアリアは、完全にアウェーってカンジだ。
どうすればいいのか分からない顔で、ハートエプロンの裾を握ってる。
「『ご主人様、ご用件は何ですか？』って笑顔で聞くの！　キーくんがご主人様役ね！」
「えっ！」
俺も、えっ、だぞ。
そういう役割で呼ばれてたのか。
まるでおままごとだな。
アリアは、ぎぎ、ぎぎぎ……と俺の方を向くと、だらーり。だらり。ぼぼぼぼぼ。
大粒の汗をかきながら、大火災みたいに赤面した。
ぎり、ぎりぎりり、と犬歯丸見せで歯ぎしりもしてる。
「はい、理子に続けて笑顔で言ってみましょう！　『ご主人様、ご用件は何ですか？』」
「ご、ッ、けほーっけほーっ！」
アゲアゲ状態の理子に命令されたアリアは、セリフを噛むどころか盛大に咳き込んでる。
これはひどい。1文字しか言えてない。
メイドの素質が無いとかっていうレベルじゃねーぞ。
「……い、いきなりはムリよ！　こ、心の準備が……！」

「がんばれがんばれできるできる！　あきらめんなよっ！　ネバーギブアップ！」
理子。
お前いますんごい嬉しそうな笑顔してるんだが、これは本当に特訓か？
楽しんでないか？　お前。
「……ご……ご……」
普段尻に敷いている俺と主従逆転する演技をさせられているアリアは、なんかの病気をしてる人みたいに赤くなったり青ざめたり白くなったりだ。
「……ご……ごしゅじん、さま……」
ぐぎぎ、ぎぎぎ、と犬歯を剥きながら物凄くムリヤリな笑顔を作るアリア。
あはぁえー、と笑ったその口から、なんか、煙みたいなの出てるぞ。
こ、こええ。ムリしすぎだって。絶対。
「……ごよ、うけん、は……？」
「はいキーくん何か注文してみよう！」
ばっ、と俺の方に手を向ける理子。
いやー……
いきなり言われてもなぁ。
「じゃあ……えっと、洗濯でも頼めるか？」

と、引きまくりの俺が後ずさりながら適当に言うと。

「胸で洗濯しちゃだめだよー？」

バリバリバリバリッ！

ずしゃあっ！

……説明すると……

理子のセリフと、アリアが理子に発砲した音と、俺がひっくり返った音だ。

大丈夫なのか、この大泥棒チーム。

先が思いやられるよ。

潜入作戦をやるからには、アリアだけでなく俺も執事の仕事について学習しておく必要がある。

というわけで数日後の放課後、俺は理子に渡された資料で執事について独学し……5時頃、帰宅の途についた。

探偵科棟の外に出ると……

雨だ。

……傘。

持ってない。

学習しろよ俺。

大雨ってほどじゃなかったのでバス停まで強行突破を試みたが、そこは俺。運の悪さに定評のある2年の遠山だ。選択教科棟のそばでコントみたいに本降りになってきたから、廂の下で雨宿りをすることにした。

廂を伝ってぽたぽた落ちる大粒の水滴を、口をへの字にして見ていたら……

そこに、ちらっ……と、氷の結晶が一瞬混じったような……？　気のせいか。

「……」

ボケーっと突っ立っていると……背後の音楽室から、ピアノの音が聞こえてくる。

……弾いてるヤツ、やたらうまいな。

この曲は何だっけ。

たしか音楽の授業で……そうだ、劇的オラトリオ、だっけ。それをピアノ曲にアレンジしたものだな。

曲名は……『火刑台上のジャンヌ・ダルク』。

……

……ものすごく。

……イヤな予感がするぞ。

そーっと振り返った俺は、

「――うっ！」

見えた音楽室の中の光景に、思いっきり後ずさる。

俺（おれ）の声に気づいてピアノから顔を上げた、武偵高のセーラー服姿のソイツは――

（ジ……ジャンヌ!?）

先月、アドシアード期間中に白雪（しらゆき）を誘拐し、地下倉庫（ジャンクション）で俺たちと戦った『魔剣（デュランダル）』こと、ジャンヌ・ダルク30世だったのである。

ジャンヌは俺と目が合うと、その切れ長の碧眼（へきがん）を少し見開いてから……

すっ、と、音楽室のドアに流し目した。

――来（フォロー）い、ミー、って事らしい。

ベレッタの安全装置（セーフティー）を外して入った音楽室には、確かに、魔剣（デュランダル）・ジャンヌがいた。

片手を腰にあて、相変わらずのクールな表情をしているな。

細長い2本の銀髪おさげを頭の上でまとめたジャンヌは、ここではさらに長い後ろ髪も背中に垂らしていた。

「……司法取引、かよ」

舌打ち交じりに俺が言うと、ジャンヌはフンッと鼻を鳴らした。

「そういうことだ」

口紅を差したローズピンクの唇が、バカにするような笑みを形作る。
「とはいえ、今の私は囚われの身も同然だ。取引条件の1つで、東京武偵高の生徒になることも強制されているのだからな。だから遠山、お前が拳銃の安全装置を外していようと私に戦う意思はない。今の私はパリ武偵高から来た留学生、情報科2年のジャンヌだ」
――そういう設定かよ。
ていうか同い年だったのか。
ちょっと大人っぽいから、年上かと思ってたんだがな。
「それで、その似合わないセーラー服も着てるわけか」
本当はよく似合っていたが、腹立ち紛れに言ってやると、
「……私とて恥ずかしいのだぞ？」
ジャンヌは窓ガラスの方を向き、そこに映る自分の姿に眉を寄せた。
女子にしては上背があるので、背筋を伸ばすと――ちょっとヘソが見えるな。
「だいたい何だ、この制服は。いくら女性が拳銃を腿に隠すのがデリンジャー時代からの伝統とはいえ――未婚の乙女は、こんなにみだりに脚を出すものではない」
って言う割にはしっかり着てるじゃねーか。お前。
まああの、ジャンヌの腋を見せびらかすような鎧もどうかとは思うがな。
「イ・ウーに制服はなかったのか」

探るように言ってやると、窓に映る自分を熱心に見ていたジャンヌは――すっ、と、流し目するようにこっちを見た。

「知りたいのか。イ・ウーの事」

「アリアも理子も教えてくれないんでな」

「ふむ……イ・ウーは知っているだけで身に危険が及ぶ、国家機密だからな。しかし私はむしろ教えて、私をこんな目に遭わせたお前を奈落の底に叩き落としてやりたい。だが、そう何もかも話すワケにはいかないのだ」

「イ・ウーの誰かに禁じられてるのか？　話す事を」

「違う。問題は、イ・ウーが私闘を禁じていないことだ。話す内容によっては、私が狙われる。だから……差し障りのなさそうな部分だけ、抜き出して話してやろう」

「狙われても、お前ほどの戦闘力があればやり過ごせるだろ」

ちょっと皮肉混じりに言った俺に、

「――ムリだ」

誇り高きジャンヌ・ダルクの末裔は、やけにハッキリと首を横に振った。

そして、できれば聞きたくなかった続きのセリフを――言った。

「私の戦闘能力は、イ・ウーの中で最も低いのでな」

何……だって？

この魔剣（デュランダル）・ジャンヌが……
俺とアリアと白雪（しらゆき）が3人がかりで仕留（し）めた銀氷の魔女・ジャンヌが……
イ・ウーでは――最弱、なの、かよ。
なんてこった。アリアはそんな組織を敵に回してんのか。
――ていうか、俺も、ってことだぞ。それ。

俺は音楽室の机に腰掛け、ジャンヌは折り目正しくイスについた。
背筋がシャンとしてるな。膝（ひざ）もちゃんと少し傾けてお嬢様座りしてるし。
さっきより距離が近いので……コロンか何かだろうか？　若草のような、淡い香りがジャンヌからする。ジメジメしたこの季節、この爽（さわ）やかさは悪くないな。
「さてさっきの質問に答えるが――イ・ウーに制服はない。この学校と同じだ。教える者は、制服を着ない」
そこからかよ。
正直、制服うんぬんは別にどうでもいいんだけどな。生真面目（きまじめ）なヤツだ。
「……お前、先生だったのか？」
理子はこのあいだ、イ・ウーを『退学』になったと言っていた。
ということは、学校のような組織だとは思うのだが……

「イ・ウーでは、全員が教師であり生徒なのだ。天賦の才を神より授かった者達が集い、技術を伝え合い、どこまでも強くなる――いずれは、神の領域まで。それがイ・ウーだ」

そ……そういう場所、だったのか。

だから白雪も狙われたんだな。あの超能力目当てで。

「何が目的なんだ、お前たちは」

「組織としての目的は、無い。目的は個々人が自由に持つものだ」

ゴクリ。

断片的に見えてきたイ・ウーの不気味な正体に、俺は生唾を飲む。

天才同士がお互いの能力をコピーし合い、超人になる。

そのコンセプト自体はいい。凄い事じゃないか。

だが問題は――理子やジャンヌのやり口を見るに、ソイツらが遵法意識のカケラもない無法者の集団だって事だよな。

「お前が理子に作戦立案術を教えて、理子がお前に変声術を教えて……ってのも、その教え合いの1つか」

「そうだ」

「なるほどな。無法者同士、仲睦まじく……ってわけか」

「仲は、いいぞ。理子は努力家だからな。私は彼女が好きだ」

「……努力家？　あの理子がか？」
「イ・ウーで最も貪欲に力を求め、勤勉に学んでいたのが――峰・理子・リュパン4世だ。理子は自分を誰よりも有能な存在に変えたがっていた。悲痛なまで、一途に……な」
そう語るジャンヌの言葉に、俺は少なからぬ驚きを覚えていた。
おバカキャラと見せかけて、陰で努力してるタイプだったんだな……理子は。

中等部の女子が音楽室をノックしてきて、部活でここを使いたいというから――俺とジャンヌは話を中断して、音楽室を出た。
雨は小降りになってたので、同じく傘を持っていなかったジャンヌと近くのファミレス『ロキシー』に駆け込む。
ジャンヌはこの武士みたいな性格はともかく、見た目は西洋のファンタジー映画にでも出てきそうな美人だ。連れていると目立つ。
とにかく目立ちたくない俺は人目につかないよう素早くドリンクバーを2人分注文し、ジャンヌを装置のところまで引っぱっていった。
コップを取ってふと見れば……ジャンヌは眉を寄せて、ドリンクバーを見ている。
「これはどういう装置だ」
知らないのかよ。

「こうやって、お茶とかジュースを出すんだ。10種類ある。番号と写真がついてるだろ」
と、俺は⑨番、メロンソーダのボタンを押す。
ぽち。ちょろちょろ……
「私はどれを押せばいいんだ」
「好きなのを押せよ。飲み放題だ」
「飲み放題？　どういう意味だ」
「いくら飲んでもいいって意味だよ」
「いくらでも？」
「そうだよ」
「じゃあ例えば……１００リットル飲んでもいいのか」
「……いいんじゃねえの」
「飲めるわけがないだろう。お前はバカか」
「お前が言ったんだろ！」
俺はマジメに変なことを言うジャンヌに、スッ転びそうになる。
ったく。アリアといいコイツといい、転校する前に少し日本の常識を勉強してこいよ。
と、俺は眉を寄せつつメロンソーダをその場で一口飲んだ。
たまに飲みたくなるんだよな。このワザとらしいメロン味。

「そういえばジャンヌお前、日本語うまいな」
「イ・ウーの公用語は日本語とドイツ語だったからな」
公用語……？　国かよ、イ・ウーってのは。また分かんなくなってきたな。
と、ドリンクバーに初挑戦するジャンヌ・ダルク……というシュールな絵の横で、俺は少し首を傾げるのだった。

俺たちは人けのない席を探して、店内の隅っこの2人用テーブルについた。
氷を入れてなかったハズのジャンヌのレモンティーに、いつの間にか氷の結晶が浮いていたが……そこには敢えて、ツッコまないでおく。
強烈な氷結弾も使える銀氷の魔女ジャンヌだが、そういう細かい芸もできるんだな。
「話は戻るけどな。理子は何のために強くなろうとしてたんだ？　イ・ウーで」
俺が声を潜めて聞くと――
ジャンヌはその切れ長の美しい目で、1つ長い瞬きをする。
「――自由のためだ」
それはどこか、理子を気の毒がるような声だった。
「自由？」
「理子は少女の頃、監禁されて育ったのだ」

な……何だって？

「理子がいまだに小柄なのは、そのころロクな物を食べさせてもらえなかったからで……衣服に対して強いこだわりがあるのは、ボロ布しか身にまとう物がなかったからだ」

「じょ、冗談だろ？　リュパン家は怪盗とはいえ、高名な一族のハズだぞ？」

「お前は知らないだろうがな――リュパン家は理子の両親の死後、没落したのだ。使用人たちは散り散りになり、財宝は盗まれた。最近、母親の形見の銃を理子は取り返したようだがな」

「リュパン家が落ちぶれて……理子はどうなったんだ」

「その頃まだ幼かった理子は、親戚を名乗る者に『養子に取る』と騙され……フランスからルーマニアに渡った。そこで囚われ、監禁されたのだ。長い間な」

理子……おバカでブリっ子で、いつも明るい理子に……そんな、過去が？

まさか。

にわかには信じがたい話だな。

「……マジかよ。誰に監禁されてたんだ」

「『無限罪のブラド』――イ・ウーのナンバー2だ」

「ブラド……」

「知らない名前ではないだろう。お前達が盗みに入ろうとしている紅鳴館は、奴の別荘の

1つだ」

……潜入作戦を、知ってやがる。

理子から聞いたのか。

俺が黙っていると、ジャンヌは少しこっちに向き直った。

「とはいえ――理子が監禁されていた話については、私も詳しくは知らない。ブラドから僅かに聞いただけだからな。しかし……ブラド本人については、教えておこう。万が一の時のためにだ。あいつは、危険すぎるからな」

「危険……か。それなら、俺なんかよりアリアに教えておいた方がいいんじゃないのか」

「いや、お前の方がいい。アリアに教えると猪突猛進にブラドを襲って返り討ちに遭い、反撃の手が私にまで及びかねないからな」

アリアに教えると大戦になりそうだが……

調査能力も戦闘力も劣る俺は、自分からはブラドを攻撃できない……って理屈か。

信頼されてるなー俺。逆の意味で。

「ここからの話は、非常時にのみアリアと共有しろ。いいな？　まず、先日ここに現れたというコーカサスハクギンオオカミのことだ。あの狼のことは情報科で調査中だが、私の見立てでは――ブラドの下僕と見て、まず間違いない」

「しもべ……？」

「ブラドの飼い犬のようなものだ。放し飼いだがな」
「……つまり、俺たちの動きがブラドにバレてるってことか？」
「そこまでは私も確証がない。狼は狙撃科の少女に奪われてブラドの所に帰れなかったし、奴の下僕は世界各地にいて――それぞれかなり、直感頼みの遊撃をするようだからな」
な、なんだそりゃ。世界中に手下って。
まるで映画の『００７』に出てくるようなヤツだな。
「……詳しいんだな。ブラドのこと」
「我が一族とブラドは、仇敵なのだ。３代前の双子のジャンヌ・ダルクが初代アルセーヌ・リュパンと組んで、３人組でブラドと戦い――引き分けている」
「ブラドの……先祖と、か？」
「いや、ブラド本人とだ」
「ちょ、ちょっと待て。いつの話だよそれ」
「１８８８年。まだ下半分しかできていなかった、パリのエッフェル塔でだ」
「お、おい……１２０年前から生きてるのかよ、そのブラドってヤツは。ありえんだろ、そんな人間……」
「奴は人間ではない」
……きた。

きたきたきましたよ。
もう驚かないぞ、と、俺はヤケクソ気味にメロンソーダをあおる。
「そっち系の話か……で、今度は何だ？　悪魔使いか？　メイジか？　属性術士（アルケミスト）か？」
――コイツらと付き合いだしたのが運の尽きだ。
超常現象に対する心構えだけはできていた俺は、ゲーム用語を適当に並べてみる。
「うむ……私も、日本語で何といえばいいのかは知らないのだが……」
ジャンヌは口元に指を寄せるような仕草をして、考えてから……
「オニ、だ。強いていえば」
と、言った。
『鬼』、かよ。
『狼』に続いて、白雪（しらゆき）の占いにあった2つ目の単語が出てきたな。
「……ブラドは理子（りこ）を拘束する事に異常に執着していてな。檻（おり）から自力で逃亡した理子を追って、イ・ウーに現れたのだ。理子はブラドと決闘したが、敗北した。ブラドは理子を檻に戻すつもりだったのだが、そこで成長著（いちじる）しかった理子に免じて――ある約束をした」
「約束？」
「『理子が初代リュパンを超える存在にまで成長し、その成長を証明できれば、もう手出しはしない』と」

「初代リュパンを、超える……」

呟いて俺は、先々月のハイジャックを思い出す。

あの時、理子は言っていた。

『アリアと戦うのは、自分が初代リュパンを超えるためだ』と。

怪盗アルセーヌ・リュパンと名探偵シャーロック・ホームズは１００年ほど前に戦い、引き分けている。

リュパンの曾孫・理子は、同じくホームズの曾孫であるアリアを倒そうと躍起になっていた。条件を合わせるために、俺……相棒のジョン・Ｈ・ワトソン役まで用意して。

その裏事情が、だんだん見えてきたな。

「どんなヤツなんだ。その、ブラドってのは」

訊ねると、ジャンヌは少し考えるような顔をしつつ……

胸ポケットから、サッ、と縁なしメガネを取り出した。

制服の中で、大きすぎず小さすぎずの胸が少し揺れた……ので、目を逸らす。

「……お前、目が悪かったのか？」

「ほんのすこし乱視だ。普段は眼鏡など使わない」

と言い、ジャンヌは続けて学校指定の黒カバンからノートとサインペンを取り出す。

そしてノートを開き……

「あのバケモノのことは、口で話しても分かるまい。ヤツの姿を絵で描いてやろう」
きゅっ、とペンを鳴らし……
まずは、ヘンテコUFOのようなものを書いた。
「いいか。ブラドが留守にしている館に潜入するのはいいが、もし万が一ブラドが帰ってきたら——即刻、作戦を中断して逃げろ。絶対に勝てない」
真剣な面持ちで線を書き加えるジャンヌは、もこもこ……もこもこもこもこ。
なんか、ピーマンみたいにゴツゴツした頭を描いてるな。それ。
ていうかジャンヌ……お前……
「もし戦いになっても、逃げるための戦いをしろ。双子のジャンヌ・ダルク達はブラドを純銀の銃弾で撃ち聖剣デュランダルで突いたが——ヤツは死ななかった、と記録にある。ヤツは、死なないのだ」
ジャンヌは、きゅっ、きゅっ。
なんか、翼みたいな、触手みたいなものを描き加えてるぞ。
お前、もしかして……絵……
「私も直接見たわけではないが、ヤツが敗れたのは——理子との決闘のあと、イ・ウーのリーダーと戦った時だけだ。その後、イ・ウーで聞いた情報だが……ブラドを倒すには、全身4か所にある弱点を同時に破壊しなければならなかったらしい」

きゅっ。きゅっ。

サインペンが鳴る。

「4か所の弱点のうち、3か所までは判明している。ここと、ここと、ここだ……ヤツは昔、ヴァチカンから送り込まれた聖騎士（パラディン）に秘術をかけられて、自分の弱点に、生落ちない『目』の紋様（もんよう）をつけられてしまったのだ。よし。だいぶ描けたぞ」

ジャンヌが『だいぶ描けた』と主張しているその絵は、

「な、なんだ……それ……！」

ものすごく、ヘタクソだった！

ジャンヌには、絵心がないのだ。

喩（たと）えるなら、中等部の女子がプリクラに描くラクガキよりヒドイ。

「似てる似てない以前に、何だその3歳児のおえかきみたいな絵は！」

「お、おえかき――？　し、失礼なっ！」

邪神みたいなイラストの口の中を不器用に塗りつぶしていたジャンヌは、ぎろ、とメガネの下から上目遣（うわめづか）いに俺（おれ）を睨（にら）んで頬（ほお）を赤らめた。

やはり本人は真剣に描いてたらしい。

「ブラドはこういうヤツなのだ！　お前は私を疑うのか？」

「いや、疑う疑わない以前にヘタ……ま、まあいい。その画力でイラストを描こうとした

お前の勇気は認める」

「これはちゃんと似ているっ。取っておけ」

自分ではうまく描けたと思っていたらしく、ジャンヌはその絵を俺に押しつけてきた。

ヤだなあ。

こんな絵、持ってるだけで呪われそうじゃねえか。

だが……まあ何にせよ、潜入する紅鳴館に、この大ボスはご不在とのことだ。

いるのは管理人だけ。戦う心配はしなくていい。万が一このバケモノを見たら、全力で逃げればいい——ってことだろう。

ただ……油断はならないぞ。キンジ。

この間は油断して痛い目を見た、というかこのジャンヌに見させられたワケだからな。

このおえかきも、一応もらっておこう。

4弾　潜入作戦（スリップ）

6月13日。いよいよ、潜入作戦開始の日がきた。
これから2週間、俺とアリアは横浜の紅鳴館（こうめいかん）に潜入する。
こういう作戦行動の期間、武偵高（ぶていこう）の生徒はしばらく学校を欠席するわけだが……理子（りこ）に言われたとおり『民間の委託業務を通じたチームワーク訓練』などとした書類を教務科に提出したら、すんなり通った。いろんな意味で大丈夫なんだろうか、この学校。
で、潜入のフォーメーションは当初の予定通り、俺とアリアが潜入チーム。
理子は遠隔で連絡を取り、作戦立案や必要な機材の調達・輸送を行（おこな）う役割だ。
ミッションは、理子の十字架の奪取。
つまり――『大泥棒大作戦』、だ。理子の言葉を借りればな。

朝早くに待ち合わせしたモノレールの駅で、俺はメイドになりきる特訓を経（へ）たアリアが少しはしおらしくなってることを期待したが……
淡いピンクのシフォンワンピースで現れたアリアは、私物が詰まったトランクを当然のように俺に持たせるいつものアリアだった。

人間、そう簡単に変われるもんでもないらしい。
と、俺がこの世の哀しい真実に溜息をついていると――
「キーくん、アリア、ちょりーっす！」
理子の声がした。
それに顔を上げた俺は――

（――カ、カナ!?）

時が静止したかのように、立ちすくんだ。
カナ。
い、いや、ちがう。
あれは理子が変装したカナだ。そもそも声が理子だし、背が違う。カナは――俺と同じぐらい背があった。
数年前のカナによく似ているが――やはり違う。
「……り、理子……なんで、その顔なんだよ！」
ニセモノで良かった、と、思おう。
有り得ないことだが、もし本物のカナだったら……俺は、この金縛りからずっと解き放

たれなかっただろうから。
そう――本物のカナは。
周囲の時が止まるほどの、美しい人で。
その柔和そうな、長いまつげの目は――視線そのものに引力をもち、男も女も無関係に人の心を虜にした。
優しげな笑みを形作るその唇は、どんな荒れた心も穏やかに変える――魔法のかかった薔薇の花びら。
アリアや白雪、理子やレキ、ジャンヌもまたそれぞれに美しいが……カナの美しさは、その上を行っていた。
もはや神々しい、崇高な存在だったのだ。カナは。
「くふっ。理子、ブラドに顔が割れちゃってるからさぁ。防犯カメラに映って、ブラドが帰って来ちゃったりしたらヤバいでしょ？　だから変装したの」
「だったら他の顔になれ！　なんで……よりによってカナなんだ！」
俺は出来るだけ感情を抑えようとするが、それでも声に混ざる興奮の色を隠せない。
「カナちゃんが理子の知ってる世界一の美人だから。それにカナちゃんはキーくんの大切な人だもんね。理子、キーくんの好きな人のお顔で応援しようと思ったの。怒った？」
――チクショウ。

「……いちいち……ガキの悪戯に腹を立てるほど俺もガキじゃない。行くぞ」
「心の奥では喜んでるくせにぃ」
言われた俺は……何も答えられず、理子と自動改札へ向かう。
「な、何。急にどうしたのよキンジ。理子が……ずいぶん美人に化けてきたけど、これ、誰の顔なのよ。ねえ――」
俺たちのやり取りをポカーンと見ていたアリアが――少し焦るような声で聞いてきた。
だが俺は、振り返らない。
何も、言えない。
「ねえキンジ、理子！　ちょっと！　誰なのよそれ！」
そりゃそうだよな。アリア。
お前にしてみりゃ、自分が独占していたドレイの俺が……
他の誰か、しかもこんな美人に……強い気持ちを持っていた、なんて……
考えた事もなかったんだろうからな。
「ねえ――カナって誰よっ！」
すまん――答えられないんだ。
許してくれ。アリア。

横浜へ向かう京浜東北線の中で、理子はカナの顔でずっと喋りかけてきた。
話題は下らない事ばかりだったのだが、俺は、理子の狙い通り……その顔を眺めているだけで、懐かしくて……冷たくあたりながらも「まあな」とか「そうかよ」とか、受け答えしてしまっていた。
そして、悔しいが、幸せな気分だった。
（それにしても、この理子が……昔、監禁されていたなんて……）
横浜駅から乗り換えたバスの中で、俺はカナ理子を横目で見つつ密かに思う。
ジャンヌがウソをついている気はしなかったが、『監禁』の2文字はこういう悪ふざけばかりのおバカキャラな理子を見てると……やはり、信じがたい。
なので、俺はその件について理子と何も話せなかった。
いっそこの道中で聞いてしまおうかとも思っていたのだが、遠足気分でとんがりコーンを頬張る理子を見ていると……やっぱり何か、空気が違う。
で、結局、俺と理子はただの友達みたいにずっとムダ話ばかりしてしまうのだった。
そんな俺と理子をアリアは不安そうにチラチラ盗み見していたのだが——目的地、横浜郊外の紅鳴館にタクシーで乗り付けた途端に、もっと不安そうな顔になった。
昼なのに薄暗い、鬱蒼とした森の奥にあったその館は……
「の、呪いの館……ってカンジね……」

呟くアリアの表現が当てはまりすぎる、ホラー・ゲームにでも出てきそうな、妖しーい洋館だったのだ。

見取り図からは、この禍々しい雰囲気までは分からなかったな。

周囲をかこむ鉄柵はドンヨリした黒雲めがけて真っ黒な鉄串を突き上げており、さらにその内側には茨の茂みが続いている。

本日だけであることを祈るが、館本体は薄気味悪い霧でモヤーっと包まれてる。

あ、コウモリが横切った。

ずざ。

こういう雰囲気がニガテらしいアリアは、それだけで思いっきり後ずさってる。

「初めまして。正午からで面会のご予定をいただいております者です。本日よりこちらで家事のお手伝いをさせていただく、ハウスキーパー2名を連れて参りました」

と言う理子がちょっと引きつった顔で挨拶している、紅鳴館の『管理人』の姿を見て……俺も、思いっきり不安になった。

いきなり失敗じゃねえのか？　この潜入作戦。

というのも、門の前で執事とメイドのバイトを出迎えた『管理人』は――

「い、いやー。意外なことになりましたねぇー……あはは……」

と苦笑いする、武偵高のイケメン非常勤講師――小夜鳴、だったのだ。

館のホールに入ると、狼と槍……いや、串？　の紋章の旗が壁に張られてある。
年代物なのか色あせてて、少し腐っているカンジだ。不気味だな。
こらそこ。アリア。人ん家の装飾品をいきなり怯えまくった表情で見るな。
「いやー、武偵高の生徒さんがバイトですかぁ。まぁ正直な話、難しい仕事でも無いので誰でもいいといえばいいんですが……ははっ。ちょっと、気恥ずかしいですね」
この間の狼にやられた腕にまだギプスをつけていた小夜鳴は、アリアと理子がソファに掛けてから（レディーファーストってことらしい）ホールのソファに腰を下ろす。
俺は努めて平静を装い、小夜鳴の向かいに腰掛けた。
「小夜鳴先生、こんな大きなお屋敷に住んでたんですね。ビックリしましたよ」
「いやー、私の家じゃないんですけどね。私はここの研究施設を借りることが時々ありまして、いつの間にか管理人のような立場になってしまっていたんです。ただ……私はすぐ研究に没頭してしまう癖がありますからね。その間に不審者に入られたりしたら、あとでトラブルになっちゃいますから……むしろ、ハウスキーパーさんが武偵なのは良いことかもしれませんね」
災い転じて福と成す。
小夜鳴はその不審者こと俺とアリアを、どうやら予定通り雇ってくれるようだ。

「――私も驚いております。まさか偶然、学校の先生と生徒だったなんて」

これは本当に想定外だったらしく、派遣会社の人間を装う理子も少し困惑気味だった。

「ご主人様がお戻りになられたら、ちょっとした話の種になりますね。まあ、この2人の契約期間中にお戻りになられれば……の話ですが」

理子は、さりげなく館の主人・ブラドが潜入中に戻ってくるかどうか確認している。

「いや、彼は今とても遠くにおりまして。しばらく、帰ってこないみたいなんです」

小夜鳴の答えに、俺は心の中でよしよしと思う。

ジャンヌに脅されてるからな。あのヘタクソな絵で。

この館の主人は『鬼』だって。

「ご主人は――お忙しい方なのですか？」

理子が、カナの顔で小夜鳴に訊ねる。

「それが実は、お恥ずかしながら……詳しくは知らないんです。私と彼はとても親密なのですが……直接話したことが無いものでして」

と苦笑いしながら語った小夜鳴の言葉は、なんだか謎かけみたいだった。

親密だが、話したこともない？

メル友みたいな関係なのか？　通常モードの俺にはよく分からん。

別動隊の理子が館を去り、俺とアリアは2階に自分たちの部屋をあてがわれた。
「すみませんねぇ。この館の伝統といいますかルールで、ハウスキーパーさんは男女共に制服を着ることになってるんです。むかし仕立てられた制服がそれぞれの居室にあって、サイズも色々ありますから、選んで着て下さいね。仕事については、前のハウスキーパーさんたちが簡単な資料を台所に置いてましたから……それを読んで、適当にやっちゃってください」
あは、と女性好感度の高いタレントみたいな笑顔を見せる小夜鳴。
「で、申し訳ないのですが私は研究で多忙でして……地下の研究室にこもり気味の生活をしてるんです。ですから、お二人と遊んだりする時間はあまり取れないんです。ほんと、すみませんねぇ」
いや、別にこの家の人なんだから謝らなくてもいいと思うけどな。
「ヒマな時は……そうですねぇー……あ、そこの遊戯室にビリヤード台があるんですよ。それで遊んでてOKですよ。誰も使ってないから、ラシャもほとんど新品なんです」
と、小夜鳴は1階のホール脇にある薄暗い遊戯室を示してから――
「それじゃあ早速ですが、失礼します。夕食の時間になったら教えて下さいねー」
なんて言いつつ……コツコツコツ……と、螺旋階段を降りて……
ばたん。

扉を閉ざし、早くも地下の研究室に閉じこもってしまった。
ワォーン……と、館の外、遠くから野犬か何かの遠吠えが聞こえてくる。
だだっ広いホールに残された俺とアリアはお互い顔を見合わせてから……
「……そんじゃま、働くか」
「……そ、そうね」
まずは普通に働いて管理人を信用させる、という計画通り、小夜鳴の指示に従って制服に着替えることにした。
俺は早速自室に入り……クローゼットから古めかしい燕尾服を取り出す。
ちょっと厚手で略式、尾が短めだが、サイズはピッタリのがあるな。
こうやって、着て……と。
できた。テキトーそうな執事の一丁上がりだ。
……にしても、哀しいほど違和感がないな。俺執事。
人を使う立場じゃなくて、使われる立場の方がしっくり来るってのは、アリアとの辛い生活体験で染みついた雰囲気に違いない。元からその素質はあったのかもしれないが。
で、そのアリアだが……
靴までちゃんと履き替えた俺が部屋をノックしても、自室から出てこない。
『管理人に怪しまれないよう、行動はテキパキと』

というのが事前の打ち合わせのハズだったのだが。

「おいアリア。とりあえず台所行くぞ」

扉越しに声をかけるが、返事がない。聞こえてないらしい。

ちょっとドアが厚いせいもあるっぽい。何で、この屋敷はブラインドやカーテンに至るまで何でも厚手なんだろうな。薄暗くてイヤだぞ。

しょうがないのでノブに手をかけたら……がちゃ。開いた。

「おい」

俺が入ってきたことに気づかないほど集中して、全身鏡を覗き込んでいたアリアは――

「う～～～……」

メイド服に着替えた自分の姿に、思いっきり、赤面癖モードを全開にさせていた。

理子との特訓の甲斐あって自分でメイド服を着れていたアリアは……そ、そういう趣味は俺には無かったハズなんだが、なんか……すごく、イイぞ。

カワイイ。

かわいすぎる。

クラッときた俺は――つい、探偵科で習った『服装分析』を行ってしまう。

まずレースとフリルを重ねたカチューシャは、手前がフリルで奥がレース。二段構造になっている豪華なものだ。

黒いワンピースの胸元はざっくりと開かれており、そこには何段重ねにもなった純白のフリルが露出している。あれはブラウスの代わりにフリルだけでできたチューブトップを着ているのだろう。

さらに、エプロン。アリアの細い腰からミニスカートの前面上部までは、白いカクテルエプロンで短く覆われている。対照的にバックの帯は長く、オシリの上で大きく蝶々結びされている。いいコントラストだ。

短いスカートを中からふわっと広げる4段、いや5段階層の白いペチコート。幾重にも重なった布のひだひだを、カーネーションのように咲かせている。

まだだ。まだ終わらない。ストレートでありながらおぼろげに女の子っぽい曲線を感じさせるアリアの脚のつけ根を演出するのは、ドロワーズ。先のペチコートとの合わせ技により、スカート内の布量は完全にメーターを振り切り爆発寸前だ。

そしてその全ての素材が、質の高いベルベット、シルク、そして明らかに職人手作りの精緻なレース布で作られていた。その価格――100万円は、下らないだろう。

まさに、国宝級のメイド服である。

ちなみにこの『服装分析』は探偵科で習った技術で、人物の特徴を分割して覚えておき、捜査や作戦を円滑に進めるための作業である。決して、他意は無い。

「ま、まあ、たまにはね……」

鬼武偵のアリアさんにも、自分の姿の半端ないカワイさは理解できたのだろう。
戸惑うような表情をしながらも、腕組みしてうんうんと1人でうなずいている。
この至高のメイド服、どうやらアリア嬢のお眼鏡にもかなうものだったらしい。
アリアは恥ずかしさにノボセつつ……自分に見とれていて、まだ俺に気づいていない。
「まあ、た、たまにはいいわね。こういう平民の服も……」
……平民って。
普段から平民服の代表たるセーラー服を着てると思うがな。お前。
と俺が心の中でツッコんでいると、アリアは……ちょっと引きつりつつも、鏡に向けてニコッと笑顔を作った。作り笑いがなんとか出来るようになっている。
そして、くるりんっ。
ひらひらスカートのふんわり感が嬉しいらしく、エナメルの室内靴を鳴らしてその場でコマみたいに1回転した。
一瞬、俺と目が合った。笑顔のまま。
アリアは、もう1回転。ふんわりゆったりとしたパフスリーブの腕を乙女っぽく曲げて、袖口に咲いた霞草のようなレースをヒラヒラと踊らせた。
また俺と目が合った。今度は笑ってない。
そして、裾にフリル状のギャザーがあしらわれたサテンのミニエプロンをひらめかせて

……ぴた。俺と正面向きに停止した。

仁王立ちである。

真っ赤である。

鬼の形相である。

ずん、ずん。ずんずんずんずん。

床板を踏み抜きそうな歩き方で俺に迫ったアリアは、

「あ、いや、呼んでも反応が無かったかおうっ!?」

ばんっ！

いきなり高々とジャンプし、俺の顔面を両脚で挟み込んだ。

都合、俺はアリアを前後ろ逆に肩車してるような姿勢になる。

アリアの白肌が僅かに透ける、シースルーのハイソックス。その左右のふくらはぎに1個ずつ飾られたバックリボン——後ろ姿をかわいらしく演出するはずの白いリボンが、今、俺の首をぎりぎり絞め上げる脚部の表面でひしゃげている。

め、目の前はフリル、フリル、フリルとレースでいっぱいだ。

何がどの布なんだ、これ。

「で？　ご用件は何ですか？　ご主人さま？」

怒りが行くところまで行ったのか、アリアの震える声はもはや冷静である。

特訓のおかげで言えるようになったんだな。そのセリフ。
まさかこんな状態で聞くことになるとは思わなかったけどな。
「よ、用件ってほどの事でもないんだが……頼みとしては、殺さないでほしい」
「次、のぞいたら――脳天風穴地獄ッ！」
ばっ！
メイドアリアは俺の頭を脚でロックしたまま、身体を思いっきり後ろに反らせた。
ぐるんっ！　俺の天地が上下入れ替わって――どがんっ！
俺執事はいきなり、アリアの両脚に引っぱられて床に脳天を打ち付けた。
1時間後に意識を取り戻してから分かったのだが、これはプロレスでいうところの――
フランケンシュタイナーという荒技である。
そんなモンを人にぶちかます凶暴メイドは、世界中探してもコイツだけだろう。
ていうかどこまで何でもアリなんだよ。バリツの技術。

それから数日間の生活で分かったことだが――
見た目がしっくりくるだけじゃなく、俺には、執事の才能があったらしい。
んな才能いらねーんだが、まあこれはちょっとした発見だな。
というのも俺は元々1人暮らしだったから家事はできるわけだし、手先も器用な方だ。

学校でもあまり自分が前に出ていくタイプじゃなかったから、立場的にもしっくりくる。
そして極めつけは、アリアとの生活で同居人への気配りの精神が鍛えられていたこと。
そりゃ鍛えられるよ。気配りできなきゃ、命が危ないんだからな。
というわけで俺は日々、地下研究室に閉じこもる小夜鳴に新聞を届けたり、電話番をしたり、門番の真似事をしたり、それなりにちゃんと仕事をこなしながら――
――着々と、紅鳴館の状況を調べていった。
事前に理子が調査してくれていた防犯カメラの視界を避けつつ、館内にある防犯設備や小夜鳴の行動パターンをつぶさに観察していく。
一般高校に転校するまでの繋ぎとして入った探偵科だったが、あの授業がけっこう役に立ってるな。人生、何でも勉強しといて損は無いもんだよ。

7日目の夜10時半過ぎ、シャワーでも浴びるかと思っていた頃……
窓の外の真っ暗な森には、今日も大粒の雨が降っていた。
ゴロゴロ……と、遠雷の音もしてきたな。
今年の梅雨は本当によく降るよ。
小夜鳴が閉じこもってる地下室なんかは、ジメジメしないんだろうか？
「……？」

携帯が震えた。
見れば、アリアがかけてきている。
「もしもし」
『もしもしキンジ？　あ、あたし。アリアよ』
分かってるって。
「なんだよ」
『あ、えっと……えと』
……なんだ？
なんか、電話をしたはいいけど話すネタがない、みたいなカンジだな。
「どうかしたか」
『え、あ。えっと、アプリで遊ぶわよっ。遊戯室に来なさい』
――アプリで遊ぶ。
これは俺たちが事前に決めていた暗号（サイファー）で、『理子との連絡』を意味する。
確かに今夜、俺たちは理子との定期連絡をする予定だが……あれは深夜2時からだぞ？
「まだ早いだろ。それに別に、あれは集まってやることじゃない」
びかびかっ、ガガーン！
俺のセリフの後、外から雷の音がした。

今のは近かったな。

『――ひぁ!?』

ん？

なにやらマヌケなアニメ声が、電話から聞こえてきたぞ。

『い、い、いいからすぐ来ること！　あたしが来いと言ったらすぐ来るっ！』

あー。

次に言われるセリフがだいたい予想できちまったな。

『来なきゃ風穴！』

がちゃ。ツーツーツー。

ほらな？

先月の風穴祭りでは東京湾の藻屑にされた輝かしい経歴を持つ俺だ。風穴地獄とやらで某ゾンビ退治ゲームみたいに洋館の染みにはされたくはない。

と、しかめっ面で遊戯室に行くと……

「遅い！」

がう！

と犬歯を剥いたアリアは、落ち着かない様子でビリヤードの球に突き棒を添えていた。

思いっきり前屈みになっているその胸元……レースとフリルの奥の肌が……不規則に、チラチラ見えている。

見えそうで見えないのは、むしろ危険だ。どんなに洗濯板でも胸は胸。このアングルは回避するのが安全だろう。

ぷるぷる……かこんっ。

何かから逃避するように、震えるキューでミスショットをしているアリアの後ろに回ると――

（うッ……！）

こっちはこっちで、余計マズかった。

球を突こうとするアリアは思いっきり上体を倒してオシリを突き出すので……背後から見ると、バレエのチュチュみたいな例のスカートが大変なことになっているのだ。まるで羽根を広げたクジャクみたいだな。

仕方なく天窓のステンドグラスに視線を逃がすと――

ピカピカッ――ガガーン！

再度のカミナリで、窓が明滅している。

雷光と雷鳴の間が、少し開いたな。

「ひゃう！」

びょん！

アリアは5段ペチコートのスカートをふあっとさせ、内股になってジャンプした。

さらに――ピカッ！

「き、ききキンジっ！」

だだだっ、はしっ。

目をまんまるに開いて、いきなり――

俺に、飛びついてきた！

「お、おい……!?」

ガガーン！

という雷鳴にアリアは、きゅ～～～～っ！　と身をすくめている。

どうしたんだよ。双剣双銃のアリア様が、これじゃまるで小動物みたいじゃんか。

「くぅ～～～」

そ……そういやコイツ……

カミナリ、苦手だったんだっけ。

ハイジャックの時に雷雲のそばを飛んだ時も、チビリそうなぐらいビビってたもんな。

「う～～～！」

スカートの裾をぎゅうーっと掴んで恐怖に震えるアリアは、それでも貴族として最後の

プライドは捨てていなかった。
『これは別に頼ってるわけじゃない！』って感じに涙目を俺から下向きに逸らし、決して目を合わせないのだ。思いっきり、胸の中に飛び込んできてるくせにな。
――ふわっ……
（う……）
うつむいたアリアのうなじから、あの甘酸っぱい香りが俺の鼻をくすぐってくる。
顔の真下で、メイド用のカチューシャがぷるぷる震えてる。
アリア。
俺の胸の中でぷるぷる震えてる小さい肩。広がって俺の腰にふんわり当たるスカート。
エプロンを留める背中の大きな蝶々結び――
アリア。
ああ。クソッ。
かわいいよ。
犯罪的なまでに。
チビっこい背丈、ツインテール、ちょっとキツめの目つき、4分の1入ってる英国人の血、どれがこの衣装と相性いいのかは知らないが――
洋館の中にいるメイド姿のアリアは、まるで、等身大のお人形さんみたいで。

（……マズイぞ……！）

来ちまった。

この、血の流れ。

じわ……と、集まり始めてる。体の、芯に。

ヒステリアモード性の血流だ。

だが——まだ大丈夫だろう。いま俺が感じているのは「可愛い」という感覚であって、それを「性的興奮」に引き上げるにはそれ相応のイベント、ハプニングが必要だ。

それが起きる前に離れて、心を静めてしまえば——大丈夫。

「ほ、ほら、怖くないって。大丈夫だ。俺が、この部屋にいてやるから」

と言って肩を掴み、引き離すが……

「う～～～～」

と唸るアリアの中で俺はよっぽど頼りにならない存在らしく、赤紫色の瞳はビクビクと怯えきったままだ。

マズい。

またギュッと抱きつかれたりしたら、危険だ。

しかもこのビクビクの瞳も、普段とのギャップがあって異様に可愛いし。

なんとか、リラックスさせてやらねば。

「分かった。分かった。アリア、強力な助っ人を紹介するから。まずは離れろ」
「す、すけっと……？」
「そうだ。いまこの館にいる」
「こ、ここにはあたし達しかいないじゃないっ。先生は地下室に籠もってるし……」
いやいやそうでもないんだな、と俺は首を横に振りながらさりげなく後ずさり……
ビリヤード台を挟んで、反対側に回った。
そして屈んで、台に身を隠す。
さて、ケータイを取り出して……と。
ひょこ！
レオポンのストラップだけを掲げて、ビリヤード台の上に出してやった。
「おっすアリア。おいらレオポンくん」
俺はレオポンくんの前足を、挨拶するように掲げて見せる。
我ながらバカバカしいが……これもヒステリアらないためだ。苦労するぜ。
「地上最強の猛獣だぞ。おぉーアリア、おまえ、何か、怯えた顔してんなぁ」
わざと鼻声で言いつつ、ビリヤード台の角からアリアの様子をのぞき見ると……
アリアはレオポンくんに、こくこく。
ちゃんと、うなずいてた。

「なにが怖えのさ。おいらに相談してみな」
「……か、カミナリ……」
よしよし。
ちゃんとレオポンくんと会話してくれてるぞ。
第一段階、成功だな。
「はっ、心配すんな！　そんなモン、おいらがレオポンスキル『吠え声の術』で追い払ってやるぜ！　うぉー！」
くいっ。
俺はレオポンくんの前足を広げ、大声を出してるような演出をする。
「うぉー！　うぉー！」
「お、追い払ってくれてるの？」
おー、ノってるノってる。
「ああ。おいらの吠え声は、邪悪なカミナリ雲を遠ざけるんだ！　うぉー」
というのもあながちデタラメではなく……
むかし兄さんに習ったが、稲光と雷鳴のタイムラグがだんだん広がっている今のような時は、雷雲が遠ざかっている時のハズなのだ。
で、その見立ては正しかったらしく――

ピカッ、というさっきより弱い稲光からしばらく経って……ごろごろ……
再び聞こえてきた雷鳴は、さっきよりだいぶ遠い。
「……た、確かに遠ざかってるわ！　すごい！」
アリアはレオポンくんの力をすっかり信じたらしく、ビリヤード台を回ってきた。
俺もレオポンくんをとっとっとっ、と走るように動かしてアリアを出迎え――
そのレオポンくんを俺の手からむしり取ったアリアは、ぎゅううう。
「ありがとう！　ありがとうレオポン！」
ツリ気味の目を細めて、思いっきりレオポンくんを両手で抱いて頬ずりした。
ついでに、ぼん。
俺をふんわりスカートのオシリで押し退けて、レオポンくんと2人の世界に没入する。
それにしてもこのアリア……ノリノリだな。
動物とかヌイグルミに弱いタイプだとは分かっていたが、ここまでとは。
まあ、これはアリアなりにレオポンくんを敢えて強く信仰することで雷の恐怖と戦っているんだろうが……なんかムカつくな。レオポンくんをあんなに信頼しきってるのは。
俺が「大丈夫だ」つっても、超不安そうにしてたくせに。
俺はヌイグルミ以下ってことですか。はいはいそうですか。

雷雲は遠ざかり――深夜2時。理子との定期連絡の時が来た。
理子とのやりとりに何を使うかというと、実は、ただの携帯だ。
まあ今回はミッションがドロボーなので通信科のヘルプが得られないし、日本の携帯は実は極めて複雑な信号変換をしているため、原則、盗聴の心配はいらなかったりする。
というわけで俺・アリア・理子は、三者間通話というサービスを利用して……3人で、秘密の通話を開始した。
「――アリア、理子、聞こえてるか」
『聞こえてるわ。理子、あたしの声はどう？』
『うっうー！　ダブルおっけー！　そんじゃアリアから中間報告ヨロ！』
夜中なのにテンションたけえな理子。夜型かよ。
『……理子。あんたの十字架は、やはり地下の金庫にあるみたいよ。一度、小夜鳴先生が金庫に出入りするのを見たけど……青くてピアスみたいに小さい十字架よね？　棚の上にあったわ』
『――そう、それだよアリア！』
「だが、地下にはいつも小夜鳴がいるから侵入しにくいぞ。どうする」
自分のベッドに横になって毛布をかぶった状態で、俺はケータイに小声で囁く。
『だからこその2人チームなんだよ、アリアとキーくんは。超・古典的な方法だけど――

「誘き出し（ルアー・アウト）」を使おう。先生と仲良くなれた方が先生を地下から連れ出して、その隙にもう片方が十字架をゲットするの。具体的なステップは……』

……と。

潜入した俺たちの情報を元に、理子がドロボーの作戦を修正していく。

深夜、女子とケータイで秘密のおしゃべり……か。

その事実だけ見ればまるで普通の高校生みたいだが、話題はテレビや音楽の話じゃなく『大泥棒大作戦』の打ち合わせだ。

――この辺が、トンチキな学校に通う俺の哀れなところだな。

潜入10日目の夜――窓から、雲間に満月が見えている。

10人以上が晩餐会をできそうな広い食堂で、俺とアリアは小夜鳴に夕食を出していた。

こういう普通の仕事を普通にこなし、怪しまれないようにする事が……実は潜入作戦で最も重要なポイントなのである。

「山形牛の炭火串焼き、今日は柚子胡椒添えです」

ぱか、と俺はドームみたいな銀のフタを開けて小夜鳴に見せる。

一応洋館の作法とはいえ、ホントにこれ、おままごとみたいだなぁ。

ちなみに……この夕食はアリアが作ったことになっているが、実際は俺が作っている。

アリアは理子との特訓でオムライスだけはなんとか作れるようになったのだが……それ以外のメニューに挑むたびにキッチンで超常現象を起こすので、仕方なしに、料理も俺が担当しているのだ。

俺も別に料理なんか得意じゃないから不安だったのだが……幸運な事に、小夜鳴は実に簡単な料理しか注文してこない人だった。

――串焼き肉。

毎晩、それでいいらしい。焼き方は表面を軽く炙る程度のレアで、後はアレルギー持ちなのか香辛料にニンニクを使うなという注意があった他には何の注文も無かった。

まあ、狼にやられた腕は快方に向かっているみたいだったが、それがまだ不器用にしか動かせないせいかもな。まだギプスもつけたままだし。

（でも……栄養バランスとかは大丈夫なのか？　この人は……）

俺は串から肉を抜いてあげつつ、そんな事を考える。

まあ、口出しはしませんけどね。あくまで、執事ですから。

それが終われば、俺の仕事はとりあえず食堂の片隅におとなしく突っ立って……指示を待つだけだ。考えてみれば楽なバイトだよな。

小夜鳴が選んできた古い洋モノのレコードが、ノイズ混じりの夜想曲を奏でている。

「Fii Bucuros...」

と、月光に照らし出された庭のバラ垣を見て、気分良さそうに呟いた小夜鳴に――

「Doamne, te-ai vorbi limba română...? "Fii Bucuros"...?」

メイドアリアは赤ワインをグラスに注ぎながら、どこかの外国語で喋った。

「――驚きましたね。語学が得意なんですか？　神崎さんは」

「むかしヨーロッパで武偵やってましたから、必要だったんです。先生こそどうして……ルーマニア語をご存じなんですか？」

「この館の主人が、ルーマニアのご出身なんですよ。私たちは、ルーマニア語でやりとりするんです」

と言った小夜鳴は、初めてアリアに興味を持ったような視線を送った。

「神崎さんは――何カ国語、できるんですか？」

「えっと。17か国語、喋れます」

じゅ、17か国語かよ。

俺なんか、日本語すらあんま喋んねーからネクラとか言われてんのに。

こういうところには……やっぱりアリアはシャーロック・ホームズ卿の曾孫なんだってことを、時々思い知らされるな。

「すばらしい！　驚きですね。そしてピッタリ同じ数です」

「数？」

「ええ、あの庭のバラと」
「……あの……バラ？」
小夜鳴の視線を追って、アリアが窓の外のバラ垣を見る。
そこには大輪の、暗闇でも分かるほど鮮やかな赤バラがいくつも咲いていた。
「あれは私が品種改良した新種のバラで、ちょうど17種類のバラの長所を集めた優良種なんです。まだ名前だけが無かったのですが――『アリア』にしましょう」
深紅のバラにいきなり自分の名前を命名されたアリアは、目を丸くしている。
「すばらしい。アリア。いい名前です。神崎さんのおかげで、しっくり来る名前を付けられた。嬉しいですよ――アリア」
少しワインに酔ったのか1人でテンションを上げている小夜鳴は、ご満悦だ。
別に、アリアを口説いてるって空気じゃあないんだが……アイツはヒステリアモードの俺のように、特に狙ってもいないのに女子に効く言動が自然と出てくる男らしいな。
しかも、美形だし。
アリアはそんな小夜鳴にはその後、特に何も言わず――
メイドらしく、そばにちょこんと立って食事の時間が終わるのを待っていた。
なんか……なんつーか……
イヤな空気だな。あそこ。

別に具体的に何がイヤってわけじゃないんだが。
……そういえば、小夜鳴は武偵高の女子生徒に手を出すとかいうウワサがあったな。
なぜかそんな事を思い出しつつ――
俺は食堂の片隅で、原因不明の居心地の悪さを感じていた。
ウォーン、オオーン……と、また、森から野犬か何かの遠吠えが聞こえていた。

その夜も、俺たちは秘密の電話連絡を行った。
作戦決行は4日後、ここで働く最終日ということになっている。
『理子、キンジ。マズいわ。掃除の時に調べたんだけど……地下金庫のセキュリティが、事前調査の時より強化されてるの。気持ち悪いぐらいに厳重。物理的な鍵に加えて、磁気カードキー、指紋キー、声紋キー、網膜キー。室内も事前調査では赤外線だけってことになってたけど、今は感圧床まであるのよ』
「な……なんだそりゃ……」
アリアの話を聞いて、俺はケータイ片手に眉を寄せる。
米軍の機密書類だって、そんな厳重な隠し方しないぞ。
これじゃあ、まず金庫の扉が開けられそうにもない。
さらに扉を開けても、赤外線の張り巡らされたフロアに入れない。仮に忍術か何かで赤

外線の網をスリ抜けられたとしても――床を踏んだら、その圧力で警報が鳴るのだ。
理子の十字架1つに、なんて警戒っぷりだよ。イ・ウーのナンバー2とやらは。
『よし、そんじゃプランC21で行くかぁ。キーくん、アリア。なんにも心配いらないよ。どんな厳重に隠そうと、理子のものは理子のもの！　絶対お持ち帰り！　はう～！』
またハイテンションだな。夜行性なんだな理子は。
『んで、いま小夜鳴先生とはどっちの方が仲良しになれてるのかな？　かなかな？』
理子に聞かれて俺は、なぜか、本当になぜか……
「アリアじゃねーの。お前、新種のバラにアリアとか命名されて喜んでたもんな」
と、妙に意地の悪いカンジで言ってしまっていた。
『よ、喜んでなんかないわよっ。何言ってんの？　バカなの？』
「おいアリア、気をつけろよ？　小夜鳴には、女関係で悪いウワサがある」
『別に……悪い人には見えないけど？』
俺に意地を張ってるのか、アリアは小夜鳴の肩を持つようなことを言う。
それがまた、なぜか異常にイラッとくる。
「いや。俺には少し怪しく見えるぞ。少なくとも、あまり好きじゃない」
『おお？　おおおー？　痴話ゲンカってやつですか？』
嬉しそうに割り込んできた理子に、『「違う」わよ！』と俺・アリアがハモる。

『じゃあ、とりあえず先生を地下金庫から遠ざける役目はアリアで決まりね！　どう？できそう？』

『……彼は研究熱心だわ。おびき出しても、すぐ研究室のある地下に戻りたがると思う』

「夜もいつも起きてるし……いつ寝てるのか全くわからん。何の研究してるんだろうな」

『こないだちょっとお喋りしたとき聞いたけど……なんか、品種改良とか遺伝子工学とかって言ってたわ』

ふーん。

お喋りしてるのか。俺の知らないところで。

まあ、作戦上必要なことだから別にいいんだけどな。

『キーくん、アリア。じゃあ時間でいえば、何分ぐらい先生を地下から遠ざけられそう？』

「アイツの普段の休憩時間の間隔から見て、まあ、10分ってとこだろうな」

『10分かぁー』

と言う理子の声は……少し、考え込んでいるようだった。

歴史的な大泥棒・リュパンの子孫にも、これは難題らしい。

それはそうだろう。

このミッションではたった10分の間に無数の鍵・アラームの仕掛けられた金庫を破り、お宝を奪い、痕跡を残さず去らねばならないのだ。

しかも使える駒は、俺。
自慢じゃないが凡人と大差ない、Eランク武偵ときている。
『なんとか、15分がんばれないかなぁ。たとえばアリアがー』
『たとえばあたしが？』
『ムネ……は無いから、オシリ触らせたりして。くふっ』
『バ、バカ！　風穴！　あんたじゃないんだから！』
誰がコントやれっつったよ。
『おおこわいこわい。まぁその辺は理子が方法考えとくよ！　じゃ、また明日の夜中2時にね！　りこりん、おちまーす！』
ぶつっ。
電話でも逃げ足の速い理子は、聞きたいことを聞き決めたいことを決めてしまうと――さっさと三者間通話から出ていってしまった。
これにて……電話会議は一件落着だな。まあ大した事は決まってないけどな。
じゃあ、俺も切るか。
と、思った時――
『キンジ』
まだ電話がつながっていたアリアが、呼んできた。

「……ん？」
『ちょっと聞きたいんだけど』
「なんだよ」
『……仮に、あくまで仮によ？　あたしがあのバラのこと、喜んでたように見えてたとしたら、ね？　どうして、それであんたが不機嫌になるのよ』
「……別に不機嫌になんか」
『なってるじゃない』
言われて、俺はガリガリと後ろ頭を掻く。
なんだよ。
からみやがって。
「そんなこと、お前に関係ない」
『……』
「切るぞ」
『ちょっと待ちなさいよ。この流れでついでに聞いとく』
何の流れだよ。
『――カナって誰』
言われて――俺は金縛りにあったように口をつぐんでしまう。

その沈黙をアリアはどう解釈したのか知らないが、
『……あんたの……その、昔の……いわゆる、えっと……』
――噛み噛みで、
『も、元カノ、とかだったり……するの？』
と、聞いてきた。
それにも俺が沈黙を通していると、アリアも、答えを聞くまで黙るつもりらしかった。
……仕方ないな。
「それこそ――そんな事、お前に関係ないだろ」
少しキツめの口調で、返す。
こうとしか返しようがなかった。
アリアはしばらく黙ってから……
『――そうね。関係ないわね』
らしくない素直さで、それ以上は追及してこないような返事をした。
『誰にだって……触れられたくない過去はあるもの。自分でもなんでか分かんないけど、今のは……ちょっと踏み込みすぎたわ。あたし、理子がカナって子に変装した時のあんたの態度、ヘンに……気になってたの。でも、もう聞かないよ。ごめん。謝る』
謝罪するアリアの声には、なんだか逆に、とても誠実で誇り高い印象があった。

アリアは普段は凶暴娘なんだが、本当に心から悪いと思った時は……ちゃんと、ごめんなさいができる子なんだよな。

先月、俺にカゼをひかせた後も特濃葛根湯を買ってきてくれたわけだし。

そして……

アリア。お前はさすが、シャーロック・ホームズ卿の曾孫だよ。

推理力が遺伝していないのが玉に瑕だが、お前の直感はやっぱり天性モノだな。

そう――お前が感じたその違和感は、正しい。

俺がカナに対して抱いている感情は、普通のものじゃないんだ。

今だって、その名前を聞いただけで落ち着きを無くしそうで……怖い。

俺はそんな心の内側を隠すように、努めて平静を装って答えた。

「別に謝らなくていい。俺も……ちょっと言い方がキツかったかもしれん。ごめんな」

『い、いいわよ。あんたこそ謝らなくて』

「じゃあ俺は寝るぞ」

『うん……おやすみ』

「おやすみ」

『……おやすみ』

アリアの声は――やっぱりそれでも、カナのことが気になっているようだった。

……ごめんなアリア。
話せないんだ。
今は、まだ。

5弾　高度296メートルのビリヤード

俺とアリアが紅鳴館で働く、最終日が来た。
作戦決行は、俺たちが館を去る1時間前――午後、5時。
打ち合わせ通り、まずはアリアが「今日は最終日だから、庭で改良種のバラ『アリア』の話を聞きたい」と小夜鳴をおびき出す。
そしてアリアが小夜鳴とウソのデートをしている隙に――
帰りの荷物を整理するフリをしていた俺が、動く。
スタート地点はここ、遊戯室のビリヤード台だ。
「聞こえるか理子。これからモグラが畑に入る」
オープンフィンガーグローブ、赤外線ゴーグル、ケブラー繊維のポーチ付きベスト――強襲科時代によく着た特殊部隊みたいな装備だ――に着替え、俺はまずビリヤード台の裏に貼り付けた携帯を中継機にしたインカムをテストする。
『よく聞こえてますよー？　キーくんの声って電話で聞くととってもセクシーぃ』
という理子を無視して、俺はビリヤード台の下の床板を音もなく開けた。
小夜鳴は今ごろ、メイド姿のアリアとバラ園で優雅におしゃべりか。

一方そのころ俺は、人間モグラになって1発勝負の大ドロボー。その実行犯だよ。兄さんの情報を得るためとはいえ、なんか人として大事なものをいろいろ失う気がするな。この仕事。

と、ふてくされながら俺は――

すでに今までの潜入期間でコツコツ掘っておいたトンネルに、滑り込むのであった。

「こちらキンジ。モグラはコウモリになった」

小声で、インカムを通じて理子に連絡する。

とにかく短時間で目的のモノを入手しないといけないので、理子は地下金庫の扉を開ける事を回避し、もっと短時間でお宝を盗み出せる大胆な方法を命令してきていた。

それがこの、『モグラ・コウモリ（モール・バット）』。

つまり、まずは地上階から金庫の天井までモグラのように穴を伝って到達し……そしてその天井から、コウモリのように逆さ吊り（さかづり）になった俺がお宝を頂戴（ちょうだい）するのだ。

で、この逆さ吊り、頭に血が上るのはともかく……実は一石二鳥の作戦とも言える。

この部屋に新たに仕掛けられた感圧床を踏んだら、アラームが鳴るわけだしな。

この辺を考慮に入れた作戦を立てられるのは、さすがリュパンの子孫といったところだ。

『あと7分だよ、キーくん』

薄暗い金庫の中で、目標の十字架は陳列棚の上に無防備に置かれているように見える。
だが赤外線ゴーグルを使って見れば、十字架の周囲にはタテ・ヨコ・ナナメに複雑に入り組んだ赤外線の警戒網が張られている。
あの光の網が一瞬でも途切れれば、アラームが鳴り響いて一巻の終わりだ。
つまり、ここから釣り糸を引っかけて引っぱり上げようとしても、あのジャングルジムのように組まれた赤外線の網に触れてしまう。
直線的に釣り上げることは、できない。
そこでどうするか。
理子が考えた方法は――
『よしキーくん。「レール作戦」始めるよ。まずは……Z1。それにA10を繋げて』
俺のインカムに付けられた小型のデジタルビデオカメラは、遊戯室のケータイを通じて理子にパケット通信でこの赤外線の網の形状を視覚的に伝えている。
それを見た理子の指示に応じて……
俺が、ベストのポーチから取り出した針金を繋げていくのだ。
『B11、F23、A7、B15を2つ連続、C19、C5、A13――』
俺は理子が指示する通りのパーツを繋げて、レールを作っていく。
あの無数の赤外線を避けて曲線的に十字架に迫る、針金のレールを、な。

それにしても――泥棒とはいえ、本当に有能なヤツだよ、理子は。
紅鳴館は高速度パケット送信エリア外。データの送信には、普通のケータイ通信網しか使えない。その速度で送られるとても鮮明とは言えない映像を元に、あの複雑な三次元の赤外線網をどうすり抜けるか立体的に把握・判断できるなんてな。
『E12、C7、A16、A13、D6――』
インカムのヘッドフォンから聞こえる、いつになく真剣な理子の声。
残り時間は5分。
針金は数センチずつ、苛立たしいほど少しずつ――近づいていく。目標に。
落ち着け。クシャミしたりするなよ、キンジ。手元が大きく震えたら、針金が赤外線に触れてアウトだからな。慎重に、慎重に、レールを延ばせ。
閉め切った蒸し暑い部屋の中で――
俺は作業する手を片方だけ離し、逆さ吊りの額に滲んだ汗を指で拭う。
汗すら、この部屋では危険なのだ。
1滴、1gの汗が落ちただけで、感圧床はアラームを鳴らすんだからな。
『C7、A16、A13、D5――これでいけるハズだよ、キーくん』
理子の言葉に続いて、複雑に曲がりくねりながら伸びた針金の先端が――ちゃり。
とうとう、青い十字架に届いた。

「よし、鈎を下ろす」
俺はカーテンレールに使うようなS字鈎を取り出し、レールに掛けた。
つー……っと、鈎は仕込まれたナイロン製の極細ワイヤーを針金の周囲に螺旋状に巻き付けながら、ミニチュアのジェットコースターみたいにレールを滑り降りていき……
ちゃき。
レールの先端で、元々ペンダントトップだった十字架を吊すような形に引っかかった。
「よし。引くぞ」
『キーくん急ごう。予定よりちょっと遅れてる。残り3分ないよ』
理子に言われて、俺は手元のリールを、ちきちき、ちきちきちき……と、急いで回す。
十字架を引っかけた鈎がワイヤーに引っぱられ——手元に戻ってこようとする。
これが……難しい。
「クソっ——」
俺は鈎がレールの10分の1も戻っていないうちに手を止めた。止めざるを得なかった。
少し急いで動かすと、十字架が揺れて赤外線に触れそうになるのだ。
『キーくん、マズいよ』
「どうした」
『アリアから暗号がきた。小夜鳴がバラ園から館に戻ってる』

「何だって……？　もう少しもたせる予定だったろ」
『雨が降ってきたんだよ』
……チクショウ。ツイてねえな。
まだ手順は幾つも残っている。
小夜鳴が戻ってきて見つかったら、こちとら言い訳無用のコウモリ男状態なんだぞ。
『アリア。まだキーくんは時間かかる。なんとか会話、引っぱって。もたせて』
理子がアリアに指示をしている。
アリアは――小型マイクをメイド服に仕込み、理子からの指示を受ける無線イヤホンを耳に隠しているのだ。
俺は作業に集中するため、アリアとの回線を閉じることになっていたが……
「理子。アリアとの回線を開いてくれ。状況を把握しながら作業したい」
『わかったよ』
理子が答えると――
インカムからアリアと、少し遠い小夜鳴の声が聞こえてくる。
『さ、小夜鳴先生』
『なんです？』
『あ、いえ、なんでもないんですけど。えっと』

『……はい？』
『いい天気ですねー』
『えっ……？　雨、降ってきてますけど……』
『え？　あっ。えーっと、あ、雨好きなんですあたし！　あはは』
あ、アリア……
もうちょっとマシな引っ張り方しろよ。
慌てるとボロが出るタイプだな。探偵科には向いてねえ。
「ち、チクショウ……」
と、俺が呻いた時。
ぷつっ。
理子かアリアか、どちらかのケータイ回線が断線するような音がした。
クソッ。これが民間の電話回線の欠点なんだ。たまに、切れやがる。
しかし――ツイてない。このタイミングで断線とはな。どっちの回線が切れたんだ。
『アリア。こうなったら冗談抜きで色仕掛けをやろう。前キーくんも言ってたけど、小夜鳴は女好きってウワサがあるの。これは最後の手段だけど、きっと効くハズだよ』
少し焦り気味の、理子の声がする。
断線したのはアリアとの回線らしい。

『わ、分かったわ』
あれ？
アリアが応えるヒソヒソ声もする。
どっちの回線も切れてなかったのか。
さっきの異音は――ただの雑音だったらしい。
『相手は男だよ。ウソの告白をして抱きついて。これはイキナリでも大丈夫。まずは10回でも20回でも好きって言って、相手の思考力をマヒさせるんだよ。そして、ソファにでも連れ込むの』
『し、仕方ないわね……』
す、すごい会話を始めたな。女同士で。
『たいていのオトコには、女の身体に、特別好きな場所がある。胸とか、ふとももとか。キスするのが好きな男もいる。はじめは好きなようにさせて、好みを探って』
『そ……それで、どうするの』
お、おいおい。
やる気かよアリア。
『それが判明したら――自分もそれ、されるのが好きなフリするの。そうすれば、5分は持つよ。うまくすれば男は、10分でも20分でもそれをしてる』

『――分かったわ。なんとか、それで持たせてみる』

しょ、しょうもねえ作戦だな。

だがそれで時間が稼げるって話に妙な説得力を感じちまうのは……俺が、理子にそれをやられた事があるからなのか？

『……でもね、その前に――聞いて、キンジ』

「何だ」

『あ、アイツに、ウソでも……そういう事、させる前に……あんたに言っておきたいことがあるの』

「だから何だ。こっちはムダ話してる場合じゃない」

『好きよ』

……は？

『あたし、あんたのこと……ハイジャックの頃から……ずっと、す、好き……だったの』

「……まッ、待てっ」

い、いま言うことじゃないだろ。そういう事は。

『だから、アイツにさせることは後で絶対あんたにもさせてあげるから……妬いちゃダメなんだからね？　あんたには、2倍してあげる。ううん、あんたがいいっていうまで……ずっとさせてあげるから……』

「ま、待て――」
こ……こんな状況で……！
何言ってやがるんだ！
あのアホは！
『一晩中でもいいよ。学校休んでもいい。ずっと、したいこと、させてあげるから……』
クソッ……アリアお前。その切なげなアニメ声。反則だろ。
いくらなんでも可愛すぎる。頭の中がマヒしたみたいになって、お前でいっぱいになる。
武偵やめて、声優にでもなりやがれ。
今ので……
なっちまったじゃねえか！
不覚にも。
アリアの、溜息みたいな『させてあげるから』で――
ヒステリアモードに！　こんな体勢で！
「……ちッ……」
ヒステリアモードに切り替わったその瞬間、俺は気づいて舌打ちした。
やられた、と。
「やってくれたな……？　理子」

『バカキンジ。分かったってことは、なれたのね？　――くふふっ』
と、理子が、最後の笑い声だけを自分の声に戻す。
さっきの『ブツッ』という異音は、理子がアリアとの回線を切った音で……
今の理子とアリアの会話は全部、理子が変声術でアリアを装った1人芝居だったのだ！
『キーくんってばホントにアリアですぐヒスるぅ。理子ちょっと不満ー』
「悪い子だ……理子は。後で、お尻をペンペンだな」
『あぅ、理子的にはそれご褒美ですよぉー！』
ムダ口を叩きながら――
それでも俺の手はもう、一流マジシャン顔負けの器用さで動いていた。
早送り動画のように手元に戻ってきた鈎と――理子の十字架を、キャッチする。
そして入れ違いに、うり二つなダミーの十字架をレールに放つ。
しゅるる……と、偽物はレールのコースを滑り降りていき……チャッ。
陳列棚の上、理子の十字架があったのと寸分違わぬ位置に置かれた。
俺はコンマ1秒の間も置かず、針金レールの回収にかかる。
赤外線の網になんか、もう触れるわけがない。
今の俺にとっちゃ、そんなもの、駅で人にぶつからないように歩くより簡単なことだよ。
最後に自分自身を腹筋で天井の穴に戻し――

パタン。
天井のパネルを閉じれば、ミッション・コンプリートだ。
俺は結局またヒステリアモードに助けられたわけだが、今回のヒステリアモードは掛かりが甘く、すぐに解けてしまった。
ふぅ……
ヒステリアモード後特有の虚脱感と、また妙なことを口走ってしまった後悔の念に嘖まれるが……相手はヒステリアモードの詳細を知っている理子だ。まあ、いいといえばいい。
あのあと小夜鳴が地下室に戻ったのは、俺が金庫から出たほとんど直後だったそうだ。
結局、アリアは天気の話などで小夜鳴を引っぱろうとしたのだが……ムダな努力だったらしい。まあ、あの調子じゃムリだったろう。
そんなことを考えながらの俺とアリアは、私服……というか武偵高の制服に着替えて、紅鳴館を後にする。
小夜鳴は特に雑談もせず、テキパキと挨拶だけ済ませてまた地下室に戻ってしまった。
品種改良だか遺伝子工学だかの研究だっけ？　ご熱心なことだよ。
で……
俺とアリアがタクシーで着いたのは、横浜駅に程近い横浜ランドマークタワー。

みなとみらい21の中核を成すこのオフィスビルに、理子はアジトを置いている。
台場でバスジャックをやった時もそうだったが、理子は近代的なホテルやビルの一角に陣取りたがるクセがあるな。
十字架の受け渡しをするために詳しい居場所を聞くと——いま、屋上にいるという。
まあ、盗品の受け渡しだ。人目に付かない所がいいってことなんだろうな。

ランドマークタワーの屋上には、湿った海風が強く吹いていた。
1階のエレベーターホールにあったガイドによれば、高度は296メートル。日本一高い超高層ビルなんだそうだ。
心なしか、空を流れる黒雲も近く見えるな。
そもそも無用の者・立入禁止とされている屋上だ。当然、人の姿は見当たらず——ヘリポートに上がると、周囲には少し段差のついた四つ角が見えた。フェンスは無い。
「キーくぅーん！」
とててててっ！
蜂蜜色の髪を風になびかせながら、例の改造制服を着た理子が駆け寄ってくる。
そして、ぽふっ！　抱きついてきた。
「やっぱりキーくんとアリアは名コンビだよ！　理子にできないことを平然とやってのけ

る！　そこにシビれるあこがれるゥ！」

理子は大きなふたえの目をキラキラさせて、胸元からこっちを見上げてくる。

今日はいつものツーサイドアップに加えて、頭のてっぺんにアホほどでかい赤リボンを増設してるな。まるで童話に出てくる、絵本の中の少女みたいな髪型だ。

アリアも童顔だが——理子は、それに加えてアクセサリのセレクトまでガキっぽいよ。

「キンジ。さっさと十字架をあげちゃって。なんかソイツが上機嫌だとムカつくわ」

「おーおーアリアんや。キーくんを取られてジェラシーですね？　分かります」

誰だよアリアんって。

と心でツッコむ俺の胸に、理子はアリアを横目で見ながら頬ずりなんかしている。

ちがうわよぎぃー！　とアリアが何か壊れたバイオリンみたいな声を上げるのを背に、俺は胸ポケットから——青い十字架を出してやった。

「これだろお望みの物は。やるから離れろ」

十字架を見た理子は、声にならない喜びの声を上げたかと思うと——

首につけていた細いチェーンに、手品のような素早さで繋いでしまった。

「乙！　乙！　らん・らん・る——！」

理子は喜びのあまり両手で敬礼（？）ポーズをするわ、両手をシャカシャカ振り回すわ、最高にハイってヤツだ。

ていうか嬉しいのは分かったから、目の前でそんなにジャンプするな。
お前、スカートだろ。しかも例のフリフリのフリルつきの。
それがヒラヒラぽんぽん跳ねるのは、目のやり場に困るんだよ。
「理子。喜ぶのはそのくらいにして、約束は――ちゃんと守るのよ？」
腕組みしたアリアが、こめかみをピクピクさせながら釘を刺す。
あ、相当イライラ来てるなこれは。
理子は、
「アリアはほんっと、理子のこと分かってなぁーい。ねぇ、キーくぅーん」
何やら怪しげに笑って、俺に手招きした。
なんだよ。
俺が近づくと――理子は蜂蜜色の髪をカチューシャのように留める、大きな赤リボンを向けてきた。
「お礼はちゃんとあげちゃう。はい、プレゼントのリボンを解いてください」
何だ……？　これを解いたら、契約満了……って意味か？
理子の意味不明な動きにウンザリ来ていた俺が、しゅる。
理子のリボンを――テキトーに解くと。
「くふっ！」

――ちゅ！

何が起きたか、分からなかった。
完全に、不意打ちってヤツだった。
いきなり理子が顔をナナメに傾けたかと思うと、俺に――
――キス。
してきたのだ。
鼻の奥まで忍び込んできた、バニラみたいな息の香り。
シュガーミルクみたいな、キャンディーみたいな、蜜（みつ）のような――
しかしその幼さとは不釣り合いに、肉感的な女っぽさを兼（か）ね備（そな）えた、理子の唇。
そのギャップに、俺は――
「……！」
一瞬で、なっちまった。
ヒステリアモードに。
また、だよ。
「ぷはぁ」

唇を離した理子が、俺の目の前、1センチの所で笑う。まだ、鼻と鼻が触れている。
ぺろっ。とオマケに俺の鼻をひとなめした理子に――
「り……りりりり理子おッ!?」
横から、アリアが非常ベルのように叫んだ。
「な、なな、ななな何やってんのよいきなり！」
――と怒鳴るアリアに、理子はさっきまでのオフザケを何一つ返さず――
たたん、たたっ。
屋上のほとんど縁とも言える場所を回り込むように、華麗な側転を切った。
とんっ。
そして俺たちの退路を塞ぐように、階下へ続く扉を背に立つ。
湿った海風に、その蜂蜜色の髪をざわつかせる理子は――
「ごめんねぇーキーくぅーん。キーくんがさっき言った通り、理子、悪い子なのぉ――。
この十字架さえ戻ってくれれば、理子的には、もう欲しいカードは揃っちゃったんだぁ」
にい、と……あのハイジャックの時と同じ目で、嗤った。
――そういえば、言ったな。俺は。
さっき、地下金庫からの通信で。
「もう一度言おう――『悪い子だ、理子』。約束は全部ウソだった、って事だね。だけど

……俺は理子を許すよ。女性のウソは、罪にならないものだからね」

早速、キモい事を言い出したな。ヒステリアモードの俺よ。

「とはいえ――俺のご主人様は、理子を許してくれないんじゃないかな？」

横目にアリアを見れば、言うまでもない。怒り心頭といった表情だが――

同時に、何かショックを受けたような顔で石化してるな。

……ああ。そうか。

初めて生で他人の――俺と理子のキスを見たから、いっぱいいっぱいになってしまっているんだな。

「アリア」

パチンっ。

呼んで、指を1つ鳴らしてやると――

はっ。

とアリアは石化モードから元に戻り、真っ赤なままで犬歯をむいた。

「ま、まあ……こうなるかもって、ちょっとそんなカンはしてたけどね！　念のため防弾制服を着ておいて正解だったわ。キンジ、闘るわよ。合わせなさい」

――仰せのままに。

「くふふっ。そう。それでいいんだよアリア。理子のシナリオにムダはないの。アリアと

キーくんを使って十字架を取り戻して、そのまま2人を斃す。キーくんも頑張ってね？
せっかく理子が、初めてのキスを使ってまでお膳立てしてあげたんだから」
そいつは光栄だな。
「先に抜いてあげる、オルメス――ここは武偵高の外、その方がやりやすいでしょ？」
理子は右、左。
スカートの中から、名銃・ワルサーP99を2丁取り出した。
「へえ、気が利くじゃない。これで正当防衛になるわ」
鏡像のように、アリアも、右、左。
その小さな手に不似合いな、漆黒と白銀のガバメントを抜く。
「風穴あける前に――1個だけ教えなさいよ、理子。なんでそんなモノが欲しかったの。
何となく分かるけど……ママの形見、ってだけの理由じゃあないわよね？」
アリアは理子が胸にさげた十字架を拳銃で指す。
理子は……ワルサーを口元に寄せて、笑った。
「――アリア。『繁殖用牝犬』って呼ばれたこと、ある？」
「繁殖用牝犬……？」
「腐った肉と泥水しか与えられないで、狭い檻で暮らしたことある？　ほらぁ。よく犬の
悪質ブリーダーが、人気の犬種を殖やしたいからって――檻に押し込めて虐待してるって

ニュースがあるじゃん。あれだよ、あれ。あれの人間版。想像してみなよ」

大仰な身振り手振りを交えて、理子は笑いながら語る。

早送りのように流れる雲の下、ランドマークタワーの屋上に何か異様なムードが漂う。

「何よ、何の話……？」

理子を制するように、アリアが両手を前に出す。

――それを、合図にしたかのように。

理子は突如、悪魔のような表情になった。

俺は背筋に寒いモノを感じて、息を呑む。

――同じだ。あの、ハイジャックの時と――！

「ふざけんなっ！　あたしはただの遺伝子かよ！　あたしは数字の『4』かよ！　違う！　ちがうちがうちがう！　あたしは理子だ！　峰・理子・リュパン4世だっ！　『5世』を産むための機械なんかじゃない！」

理子は途中から……虚空に向かって、アリアではない誰かに叫んでいた。

その言葉は、アリアの言葉と会話を成立させていない。

断片的で、意味がつながっていない。

ただ、理子の感情のままに放たれている感じだ。

ピカッ！　ゴロゴロ……

海の方から微かな遠雷が響いて、アリアがビクンと竦んだ。
海風に、ほんの一瞬、理子のバニラのような妖しい香りが混ざって俺たちに届く。
「……『なんでそんなモノが』って訊いたよね、アリア」
にい、と理子がアリアを睨んで笑う。
「この十字架はただの十字架じゃないんだよ。これはお母さまが、理子が大好きだったお母さまが、『これは、リュパン家の全財産を引き替えにしても釣り合う宝物なのよ』って、ご生前に下さった――一族の秘宝なんだよ。だから理子は檻に閉じこめられてた頃も、これだけは絶対に取られないように……ずっと口の中に隠し続けてきた。そして――」
そこまで言った理子は、ツーサイドアップの髪のテールを――
わささっ、と、ヘビのように動かし始めた。
神話に出てくる魔物・メデューサのようなその光景に……俺は一歩退く。
「ある夜、理子は気づいた。この十字架……いや、この金属は、理子にこの力をくれる。それで檻から逃げ出せたんだよ。この力で……！」
理子の左右のテールが、じゃき、じゃき、と背の襟の下に隠していた大振りのナイフを抜く。
双剣双銃。
アリアと同じ――しかし異なる意味を持つ2つ名の通り、理子は4つの武器を構えた。

「さあ……決着つけよう、オルメス。お前を斃して、理子は今日、曾お爺さまを超える。それを証明して、自由になるんだ……！」

左の拳銃でアリアを、右の拳銃で俺を狙った理子が、

「オルメス、遠山キンジ――お前たちは、あたしの踏み台になれ！」

と、叫んだ時。

バチッッッッッッ――!!

小さな雷鳴のような音が上がった。

その愛らしい顔をいきなり強張らせた理子は、半分だけ……ゆっくり、振り返った。

そして、

「……なん……で、お前が……」

と呟き――がくん。

その場に膝をついた。

理子の小さな身体が、前のめりに倒れて……

背後に立っていた男が、見えてくる。

「小夜鳴先生――!?」

その名をアリアに呼ばれると、小夜鳴は、がちゃん。
手にしていた大型スタンガン——おそらく猛獣用の——を、足元に捨てた。
そして一瞬のためらいもなく胸元から拳銃を出し、倒れた理子の後頭部を狙う。
その腕には、ギプスも包帯も無い。
治った……というよりは、そもそもケガなんかしてなかったというカンジだな。
「遠山くん、神崎さん。ちょっとの間、動かないでくださいね？」
と言う小夜鳴の握る、シャチみたいなカラーリングの拳銃に、俺は眉を寄せた。
あれは確か……強襲科の授業で見せられた銃の写真の中に……あったぞ。
クジール・モデル74。
社会主義時代のルーマニアで生産されていた、オートマチック拳銃だ。
武偵でもないくせに、なぜ、そんな珍しい銃を持っているんだ——
小夜鳴。
ただの管理人じゃないな、お前。
と、俺が目つきを鋭くしたとき……彼の背後、階段から……
ぐるるるる……るるるる……
武偵高の保健室を襲ったのと同じ種類の銀狼が、ノドを鳴らしながら現れた。
それも、2頭。

「前には出ない方がいいですよ。お二人が今より少しでも私に近づくと、襲うように仕込んでありますんで」

と言う小夜鳴の言葉を聞いて、試しに少し爪先を――動かそうとした時点で、両方の銀狼が同時に俺を睨んだ。

ジャンヌによれば『ブラドの下僕』のハズの狼たちが……

小夜鳴に付き従っているな。今は。

「よく飼い慣らしてるな。腕のケガも、オオカミと打った芝居だった――ってワケかよ」

探るように言うと、

「紅鳴館でのお二人の学芸会よりは、マシな演技だったと思いますけどね？」

と笑う小夜鳴の足元で、片方の銀狼が――まるで芸でもするかのように、理子の拳銃やナイフをテキパキとビルの縁まで運んでは眼下へ捨ててしまった。

「2人ともそのまま動かないで下さいね。この銃は30年前に造られた粗悪品でして、引き金が甘いんです。つい、リュパン4世を射殺してしまったら――勿体ないですからねえ」

――リュパン4世。

理子の本名を、小夜鳴が出した。

理子が自分の素性をどこまで厳密に隠しているのかは知らないが、俺が知る限りでは、武偵高では俺とアリア以外は誰も知らないことだ。

小夜鳴は、たぶんブラドから教わったんだろう。
となると、理子が紅鳴館の十字架を狙っている事も警告されていたと考えるのが自然だ。
地下金庫の防御も、事前調査時より強化されてたしな。
俺たちが十字架を失敬してからのコイツの対応が早かったのも――まあ……俺とアリアが潜入班だってことが、バレてたからだろうな。最初っから。
「どういうこと……？　なんであんたが、リュパンの名前を知ってるのよ！　まさか……まさか、あんたがブラドだったの!?」
俺の横では、アリアが『小夜鳴とブラドは同一人物では？』という新説をブチ上げる。
が……
「彼は間もなく、ここに来ます。狼たちもそれを感じて、昂ぶっていますよ」
すぐさま小夜鳴に否定されて、かあ、と少し赤くなった。
「そ、そう。それにしても、そのブラドから理子のことも聞いて、銃も狼も借りて、そのくせ『会ったことがない』だなんて……半月前は、よくも騙してくれたわね」
「騙したワケではないんです。私とブラドは、会えない運命にあるんですよ」
「……あの時あんた、ブラドは『とても遠くにいる』なんて言ってたけど……あのあと、コッソリ呼んでたってわけね。あたしたちの学芸会に気づいてながら泳がしてたのは……1人じゃ勝てないから、ブラドの帰還を待ってたんでしょ」

小夜鳴の発言の真偽はさておき、アリアはニガテな推理を頑張っている。
一方、俺は――その横で、敵味方の戦力を分析していた。
小夜鳴自身の戦闘力は、素人じみた銃の握り方から見て大したことはなさそうだった。
しかし問題は、理子を人質に取られたことだ。
女を人質にされた以上、ヒステリアモードの俺は動けない。
そして、アリアも動けないのだろう。理子は、母親の冤罪を晴らす証人だからな。万に一つでも――殺されては困る。
さらに向こうにはあの銀狼が2頭。
その上、間もなくここに来るというブラドは、ジャンヌや理子より強いという。
……不利だぞ、極めて。
「遠山くん。ここで君に一つ、補講をしましょう」
唐突に呼ばれて、俺は小夜鳴に視線を戻す。
「……補講？」
「君がこのリュパン4世と不純な遊びに耽っていて追試になったテストの、補講ですよ」
小夜鳴のセリフに、こんな時にもかかわらずアリアがギロッ！　とこっちを睨んだが……それはともかく、あのＤＶＤのテストの話をなぜここで持ち出す？
と眉を寄せた俺に、小夜鳴は一方的に話し始めた。

「遺伝子とは――気まぐれなものです。父と母、それぞれの長所が遺伝すれば有能な子、それぞれの短所が遺伝すれば無能な子になります。そして……このリュパン4世は、その遺伝の失敗ケースのサンプルと言えます」

そこまで言うと、小夜鳴は斃れたままの理子の頭を蹴った。

まるで、ゴミ袋でも蹴るかのような無慈悲さで。

「10年前、私はブラドに依頼されて……このリュパン4世のDNAを調べた事があります」

「お、おまえだったのか……ブラドに、下らないことを……ふ、吹き込んだのは……！」

足元で、理子が男喋りでうめく。

スタンガンにやられた痺れに抗い――

苦痛に歯を食いしばりながら、顔を上げようと藻掻いている。

「リュパン家の血を引きながら、この子には――」

「い……言、う、な……！　オ、オルメスたちには……関係……な、い……！」

「――優秀な能力が、全く遺伝していなかったのです。遺伝学的に、この子は『無能』な存在だったんですよ。極めて希なことですが、そういうケースもあり得るのが遺伝です」

言われた理子は――俺たちから顔を背けるように、地面に額を押しつけた。

――本当に、本当に心の底から聞きたくない言葉を、言われた――

――それを、絶対に聞かれたくなかったライバルに、聞かれた――

そういう、表情、だった。

ッズズ……ン……という、遠雷の音。

「自分の無能さは自分が一番よく知っているでしょう、4世さん？　私はそれを科学的に証明したに過ぎません。あなたは初代リュパンのように1人で何かを盗むことができない。先代のように精鋭を率いたつもりでも……ほら、この通りです。無能とは悲しいですね。ねえ4世さん」

無能、4世、という言葉を繰り返す小夜鳴の足元で――

理子は地面に額を擦りつけるようにしながら、きつく閉じた目から涙をこぼしていた。

ノドの奥から、絞り出すような嗚咽が漏れ聞こえてきている。

小夜鳴は、手元から――ちゃり。

俺が紅鳴館ですり替えた、ニセモノの十字架を出した。

「教育してあげましょう、4世さん。人間は、遺伝子で決まる。優秀な遺伝子を持たない人間は、いくら努力を積んでも――すぐ限界を迎えるのです。今のあなたのようにね」

小夜鳴はその場に屈み、まだ身動きの取れない理子の胸元から――ぷちっ。

青い十字架を奪い取った。

そして俺が代わりに置いてきたニセモノの十字架を、ぐいっ、と、痺れのせいで何の抵抗もできずにいる理子の口に押し込む。

「あなたにはそのガラクタがお似合いでしょう。あなた自身がガラクタなんですからね。ほら。しっかり口に含んでおきなさい。昔、そうしていたんでしょう？」

背を伸ばした小夜鳴が、がすッ、と理子の頭を踏みつける。

その足の下から、う、う、という、哀れな嗚咽だけが、途切れ途切れに聞こえてくる。

……理子……！

（なぜだ……？）

なぜ小夜鳴は、そこまで理子を嘲り罵る？

ブラドが来るまでの時間稼ぎのつもりか。

いや、それにしても偏執的すぎる。

「い、いいかげんにしなさいよッ！　理子をイジメて何の意味があるの！」

甲高いアニメ声で叫んだのは——アリアだった。

いくら敵の理子とはいえ、あそこまでいたぶられている姿を見るのは耐えきれない。

アリアの声は、そんな怒りに震えていた。

「——絶望が必要なんです。彼を呼ぶにはね。彼は、絶望の詩を聴いてやってくる。この十字架も、わざわざ本物を一度盗ませたのは……こうやってこの小娘を一度喜ばせてから、より深い絶望にたたき落とすためでしてね。おかげで……いいカンジになりましたよ」

倒れた理子に銃口を向け直した小夜鳴が、メガネの向こうの目を細めた。

「……遠山くん。よく見ておいて下さいよ？　私は人に見られている方が、掛かりがいいものでしてね」

見る……？

と眉を寄せた俺は。

小夜鳴が切り替わっていくことに――

（――!!）

気づいて、しまった。

あれは――！

あの独特の、スイッチが切り替わるような気配は……！

「ウソ……だろ……？」

分かる。

自分のそれは見たことがない。

でも、遠山家の人間には分かるんだ。

（ヒステリア、モード……!?）

言葉が……出ない。

ただ、だた、絶句するしかない。

あまりのことに呆然とする俺に、小夜鳴は笑いかけた。

「そうです、遠山くん。これはヒステリア・サヴァン・シンドローム――」

――言いやがった。

コイツも、持ってるのか。

俺の家に代々伝わる……この力を。

だが、兄さんの話によれば――ヒステリアモードは、女を守るために命を落としやすい危険な遺伝子で――現代まで遺伝させている家系は、遠山家しかない事になっていた。

「ヒステリア……サヴァン？」

俺の横で、アリアが眉を寄せている。

俺は――何も言わない。

「遠山くん。神崎さん。しばし、お別れの時間です。これで、彼を呼べる――ですがその前に一つ、イ・ウーについての講義をしてあげましょう」

イ・ウーの名前まで、出しやがった。

「この4世か、ジャンヌから聞いているでしょう。イ・ウーは能力を教え合う場所だと。しかしそれは彼女たちのように低い階梯の者達による、おままごとです。現代のイ・ウーには、ブラドと私が革命を起こした。このヒステリア・サヴァン・シンドロームのように、能力を写す業をもたらしたのです」

能力を、写す……？

「聞いたことがあるわ。イ・ウーのヤツらは何か新しい方法で人の能力をコピーしてる」
アリアの指摘に、小夜鳴は首を小さく横に振る。
「方法自体は新しいものではありません。ブラドは600年も前から、交配ではない方法で他者の遺伝子を写し取って進化してきたのです……つまり、『吸血』で」
……吸、血……？
「その能力を人工化し、誰からでも写し取れるようにしたのが私です。君たち高校生には難しいかもしれませんが――レトロウィルスを使った選択的なDNA導入を用いて、ね」
小夜鳴は涼しい顔で説明を続ける。
「それからは優れた遺伝子を集める事も私の仕事になりました。先日武偵高にお邪魔した時も、採血で一気に優良そうな遺伝子を集める予定でしたが……遠山くんがノゾいていたおかげで、あれは失敗してしまいましたね。不審な監視者がいれば襲うよう狼たちに教え込んであったのが、アダになりました」
……優秀な血統の人間の血を集め、血から遺伝子をコピーしようとしていたのか。
――そういえば武藤が言っていたな。『小夜鳴が間借りしてた研究室から、フラフラになって出てきた女子がいた』とかって。それも、血を抜いていたからだろう。
眉を寄せる俺の隣で、アリアが、ぎり、と歯ぎしりした。
「ブラド。ルーマニア。吸血……そう、そういうことだったのね。どうして今まで気づか

なかったのかしら。キンジ。ナンバー2の正体――読めたわ」

正体？

と俺がアリアを横目で見ると……アリアも横目で俺を見る。

「ドラキュラ伯爵よ」

さらに飛び出してきたな、普通じゃなさすぎる単語が。

「ドラキュラ……？　それは……架空のモンスターの名前じゃなかったのか？」

「違うわ。竜悴公・ブラドは、ワラキア――今でいうルーマニアに実在した人物の名前よ。ブカレスト武偵高で聞いたことがあるの。今もまだ生きてる、っていう怪談話つきでね」

アリアの言葉に、小夜鳴がうなずいた。

「――正解です。よくご存じでしたね。遠山くんと神崎さんは、間もなくそのブラド公に拝謁できるんですよ。楽しみでしょう？」

「でまかせだ。そもそも――」

俺は小夜鳴を睨みながら、首を小さく横に振る。

「兄さんの力をコピーしたのなら――どうしてそうやって、理子を苦しめ続けられる」

ヒステリアモードになった男は、女を守ろうとするものだ。

慣れれば女性と戦うこともできるが、それも自衛のためや彼女の間違いを正すためなど正当な理由が自分自身に求められる。

ああやって踏みつけにしたり、恥辱を与えるようなマネは、できないハズなのに。

「いい質問ですね。講師は生徒の質問に答えるのが仕事です。順を追って説明しましょう……むかーしむかし……」

小夜鳴は昔話を始めるような、フザケた調子で語り始めた。

「この世には、吸血で自分の遺伝子を上書きして進化する生物――吸血鬼がいました。無計画だったほとんどの吸血鬼は滅びましたが、人間の血を偏食していた1体――ブラドは人間の知性を得て、計画的に多様な生物の吸血を行い、屈強な個体となって生存しました」

――ウソか本当かは、この際、問題ではなかった。

「しかし、ブラドは知性を保つために、人間の吸血を継続する必要がありました。結果、ブラドには人間の遺伝子が上書きされ続け……そしてブラドは、とうとう私という人間の殻に隠されることになりました」

――小夜鳴がヒステリアモードを使って、何をしようとしているのか。

「隠れたブラドは、私が激しく興奮したとき――つまり私の脳に神経伝達物質が大量分泌された時に出現するようになっていました。しかし永い時が流れるうち……私はあらゆる刺激に慣れ、何をどうしても――激しくは興奮できなくなってしまったのです」

それが、分かろうとしている……！

「そこに転機が訪れました。遠山金一武偵のＤＮＡです。ヒステリア・サヴァン・シンド

ロームによる神経伝達物質の大量媒介は……ブラドを呼ぶのに、十分なものでした」

ピカッ、と、また遠雷が海に落ちた。

潮風に揉まれる黒雲が、悪夢のようなコントラストを空に描いている。

にい、と笑った小夜鳴は――踏みつけていた理子の頭を、もう一蹴りした。

理子の口から、ニセモノの方の青い十字架が地面に落ちる。

「さあ　かれ　が　きたぞ」

まるで神の降臨を迎えるかのような、小夜鳴の恍惚とした声。

「さっきの遠山くんの質問に回答しましょう――私は人間ではなく、吸血鬼。したがって人間の女は私にとって守るべき雌ではありません。人間から見たチンパンジーのような、全く別の生き物なんですよ。しかし幸運な事に、私はこういった動物虐待でも愉悦できる加虐嗜好の持ち主でしてね」

語る小夜鳴の気配を、俺はヒステリアモードで鋭くなった感覚で読み取る。

ヤツの雰囲気が……ヒステリア化から、さらにもう一段変わっていく。

なんだ、あれは……!?

ヒステリアモードどころじゃない。

『魂』そのものが入れ替わっていくような雰囲気だ。
これは少し変則的な……二重人格、というヤツなのか？
いや――
「へ……変、身……!?」
驚きのあまり途切れ途切れになったアリアの言葉の方が、そう、正しいだろう。
変身、と言った方がいい。
変身、している。
俺たちの目の前で。
びり、びりびり、と洒落(しゃれ)たスーツが紙みたいに破け、その下から出てきた肌は赤褐色に変色していく。肩や腕の筋肉は、ばき、ばきり、と不気味な音を立てて雄牛(おうし)のように盛り上がっていく。ズボンは上の方の布が残っていたが、露出した脚(あし)はもうケモノのようにに毛むくじゃらだ。
上半身の肌には、何やらツタ植物みたいな模様――入れ墨のようなものが白く浮き出ている。
まさに、バケモノだ。
そうとしか言いようがない。
ジャンヌが描いた絵は超絶的にヘタクソではあったが――

ウソじゃ、なかったんだな。

「Ce mai faci...いや、日本語の方がいいだろう。初めまして、だな」

声帯まで変わったのか、急に、何人かが同時に喋っているかのような不気味な声で喋り始めた小夜鳴は――

「オレたちゃ、頭ん中でやり取りするんでよ……話は小夜鳴から聞いてる。分かるか？ブラドだよ、今のオレは――」

と、名乗り直した。

こちらを睨む凶暴そうな眼は、黄金の輝きを放っている。

「……そうか……そういう事だったのか」

舌打ちした俺を、アリアが見上げてきた。

「ど、どういうことよ……！」

「あくまで――推測だがな」

俺は敵にも聞こえるよう、少し大きめの声で言う。

小夜鳴、というかブラドが余計な事――ヒステリアモード関連のこと――を洗いざらい喋ってくれても困るからな。

「擬態、みたいなもんだったんだろ」

「ぎたい……？」

「アリアの好きな動物番組でも、たまに出てくるだろう。たとえばトラカミキリはハチを装って自然界で有利に生きようとするが、その際は単に姿を真似るだけじゃなく『動作』までハチそっくりにせわしなく動く」

「う、うん。それは見たことある」

「ブラド・小夜鳴の変身は、それの吸血鬼・人間バージョンなんだ。アイツは元々、あの姿をした生き物だったんだよ。それが進化の過程で人間に擬態して生きるようになった。その擬態は高度で、姿だけじゃなく……小夜鳴という『人格』まで作り出した。厳密には違うようだが、二重人格みたいな状態で……吸血鬼の姿と人格を、内側に隠してたんだ」

俺が推理を素早く語るのを、紅い目をまんまるにして見上げていたアリアは——

どうやら俺が、ヒステリアモード状態である事に気づいたようだった。

顔つきまで鋭くなった俺と目が合うと、あわ、とちょっと慌てたように視線を逃がし、ブラドに向き直っている。

「『人間』という役に……なりきってたのね。まるで人間社会への潜入捜査だわ」

と、ブラドに向き直った。

「まあ——そんなところだ」

俺の話を聞いていたブラドは……細かく説明するのが好きだった小夜鳴とは違い、軽い口調で大雑把にそう認めた。

そして毛むくじゃらの前腕、鎌のように長く鋭くなった指で理子の頭を掴む。

「う……！」

「おぅ4世。久しぶりだな。イ・ウー以来か？」

ブラドが理子を片手で軽々と吊り上げた——その時。

一瞬、ヤツの拳銃が理子から逸れた。

俺は、今だッ！　とばかりに——3点バーストで、ブラドの腕を撃つ。

ババババッ——！

ほとんど同時に放たれた3発の銃弾は、全て命中した。

1発は拳銃に、1発は前腕を貫通し、もう1発は上腕内部に弾が残ったように見えた。

だが——

「……うっ!?」

呻いたのは俺の方だった。

ブラドの腕に開いた2つの銃創が……赤い煙のようなものを一瞬上げたかと思うと……

まるで口を閉じるように、簡単に塞がってしまったのだ。

それも、ほんの1秒ほどで。

二の腕からは、かちん。銃弾がご丁寧に排出されて、足元に落ちた。

ブラドは小さく鼻を鳴らしたかと思うと、ぎろり、と金色の目でこっちを見る。

「遠山。お前は、トマトを握り潰せるだろ？」
「？」
「オレにとって、人間の頭を握り潰すのはその程度のコトだ。だからもう、こんな道具で脅す必要もねえ」
と言ったブラドは撃たれたハズの腕を全く普通に動かし……壊れた拳銃を、ばき、ばき……！　と握り潰してしまった。
か……怪力ってレベルじゃないぞ、あれ。
鋼鉄製の拳銃をまるでプラモデルのように破壊する、あの握力。
あの力で理子の頭を握られたら——本当に、トマトを握り潰すようなことになる。
「4世。そういえば、お前は知らなかったんだよな。オレが人間の姿になれることを」
ぐい、とブラドが理子の顔を自分の顔に近づける。
ナイフのようなキバが、黒雲の下に鈍くぎらつく。
「ブ……ブラドぉ……！　だ、だました、な……！　オ、オルメスの末裔を斃せば、あ、あたしを……解放するって、い、イ・ウーで……約束、した、くせに……！」
と言う理子は、悔し涙を流しながらブラドを睨み返していた。
「——お前は犬とした約束を守るのか？」
ゲゥゥウアバババハハハハハハ！

ブラドはキバを剥いて笑った。

その笑い声がまた——明らかに人類のそれではない。

「檻に戻れ、繁殖用牝犬。少し放し飼いにしてみるのも面白ぇかと思ったんだがな。結局お前は自分の無能を証明しただけだった。ホームズには負ける、盗みの手際も悪い。弱ぇ上にバカで、救いようがねえ。パリで闘ったアルセーヌの曾孫とは思えねぇほどだ」

ブラドは、100年前に引き分けたという初代・怪盗リュパンの名前を出した。

「だが、お前が優良種であることに違いはない。交配次第では品種改良されたい5世が作れて——ソイツから、いい血が採れるだろうよ！」

ブラドはそこまで言うと、片手で吊した理子を……俺の方に突き出した。

「遠山。おめぇの遺伝子でも掛け合わせてみるかァ？」

——下衆め。

アイツにとっちゃ、人間と人間を掛け合わせて新しい遺伝子を作るのは——エンドウ豆を掛け合わせて品種改良するような事なんだろう。

人類全体を、ナメやがって——！

「いいか4世。お前は一生、オレから逃れられねぇんだ！」

ブラドは理子をブランブランと振って、半ば笑いながら叫ぶ。

「イ・ウーだろうがどこだろうが関係ねぇ。世界のどこに逃げても、お前の居場所はあの

檻の中だけなんだよ！　ほれ、これが人生最後の、お外の光景だ。よーく目に焼き付けておけよ！　ゲハッ、ゲバババッ！」

振り回される理子は、もう、強がることすらできずにいた。

「り、理子……！」

「理子！」

俺とアリアの声に、理子は……

泣き顔を見せるまいとしたのか、きつく目を閉じた。

しかしその頬には、大粒の涙が流れ落ちる。

「……あ……アリア……」

自信家だった理子が、絞り出すように出した、その声は。

「……キン、ジ……」

自分が仇敵と定めていたホームズの末裔と、そのパートナーである俺に。

あの夜、女子寮の屋上で言ったのと――

全く、同じ言葉だった。

「……た、す、け、て……！」

か細い声に――

「言うのが遅い!!」

風船が破裂するように、アリアが甲高いアニメ声を張り上げた。

2匹の銀狼が、びくん、とちょっと怯む。

「――キンジ、まずは理子を救出するわよ！　側面はあんたに任せるわ！」

叫んだアリアは、ばんっ！

背中にロケットブースターでもついてるかのような勢いで飛び出した。

まるで流星のように、一直線にブラドめがけて突っ走っていく。

その小さな背中には、何の迷いもためらいもない。

――ぐるおうんっ！

忠実な銀狼たちが、主人・ブラドに近づいたアリアめがけて左右から襲いかかる。

だがアリアは、迫り来るそのキバに振り向きすらしない。

『側面』……つまり狼は、ヒステリアモードの俺に任せるってことか。

それだけ、今の俺の戦闘力を信頼してくれてるんだな。

――なら、俺もその信頼に応えてやるよ。

「ゴメンな――」

呟いて、ガンッ！　ガウンッ！

俺は左右に1発ずつ、横向きに構えたベレッタで発砲した。

狼たちは――ずざあッ。

その場に伏せるようにして、倒れ込む。

そして、そのキバとキバの間をアリアが無事に駆け抜けていった。

俺も2頭の間を駆け抜けながら、ゴメンな、と心の中で狼たちにもう一度謝っておく。

2匹とも、殺してはいない。

銃弾を掠めて脊椎を圧迫し、麻酔にかけただけだ。解けるまで――5分ってとこか。

まあ、これ、レキの真似なんだけどな。

「ブラド！　理子はあたしのエモノよ！　横取りは許さない！」

エモノって。

と心の中でツッコむ俺をよそに――ガガガガガンッ！

アリアは転がりながらブラドの右側面に回り込み、銃弾の飛礫を浴びせかけた。

ばちばちばちっ！　という生々しい音が上がり……

ブラドの肩、腕、脚に10発。うまく理子を避けつつ、.45ACP弾が風穴を開けまくる。

「――ガキが。遊び方を教えて欲しいみたいだな」

撃たれたブラドは――笑って、いやがった。
傷口はやはり、赤い煙を上げながらすぐ回復していく。
その光景に眉を寄せつつ、俺は左手でバタフライ・ナイフを開いた。
そしてアリアの方に気を取られていたブラドの左側面に、死角から回り込み――
ざきんっ。
理子を掴む手の手首に、刃を突き立てる。
「小夜鳴先生は色々教えてくれたけどな――俺も一つ教えてやるよ、ブラド」
ざくッ、ざく。刺して抉るように、もう2撃。同じく手首。
正確には――
そこに通るハズの尺側手根屈筋、短掌筋、長掌筋をな。
「正しい女性の抱き方は、こうだ」
と、俺は理子を少し強引に抱き寄せ、お姫様抱っこする。
「……おッ!?」
意外そうな顔をしながら、ブラドは――握力を失ったその手を放した。
なるほど。筋肉のつく位置は、人間と大差ないみたいだな。
しかし、傷は……もう赤い煙を上げながら塞がりつつある。
（あの無限回復力を、何とかしなきゃならないな）

理子を抱いたままブラドから遠ざかった俺は、同じくバックステップで距離を取っていたアリアと合流する。

「さっきの話――結局なんだかよく分かんなかったけどね！　理子！」

……分かんなかったのかよ。

と、頬を引きつらせた俺が抱っこしている理子に――

アリアは吸血鬼にも負けない勢いで、犬歯をむいた。

「あたしを騙したきゃ騙す、使うなら使うで、こそどろなんかじゃなくって――こういう戦闘の方に使いなさいよ！」

そ、そこがポイントだったのかアリア的には？

「それとブラド！」

アリアは、ざっ！　と今度はブラドに向き直る。

「あんた――さっき、あたしの事を『ガキ』って言ったわね？　あたしはもう16歳よ！　その言葉、明らかな侮辱と受け止めるわ！」

「人間なんざみんなガキだ。８００年生きてる俺から見ればな」

「……また言ったわね!?　もう、ひざまずいて泣いて謝っても許さないわよ！　あんたもルーマニアの貴族だったんでしょ？　貴族を侮辱したらどうなるか分かってるわよね!?」

「――どうするってんだ？　え？　これからどうしようってんだ、このオレを」

ブラドは含み笑いしつつアリアを見据える。
「決まってるでしょ。逮捕するのよ！　ママの冤罪、99年分は――アンタの罪！　ママの裁判の証言台に、耳引っぱって引きずってでも立たせてやるんだから！」
と言うアリアの言葉に、ブラドは爆笑した。
「ゲァババハハハ！　オレをタイホときたか！　ホームズ家の娘！」
金色に光る、人間のものとは思えない双眸に――
さすが、双剣双銃のアリアは一歩も退かない。
「ブラド。あんた、相当のマヌケだわ。マヌケ度で言えばキンジ、武藤レベル」
おい。
武藤と一緒にするな。
「『無限罪のブラド』――あんたは、あたしのターゲットの中でもいちばん正体不明で、見つけにくそうな相手だったわ。それが警戒心もなく、あたしの目の前で正体を現したんだからねっ。覚悟なさい！」
「吸血鬼と人間は、捕食者と餌の関係だ。狼が、ネズミを警戒すると思うか？」
「年寄りのくせに無知ね、ブラド。世の中には、毒を持ったネズミだっているのよ」
などとこのあいだテレビ番組で見た知識を自慢げに言いながら、アリアは――ぐい、と腰にあてた手の指を、ちゃきちゃき。

俺たちにだけ見える位置で、エアギターでもやってるかのように動かした。
これは――武偵が使う暗号の一種。指信号だ。
とっさに読むと、「リコ　ヲ　カクセ」と言っている。
なるほど。それで、俺たちをヤツから守るような位置に立ちはだかったのか。
ご命令に従って――
俺は理子を抱いたまま移動し、ヘリポートの陰、段差の下にひとまず隠れる事にした。
「すばらしい。アリア。生意気な女ほど、串刺しにするといいツラをするんだよなァ」
ゲバッ、ゲバッ、ゲバハハッ――
生理的な嫌悪感を誘う、不気味な笑い声を上げているブラドは……
挑発に乗せられて、意識をアリアに集中させている。
理子とコミュニケーションするなら、今のうちだ。
「――理子、動けるか」
抱っこしていたのを、お人形さんのようにそっと床に下ろしてやると……
理子は、小さくうなずいた。
そして俺の方を睨むように見据え、袖をつかんで詰め寄ってくる。
「キンジ――今すぐアリアを退かせて。ブラドは強い。強すぎるんだよ！　あたしはイ・ウーで決闘したけど、手も足も出なかった。アイツには初代リュパンすら勝てなかった。

何をやってもかなわない――過去、それは証明されてることなんだよ！」
「過去？　過去なんか、塗り替えるものだよ」
笑顔で返したステリアモードの俺に、理子は激しく首を横に振った。
「ムリ！　ムリなんだよ！　絶対にムリなんだよ！　今すぐここから脱出するしか、生き延びる道は無い！」
叫ぶ理子の手を、そっと握ってやる。
「武偵憲章2条。依頼人との契約は絶対守れ。契約はまだ、終わってない」
「そっ……そんな契約！　あたしが裏切った時点で無効に決まって――」
と喚く唇に、つ、と今度は指をあてて言葉を制止する。
「たしか――理子を『たすけて』あげる契約だったね」
微笑んだ俺は、反対の手で理子の首筋に優しく触れながら――ちゃり。
青くきらめく十字架を、かけてやった。
「……！」
理子はまるで奇跡でも見るような表情で、その大きなふたえの眼をまん丸に見開く。
「ブラドのポケットに入っていた、本物のほうだよ。さっき理子をアイツから奪った時……落ちていたニセモノと、すり替えておいたのさ」
小さくウィンクしてやると、理子は十字架を見て、俺を見て、もう一度十字架を見て、

そして――俺を見て。

かぁ……！

と、頬を赤らめた。

それは理子が今まで俺に見せてきたのとは違う、新しい表情で。

色仕掛けの演技ではなく……どこか普通の女の子らしい、本当に愛らしい表情だった。

しゅる、と、俺の袖を掴んでいた手が緩んだので――

俺は理子に背を向け、ヘリポートへの段差を上がる。

「理子。いいんだよ。君は戦いたくなければ、戦わなくていい。俺だって本当は帰りたいところだけど……俺の小さなご主人様が、それを許してくれないんでね」

ヘリポートに上がってこない理子に背中で言うと、俺は……

アリアと対峙するブラド――人外の魔物を、睨み付けた。

ブラド。

イ・ウーのナンバー2。

その強さは、ジャンヌに警告されている。

見つかったらとにかく逃げろ、とまで言われている。

そのバケモノっぷりは今、この目で見て確かめた。

――銃弾が効かなかった。

――拳銃を、片手で握り潰した。
こんな相手と戦ったことはない。強襲科時代にも。
逃げろ、逃げろ、逃げろ。
全身の細胞が、そう叫んでるのが分かる。
だが――
だが、な。
あのバケモノに執拗に追われている女子に、「たすけて」と言われて。
勇敢にも戦うつもりらしいパートナー、それも女子を置いて。
……逃げる？
――ハッ。
そんなの、ヒステリアモードでなくてもできねえよ。
だから――
しょうがない。
しょうがない、ってのが俺の結論だ。
理子。お前を助けてやる。ブラドの手から。

アリア。付き合ってやるよ。この戦い。
ヒステリアモードで戦っても、殺されちまうかもしれないけど……

――俺も一応、男だからな。

「くっ……この！」
アリアはブラドの周囲を回りつつ、パン！　パァン！　と二丁拳銃を撃ち続けている。
だがその銃弾は案の定、敵に何らダメージを与えてはいなかった。
（……？）
だが、俺はある異変に気づく。
ブラドの身体に浮き出る白い入れ墨が『目玉模様』みたいになっている部分……
そこを撃たれた傷は、治ってはいたものの、流血の跡が涙のように残っているのだ。
その光景を横目に見ながら、俺はヘリポートの縁でアリアと合流した。
俺たちが揃ったのを見たブラドは、ニヤリ、と笑い……
こっちに背を向け、屋上の隅に立つ携帯電話用の基地局アンテナの方へ向かった。
――何か、企んでいるな。
しかしそれを止めには行かない。

この時間で、俺たちも企ませてもらうぞ。
「……あいつ。あたしをあの爪で突き刺すチャンスが何度もあったのに、掴もうとしてきたわ」
小さく息を切らしながら、アリアが俺に耳打ちする。
「生け捕りにするつもりだったんだろう。ヤツは名家の血のコレクターだからな」
「――血統書付きのイヌネコじゃあるまいし」
ぎり、と犬歯を剥いたアリアに、
「……アリア。ブラドには体の4か所に弱点がある」
俺はジャンヌから『非常時にだけ共有しろ』と教えてもらっていた情報を耳打ちする。
「弱点……ですって？」
「ああ。その4か所を全て同時に攻撃すれば、きっと斃せる。イ・ウーのナンバー1は、そうやってアイツを従えたらしい」
「ど……どこで聞いたの、そんな話」
ジャンヌの事を説明しようかと思ったが、その時間は無さそうだったので――
ヒステリアモードが継続していた俺は、ぐい、とアリアの小さな両肩を掴んでこっちを向かせた。
真剣な顔をアリアに近づけると、アリアは、あわっ、とちょっと焦ったような顔をする。

何かされるのかと思ったのか、きゅ、とちょっと肩にも力が入って、身構えてるな。
「な、なによなにっ」
「武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。詳しい説明は――後だ」
「わ、分かってるわよ。そ、そそ、そんなに近くから見ないで」
赤面癖メーターがかなり上がってるようだったので、俺はアリアを解放してやる。
（たしか、ジャンヌが言っていた弱点の位置は――）
巨大なアンテナをばきばきと引きはがしているブラドを見れば……
全身に浮き出た肌の模様の中に、さっきのと同じ『目玉模様』が合わせて3つあった。
左右の肩と、右の脇腹。ジャンヌがかつて教えてくれた弱点の部位と一致する。
「あれだ、あの目玉の模様だ……！」
だが、ジャンヌも分からないと言っていた4つめが――見当たらない。
アリアもそれは気がついたらしく、
「キンジ。でも、3つしかないじゃない」
「4か所目がどこなのかは……分からないんだ。戦いながら探すしかない。同時攻撃する時は――アリアがあの両肩の目をやってくれ。俺が、脇腹と第4の目をなんとかする」
「……分かったわ。でもあたし、実はもう銃弾が2発しかないの。だから同時攻撃の時は『撃て』って言って。それまで、弾切れしたフリをする」

と、背中から寸詰まりの日本刀を2本抜いたアリアに――俺は眉を寄せた。
弾切れ、か。
銃弾を貸してやりたいところだが、アリアのガバメントは.45ACP弾という大口径弾を使う大型拳銃だ。世界標準の9ミリパラベラム弾を使う俺のベレッタや理子のワルサーとでは、弾の互換性がない。
ばきん！
という音に思考を中断されて振り向くと、向こうではブラドが――5メートルはあろうかという携帯基地局アンテナを屋上からむしり取ったところだった。
ごすん、とそれをブラドが槍のように足元に落とすと、地響きがこっちまで届く。
数トンはありそうな重量感だ。
アンテナとはいうが、あれはもはや鬼の金棒。バスでも破壊できそうな大鉄槌だ。
「……人間を串刺しにするのは久しぶりだが、串はコイツでいいだろう。ガキ共、作戦は立ったか？　銀でもニンニクでも何でも持ってこい。オレはこの数十年の遺伝子上書きで、何もかも克服済みだ。まァ……いまだに好きではないがな」
ぐぱぁ、と開いた口の中に刃物のようなキバをぎらつかせて――ブラドが笑う。
「ホームズ4世。おめぇもリュパン4世と同じような、ホームズ家の欠陥品みてえだな。ウサギみてぇなすばしっこさと射撃の腕はともかく……初代ホームズの推理力が、まるっ

きり遺伝していないと聞いたぞ」

「……それが何？　遺伝、遺伝って粘着質ね。たまにいるのよ、そういう家系図マニア。あのねぇ。あんたは遺伝子の書き換えと才能だけで強くなったみたいだけど――人間は、遺伝子だけじゃ決まらないのよ！」

アリアはイラッときたような顔をして、ぐい、と偽装胸を張った。

「先天的な遺伝は、確かに人間の能力をある程度決めてしまうわ。でも人間はそれ以上に、努力や鍛錬で自分を後天的に高めることができるのよ！　――理子に何も遺伝してないって言うんなら、あの子はその生きた証拠だわ！」

少し背後を見やると、段差の陰に少し見えている理子のリボンが――びくん、と動いていた。

聞いているらしい。

「――あたしはあの子と2度戦ったけど、本当に強かったんだから！」

がお！　と叫ぶアリアに、ブラドは基地局アンテナを振りかざして見せた。

「――それは、欠陥品同士だからそう感じたんだろう？」

数トンはあろうという金棒を、まるで木ぎれか何かのように扱ってやがる。

「ただ……今のお前には遠山という、欠陥を補うパートナーが揃っている。ホームズ家の人間が誰かと2人組の時は警戒しろ、と昔聞いたことがあるんでな。まずはお前にご退場

願おうか。遠山キンジ」

ぎろッ――と、黄金の双眸が俺を見た。

「ワラキアの魔笛に酔え――！」

言うとブラドは、大きく、大きく、身体を反らし――ずおおおおおッ、と。

巨大なジェットエンジンのような音を立てて、空気を吸い込み始めた。

な、何をするつもりだ……!?

胸が、まるでバルーンのように膨らんでいる。その不気味な光景に、発砲することすら忘れてしまう――

ビャアアアアウヴァイイイイイイイイイイイイイイイ――ッ!!

咆哮――！

その、魔物の吼え声は――

ランドマークタワー全体を振動させ、低く垂れ込めた雨雲の一部すら砕くほどの大音声だった。

直線距離で数百メートル離れた横浜の駅や街でも聞こえただろう。

俺とアリアの服がばたばたと揺れている。風ではなく、音で。

ケースの中で振られたプリンのように、脳みそがぐらぐらする。五臓六腑がぐちゃぐちゃに暴れる。全身の血液がボコボコかき回されるのが分かる。

俺は――鼓膜が破れないように耳を塞ぎ、眼球が飛び出さないように瞼を力一杯閉じ、ショックで転倒しないようにするので精一杯だ。

嵐のような――一瞬が過ぎ。

「ど……ドラキュラが、吼えるなんて……聞いてないわよッ！」

完全に尻餅をついていたアリアが、震える膝で起き上がってきた時。

「――――！」

キバを見せて笑うブラドを見て――

俺は――気づいた。

俺のヒステリアモードが、解除されている。

萎えて、しまって、いる。

（ヒステリアモード破り……！）

冷や汗が流れる。

やられた。

アイツはヒステリアモードを自分のものにしてから、その解除方法も発見していたのだ。

――俺のヒステリアモードがキャンセルされたことに、気づいたのだろう。

ずしん、ずしん、と、ブラドは金棒を担いだまま前進してくる。
あんなもんで殴られたら――
身体のどこに当たっても折れる、というか、ちぎれちまうぞ。
と、思うが……俺は何もできずに立ちつくしていた。
どうすればいいのか、分からないのだ。
今の俺には。
「もう殺傷圏内よバカっ！　なにボーっと突っ立ってんの！」
叫んだアリアが、俺に足払いをかけてくる。
がくん、と俺は後ろ向きに転び――
「!?」
空気を切る爆音を上げながら襲いかかってきたブラドの金棒が、眼前を通過した。
そして、ギイイイィンッ！　という甲高い衝撃音。
俺の身代わりに、アリアが金棒に弾かれたのだ。
日本刀で金棒を受けたアリアは、しかしボールのように吹っ飛ばされて――どさっ。
ヘリポートの隅に落ちて転がった。
「アリア！」
叫んだのとほとんど同時に、ブラドの金棒が返ってくる。

転ぶようにしてそれを避けようとした俺は、それでも金棒に肩を掠められた。

「――うッ！」

ガシュッ――!!

それだけで、俺の身体は交通事故みたいに吹っ飛んだ。

視界がぐるん、と回転し、自分が宙を舞っている事に気づく。

文字通り、飛ばされた。10メートル、いや、20メートル以上。

何の身動きも取れなかった。なされるがままだった。ヒステリアモードじゃない俺は、運動神経も普通の高校生に戻ってしまうのだ。それを痛感しながら――

ワンバウンドした俺の身体は、屋上の縁を掠めて。

あっ――

と思うヒマもなく。ワイヤーを引っかけるヒマもなく。

「――――！」

転落していた。

２９６メートルから。

地上、めがけて。

――死んだ。

本当に死んだ。

死の直前には走馬燈が見えるなんて言うが、実際には呆然とするもんなんだな。
何も考えられない。
真っ白だ。
ただ、後ろ向きのジェットコースターのように遠ざかっていくビルの屋上の縁を——
ただ、見つめている。
（——？）
その屋上の縁を、たったったたたっ——！
と、駆ける姿があった。
（理子!?）
理子、だ。
ヒラヒラの改造制服を着た理子は、たんッ！
まるでプールに飛び込むかのように、美しい姿勢でビルの縁から飛び降りた。
「——！」
ケモノの目をした理子は、くりんっ。空中で姿勢を変え、ビルの壁面に足をつけて——
たっ……たたたたッ！　まるで忍者のように壁面を走り降りてくる。
ただ落ちる俺より、その降下スピードは速い。
わさっささっ、と動いたその長い後ろ髪がＦ１カーのリアウィングのように変形して、

理子の空中姿勢を保たせている。
「キンジ！」
叫んだ理子は、たんっ！
壁を蹴って、墜落する俺に空中で飛びついてきた。
そして、ばふぅっ。
なんでか自分のダリアみたいにひらひらしたスカートの中に、俺の頭を押し込む。
そして両もも、むにゅんと後ろから俺の頭を挟んできやがった。
「な……なんだッ!?」
理子を肩車するような姿勢にさせられた俺が、やっとそう言った瞬間。
シャッ！
理子はヒラヒラのふわふわなセーラー服、その背中のリボンを一気に解いた。
すると――
――ばさばさっ、ばさっ！
花が咲くように、その布量のやたら多い衣装が解けて、解けて、頭上に広がっていき。
ふりふりスカートのヒダが伸びて、伸びて、どんどん広がっていき。
――パラグライダーに、なった。
ぐんッ！

理子は即座にビル風――上昇気流を捉え、ランドマークタワーの周囲を旋回するように飛び始めた。

俺の両腋を、曲げた両脚で引っかけたまま。

「り……理子……！」

物凄い勢いで視界を流れていくビルの窓。

そこに映る自分たちの姿を見て、俺は気づく。

こんな時に何だが、今の理子……し、下着姿だぞ。

そ、そりゃそうだよな。改造制服は、パラグライダーに変形しちまったんだから。

ということは……いま俺を吊している、この生足の、付け根の……その……

俺の首の後ろの辺りにピッタリ押しつけられている薄布みたいなものは、というか、みたいなじゃなくて布は……あったかくて、思いのほか柔らかいここは、その……

なんというか。

下着、なんだよな。

だよな。それも、下の方の――

それが、自分の首に密着していることを認識してしまったが最後。

――ドクン。

俺の心臓が、1つ、大きく跳ねてしまった。

こんな状況なのに。

さらに、俺を振り落とさないようしっかりと両頬にあてられた白いふとももの肌。

これが……もぎたての白桃のように、しっとりと瑞々しい。

それが、方向転換のたびに、ぐり、ふに、と俺の顔を揉みしだいてくるのだからたまらない。

理子。理子。放せとは言えないし、今度ばかりはお前もわざとじゃないんだろうけど、これは——凄いことをしてくれてるな。

——ドクン。

見上げれば、金色の下着だけの姿になった理子が、リボンのブレークコードを操作して飛空姿勢を制御している。

その真剣な表情が、また、普段の幼い表情とのギャップがあって——いい。

——ドクン。

これで3アウト。チェンジだ。

「——理子」

本日3度目のヒステリアモードになった俺が、低い声で呼ぶ。

「ハイジャックで理子がこの服のパラグライダーを使った時、俺たちは敵同士だったね。でも今、理子は俺を助けるために飛んでくれた」

理子は無言で、ブレークコードを操作している。
「過去は、塗り替えられた。理子の決断によって」
高度は、上がりも下がりしていない。
理子。
屋上へ向かうか、地上へ逃げるか、迷っているんだな。
「理子。理子は過去を塗り替えることができる子なんだ。だから過去に怯えてちゃダメだ。怯えて、過去に縛られてちゃダメだ。塗り替えるんだ、アイツの事も！」
俺の声に、理子はしばらく……黙っていた。
そして――
「キーくん」
小さく、呟くように答えてくる。
「理子。理子は理子だ。もう、4世なんて呼ばせちゃダメだ！」
すかさず叫んだ俺に背中を押されるようにして、理子は大きく息を吸いこんだ。
その小柄な身体に似合わない大きな胸が、膨らんでいく。
「キーくん。あたしの名前を……呼んで」
「理子」
震える声に、俺は応えた。

「もう一度、呼んで」
「理子」
「呼んで！」
「理子！」
――クンッ！
と、パラグライダーが上昇気流を捉えて――
ほとんど真上ともいえるような角度で、飛び上がった。
そうだ理子。
お前は理子だ。
数字なんかじゃない。
ただのＤＮＡの乗り物なんかじゃない。
それに、さっきアリアも言ってたけど――
お前は、無能なんかでもない！
俺はそれをよく分かってるぞ。お前に危機一髪の所で助けられたんだからな。
「キーくん」
俺たちは屋上に向かって上昇していく。
「理子はいままでキーくんたちを2度も騙したから、もう信じてもらえないかもしれない

けど――ブラドには4か所、弱点があるの。キーくんはジャンヌから聞いてるよね」
「ああ」
「その4か所には魔臓（まぞう）っていう――人間には無い、小さな内臓があるの。それが吸血鬼の無限回復を支える臓器なんだよ。魔臓はよくできてる。1個でも残ってれば、他（ほか）の3個をほんの1秒もかからず治せる。だから、4つ同時に機能不全に陥（おとしい）れなきゃダメなの」
――そういう事だったのか。
「視線でバレないようにするために、場所は言わないでおくけど――理子は……4つめの魔臓の位置を知ってる。アイツと……暮らしてたから」
「4つとも撃ったら、どうなるんだ」
「元々吸血鬼が持っていた弱点が全部復活するんだよ。ブラドは弱点を克服できてない。魔臓を進化させて、治せるようにしただけなの」
「ってことは……」
「有名な弱点が全部、ホントに弱点になる。銀はブラドにとって猛毒に変わる。紫外線に火傷（やけど）するようになる。大蒜（ニンニク）に含まれるスルホキシドにも、強烈なアレルギーを起こす」
くんッ。
理子は方向転換して、次のビル風を捕まえる。
「だが理子――弱点の場所が分かっていても、俺たちには銃が足りない」

――4か所を同時に破壊するには、4丁の銃と撃ち手が必要だ。
アリアが2か所、俺が1か所を担当するにしても、あと1丁、足りない。
理子のワルサーは、銀狼に捨てられてしまっているのだ。
「銃は、あるよ。お母さまの形見の銃が。弾は1発しかないけど、理子が持ってる」
俺は理子を見上げるが、下着姿の理子のどこにもホルスターは見当たらない。
「どこに……」
「隠してる。お母さまと同じところに」
「……分かった。屋上に出て、アリアとコンタクトし――同時攻撃に入ろう」
「キーくん。チャンスは、たぶん1度しかないよ。ブラドは理子のワルサーをまず片付けたし、自分の銃までバラバラにした。銃が4丁あるのが怖いんだよ。だからきっと、4丁めの銃を見たら警戒する。警戒されたら――もうチャンスは無いよ」
だろうな。
理子は大きく旋回しながら、とうとう屋上の高度に到達した。
そこでは――傷だらけのアリアが、ビルの縁を駆けるようにしてブラドの金棒を躱しているところだった。
俺たちが無事なことは、確認済だったらしい。
見ているこっちがヒヤッとするようなバック宙を切って、ブラドをビルの縁に誘い込み

あわよくば転落させようとしている。
しかしブラドは勿論、そんな誘いには乗りそうにもなかった。
――パッ。
空中ブランコみたいな動きで理子が脚を解き、俺は屋上に着地して回転受け身を取る。
「アリア！」
叫びながら、そのままブラドめがけて駆ける。
「――撃て！」
さっきの打ち合わせ通り、アリアは俺の掛け声に――スカートを翻した。
そして、瞬時に抜いた二丁拳銃を構える。
俺はアリアよりもさらにブラドに肉薄する。
理子がパラグライダーを切り離し、ブラドめがけて空から飛びかかる。
――いくぞ！
やるんだ――4点攻撃。
チャンスは1度きり。
だがそれがなんだ。
人生だいたい、チャンスなんて、1度きりだろ！
「ブラドぉ！」

アリアがブラドの両肩を狙い、最初にトリガーを引こうとした――まさにその瞬間。
予期せぬ不幸が訪れた。
――ピカッ！
という、稲光が。
「うっ――!?」
黒く立ちこめていた雨雲から、街のどこかに雷が落ちたのだ。
反射的に目を閉じてしまったアリアは――それでも、もう指を止められなかったらしい。
最後の2発の銃弾が、白銀と漆黒の銃口から放たれてしまう。
ああ。
射撃の天才のアリアが――まさか、しくじるなんて！
ニガテな、雷のせいで……！
だが。
まだだ！
（――まだ、終わらせるかよ！）
ヒステリアモードの俺が、意識を集中させると――
全てが、スローモーションのように見え始めた。
そう。かつて理子と戦った、ハイジャックの時と同じように。

亜音速で飛ぶ、アリアの銃弾――
その軌跡まで、今の俺の眼には見えていた。
左の銃弾は大丈夫だ。あれならブラドの右肩に当たる。
しかし右の弾は――逸れる。あれでは下に逸れて、脇の下を通過してしまう。
だが。
あの軌跡なら。
できる。
修正できるぞ！
「――！」
バスッ！
俺のベレッタが、アリアのガバメントに続いて火を噴いた。
アリアより敵の近くから放った俺の弾は――
キィィィン！
空中で、アリアの弾を掠め。
その弾の軌道を修正しながら、自らも跳ね返って――狙い通りの軌道に乗った。
ビスビスビスッ！
右肩・左肩・右脇腹――！

3発の銃弾が、見事、ブラドの身体(からだ)に付けられた3か所の目玉模様を射抜く。
銃弾撃ち(ビリヤード)。
兄さんがむかし見せてくれた、宴会芸みたいな技がこんなところで役に立つとはな。
――そして、それと全く同じ瞬間。
ブラドは空中を見上げ、何かを叫ぼうとしていた。
その視線の先には、胸の谷間から超小型銃(デリンジャー)を出す理子(りこ)の姿が――
「――4世!!」
というブラドの叫び声と同時に、パァン！
理子のデリンジャーが、乾いた発砲音を上げた。
ぎゅむ。
銃撃を終えた理子は、ブラドの頭を踏み、ぽん。
と、その背後に跳んで、たったたた。
可愛(かわい)らしくターンし、
「ぶわぁーか」
ブラドにアカンベーした。
ブラドは……まさしく鬼の形相(ぎょうそう)で、同じく、ベロを出していた。
その長く分厚いベロには。

中心を打ち抜かれた、『目玉模様』が。

「は……ハハハバハ……」

理子を罵倒するクセがついていたのか――

口を開けたせいで4つ目の弱点をさらけ出してしまったブラドは……力なく、笑い。

ガツン、と手にしていた金棒を地面に落とした。

その落とし方が、マズかった。

電信柱みたいな金棒が斜めに傾き、ブラドの身体にのしかかるようになったのだ。

「う、ぐぅ……!?」

それを押し返そうとするブラドの手には、力がまるで籠もっていない。

数トンはある金属製の基地局アンテナが、ブラドの巨体と十字に重なるように……

ずしん……と、倒れた。

「う、ァう……」

金棒の下敷きになったブラドの銃創から、絞り出されるように血が流れ出る。

ブラドが何百年もかけて集めた血が、流れ出ていく。

ブラドは苦しそうな声を上げたかと思うと、ぴい、ぴい、と歯を鳴らした。

ようやく動けるようになったらしい銀狼たちが、ぷるぷる震えながらそのブラドに寄り添って……日陰を作ってやっている。

こんなに曇ってるのに、無限回復力を失った今は――日光がダメなんだな。
「……どうする、アリア。ブラド潰れちまったぞ」
振り返って訊ねると、アリアは――くるくるくるっ、すぽっ。
2丁のガバメントを指で回してからホルスターに収めて、ぐいっ。腕組みした。
「どうもできないでしょ。あんな鉄柱、あたしたちの力じゃ動かせない」
「まあな」
「あれはブラドが自分で持ってきたモノなんだから。自業自得よ！」
仁王立ちで叫ぶアリアに苦笑しつつ、俺はブラドのそばまで行って様子を見る。
ブラドは……悔しそうにこっちを見上げ、何事かブツブツとルーマニア語で呪いの言葉みたいなのを呟いてるな。こりゃすぐには死なないだろう。さすが吸血鬼だよ。
ベレッタをホルスターに収め、顔を上げると……
神奈川県警のヘリが、こっちに向かっているのが見えた。
けっこう派手にドンパチやらかしたからな。通報されたんだろう。
あれにレスキュー隊でも呼んでもらいつつ、ブラドの身柄を引き渡すとするか。
だが、その前に……
「やったな。理子」
倒れたブラドを信じられないような目で見ていた理子を、俺は称えるように呼ぶ。

「初代アルセーヌ・リュパンにも倒せなかったブラドが、ほら。ごらんの有様だよ」
と言うと、歩み寄ってきたアリアが横からキョトンとした顔を出す。
「さっきはまさかって思ったけど――リュパン1世とブラド、ホントに戦ってたの？」
理子は何も答えずブラドを見ているので、俺が代わりに答えてやる。
「そうらしい」
「ふーん。なんか理子、初代を超えるだの超えないだのってこだわってたけど――」
腰に片手を当てて理子の方を向いたアリアを、一陣の海風が撫でる。
「――じゃああんた、いま、初代リュパンを超えたわね」
おめでとう――
とは続けなかったが、アリアの表情はそんなカンジだった。
顔を上げた理子は、アリアの言葉に少し目を見開き……ただ、黙っていた。
（……そうか。そうなるよな）
俺は内心、うなずく。
初代にも倒せなかったブラドを――理子は、倒した。それには俺とアリアも力を貸したわけだが……助っ人がいたらルール違反、って事もないだろう。たしか、往年のリュパン1世にも双子のジャンヌ・ダルク27世がセットでついてたそうだし。
そして――

そもそも理子がアリアと戦いたがっていた理由は、初代・怪盗リュパンを超えるためだった。

ブラドを倒すことで、その目的は達成され――いま、消えてなくなったのだ。

だが……

「ブラドのこと――感謝はしないよ、ホームズ。今回は偶然、利害が一致しただけだ」

と、再び目つきを険しくした理子の態度は、あまり友好的とはいえなかった。

「オルメス家がリュパン家の宿敵であることに変わりはない。永遠にな」

言いながら理子は、こそっ……と、後ろ髪を動かしているようだ。

何をするつもりだ。

いや、既に、何かを――している？

「そうね。あたしもあんたなんかと馴れ合うつもりはないわ」

言いながらアリアも、ツリ目ぎみの目をさらに鋭くする。

「で？　あんた、これからどうするの。逃げようってんなら捕まえるわよ。ママのこと、尋問科にぶちこんでも証言させてやるんだから。観念しなさい――理子。得意の口先ももう通用しない。得意の双剣双銃をやろうにも、武器が無い。得意技を全部封じられたら、人間、何もできないものよ」

アリアは言いながら、俺に小さく目配せする。

俺は理子に「ごめんな」と苦笑いし、屋上からの唯一の出口、階段に立った。
理子の逃げ道は、これで無くなったわけだ。
アリアの言うとおり、得意技も全て使えないだろう。
さあ、どうするつもりかな。仔猫ちゃんは。
「……神崎・ホームズ・アリア。遠山キンジ」
理子は俺たちを初めてフルネームで――アリアのミドルネームは、フランス語の『オルメス』ではなく英語の発音で正式に――呼びながら、ビルの縁まで歩いていく。
「あたしはもう、お前たちを下に見ない。騙したり利用したりする敵じゃなくて、対等なライバルと見なす。だから――した約束は守る」
こっちに背を向けた理子に、さあっ、と、海風が吹いた。
その風に押されて、理子の長い後ろ髪が解けるように流れ――髪の奥に隠されてあった小さなリールが、露出した。
電動式と思われるそのリールは――小さな火花を上げて高速回転している。
目には見えないほど細い、ピアノ線か何かをたぐり寄せているようだ。
「バイバイ、ライバルたち。あたし以外の人間に殺られたら、許さないよ」
少し赤くなって俺たちに言った理子は、十字架のように両腕を広げ――
ばっ、とビルから飛び降りた。

「――理子！」

アリアの声とほとんど同時に、理子のパラグライダーが鳥のように舞い戻ってきた。

理子はブラドを攻撃する時に切り離したパラグライダーを背中のリールに繋ぎ、ずっと空で待機させていたのだ。凧のように。

リボンのブレークコードを掴んだ理子は、空中を泳ぐように――

華麗にパラグライダーと自分を繋ぎ、アリア顔負けのコード捌きで遠ざかっていく。

そしてその姿はみるみるうちに小さくなっていき、港の倉庫街へと消えていった。

「……やられたな。これで2度目だよ」

赤紫色の瞳をぱちくりさせて遥か眼下を見ているアリアの隣で、俺は肩をすくめた。

忘れていたよ。

ヒステリアモードの俺ともあろう者が。

あの子の一番の得意技は――そう。

逃げ足、だったんだよな。

最終弾　大変なものを盗んでいきました

武偵高に帰った後、紅鳴館で窃盗行為を働いた件はさすがに教務科にメールで報告しておいた。保護観察にでもなんでもしやがれ、という覚悟だったのだが――

このあいだアリアに言われた通り、俺の報告は黙殺された。

その返事代わりに速達で来たのが、『司法取引』に関する分厚い資料だった。

東京と神奈川の武偵局、警視庁、神奈川県警、検察庁、東京地裁から来た大量の書類をヒステリアモードの解けた平凡な頭で何とかまとめたところによると……ブラドの一件は永久に他言無用、その代わりこの1か月での違法行為は一切お咎めナシという事だった。

俺は指定文書に署名捺印して、返信用封筒で返信すればそれで取引成立らしい。

すげえなこの制度。

さらに――驚いた事に、俺たちとブラドの戦闘行為は一切報道されなかった。

誰がどう手を回したのやら、ランドマークタワーの屋上で起きたことは落雷事故という事になっている。

――いかにイ・ウーの事がこの国でタブーなのか、思い知らされた気分だよ。

「たっだいまぁー！　りこりんが月の都から帰ってきたよー！」
まるでブラドとの一件が無かったかのように2年A組に戻ってきた理子に――
りこりん！　りこりん！　と一部男子が群がっている。
あの腕を振る踊りは一体何なんだ。
（り、理子のヤツ……！）
苦虫を１００匹ほど噛み潰したような顔をする俺の横で……
アリアは頬杖をついて窓の外を見てはいるものの、あれ。怒ってないな。
どうすんだよ、理子は。
と指示を待つ俺をよそに……
アリアは、一般教科の授業が終わるとフツーに教室を出て行ってしまった。
（……おいおい、理子を捕まえなくていいのかよ？）
などと思いながら、落ち着かない気分で探偵科の授業を受ける。
探偵科でも、理子は休み時間にゲーマーのクラスメートたちとギャルゲーの話題で盛り上がるいつもの理子だった。
独断で話しかけてみようかとも思ったが、あれじゃあ割って入るに入れないな。
話してる単語がマニアックすぎて、１つも分かんねーし。
そして……とうとう放課後。

結局、理子に話しかけるタイミングを掴めずじまいだった俺が探偵科を出ると――

「キーくん」

ロビーの所で、とたた、と理子が出てきた。

「理子」

俺は驚きつつも、また抱きつかれたり腕組みされたりするんじゃないかと身構える。

が、理子は普通の女子っぽい仕草で……

俺の横に、並んできた。

「……あ、えっと……帰ろっか」

な、なんだよ。

これも普通の女子みたいなこと言いやがって。調子狂うな。

探偵科棟にいたから気づかなかったが、台場にはさっき少し雨が降って、もう上がったところらしかった。梅雨も、もうすぐ明けそうだ。

で、俺と並んで雨上がりの道を歩く理子をコッソリ見ると……

理子も、盗み見るような視線でこっちを見上げていた。

「あ」

目が合った理子は小さく声を出すと、さっ、と視線を横に逸らす。

ちょっと緊張したような面持ちで、でも……頬を赤らめてもいるな。
なんか急に、よそよそしくなったカンジだ。
今まではいつもそのでかいふたえの目で、至近距離から俺を見つめてたくせに。
（ったく……何なんだよ。ワケ分かんねぇよ）
と、混乱気味の俺も――レインボーブリッジの方に視線を逃がした。
「か……勘違いは無しだよ。理子は別に、そっちの味方になったワケじゃない」
「ああ。それは分かってるよ。なんとなくな」
理子の声に、振り向かず答える。
どう接していいか、ちょっと分からないな。今はまだ。
「でも……帰ったら、ＰＣのメールを見といて」
「メール？」
「送っといた。お兄さんのこと。理子は――約束を守る」
兄さんの……こと……!?
理子の方に振り向くと、そこにはもう誰もいなかった。
ただ、立ち並ぶ校舎の合間に――
派手好きの理子が空に描いたかのような、虹の一辺だけが見えていた。

自分の部屋に戻ると、そこではアリアがちょうど外出の準備をしていた。
「キンジ！」
俺が帰ってきたことに気づくと、アリアは、ばぁーん。
指ピストルで俺を撃つような仕草をしながらウィンクしてきた。
な、なんだ。
カワイイけどそれは何だ。
やたらゴキゲンだな。学校でおとなしかったのとは、えらい違いだ。
「きのう理子からメールが来てね、まだ疑ってたから黙ってたんだけど……いま、理子が台場でママの弁護士に会ってるんだって！　あたしも行ってくるわ！」
アリアは制服を着替えもせず、狭い玄関で俺と押し合うようにして靴をはいた。
「弁護士から電話があったの！　理子の証言を使えば――差戻審が確実になるって！」
差戻審とは、この場合――証拠等に問題があるので、最高裁から高等裁判所にもう一度裁判をやり直せと命じる制度だ。
つまり、無実の罪で囚われているアリアの母親・神崎かなえさんが無罪判決を勝ちとるチャンスが増えることになる。
「理子……！」
理子は、女子寮の屋上でアリアと交わした約束を守ったのだ。

「やったな……良かったな、アリア」
狭い玄関で少し背をかがめ、アリアに言ってやると……
「やったわやったわ！」
アリアは――ぽふ！
と、その子供のような身体で、俺に抱きついてきた。
ふわ。アリアの髪から、あの甘酸っぱいクチナシの香りがする。
お、おい……
「……」
「あ……！」
俺の胸で子供みたいな満面の笑みを作っていたアリアは、ハッ、と我に返って……
そして自分が俺に思いっきり抱きついていることに気づき……こっちを見上げて、かぁ、かあああああっ。
赤面メーターを、一気にＭＡＸまで上げた。
「え、えっと……っ！」
抱きついた姿勢のまま硬直していたアリアは、ばっ。
同じく何のリアクションもできずに赤くなっていた俺から離れ、壁際まで後ずさった。
ごち。慌てるあまり、後頭部をちょっと壁にぶつけてる。

そして、えと、えと、と口ごもりつつ……顔を伏せるようにし……こそっ、とツリ気味の目で上目遣いにこっちを見て……

「……つ、つい……」

今抱きついてきたのを「つい」ということで片付けるのであった。

つい、か。そうか。

ま、まあいいさ。俺も。

じゃあ今のは、つい、ってことで。

「……」

「……」

あー。

なんだろうね。この沈黙。

2人っきりでこの空気。めっちゃ気まずいぞ。

アリアは……逆ギレするでもなく、逃げ出すでもなく、もちろん俺に抱きつき直すでもなく、もじり、もじり。ツインテールの先を微妙に揺らしていた。

「……えっと、じゃ…じゃあ、行ってくるね」

「……あ、ああ。気をつけて、な」

2人して噛み噛みの言葉を交わすと、アリアは、赤面顔で何度か俺の方をチラチラ振り

返りつつ……ばたん、とドアから出ていった。
ふぅ、と、俺はとりあえず一息つく。
そういえば……
アリアが自分で言ってたが、白雪の蔵書によれば……
女子は、好きな男には、付き合ってもいない段階ではベタベタできないらしいな。
ん？
だからなんだ。
何なんだよキンジ。なぜ今それを思い出す。
いつも俺に拳銃向けてるアリアが、俺のことを『好き』だなんて――ありえんだろ。
そもそもソースが白雪の本だしな。信憑性、ないない。
ははは。
この件はこれにて……うん。
一件落着、ってことで。いいさ。いいよな。
いいよなキンジ？
アリアが出ていってから……俺はＰＣを起動して、メールをチェックした。
（――来てる）

何やらやたらでかいFlashファイルが添付された理子からのメールは、
『キーくんは大変なものを盗んでいきました』
という件名で、本文は無かった。
添付ファイルをダブルクリックすると、なんかしらんが理子が音楽に乗せて走り回り、俺を追い回すFlashアニメが歌と共に流れ始める。
す、すげえな。
これ、理子が作ったのか。Flash職人だなもはや。
首吊りしてるアリアの後ろ姿、本を読む白雪、妖精みたいに飛ぶレキ、音楽隊の武藤・不知火などが目ぐるましく出てきては消えていく――
その背景に、よく見れば時間と場所を示す文字が見え隠れしている。
理子。相変わらず冗談が好きで回りくどいヤツだよ。
つまり……これは『招待状』ってワケか。
ここで、くれるんだな。
お前の十字架を取り返した、その報酬を。
Flashの中では最後に――
カナを模したキャラが、理子にこう語っていた。
『キンジはとんでもないものを盗んで行きました・・・あなたの心です！』

エピローグ　Go For The NEXT!!!

なるほどコイツは幽霊だ。

理子にメールで指定された場所――武偵高のある学園島とレインボーブリッジを挟んだ向かいにある人工浮島に上がりつつ、俺はそんなことを考えていた。

忘れかけていたが、白雪は星伽へ発つ前にある占い結果を俺に伝えている。

俺は――『狼と、鬼と、幽霊に会う』――と。

（当たったな、これで全部）

まず『狼』は、レキとバイクで追い回した。

『鬼』にも会った。吸血鬼には、鬼っていう字が入ってるしな。

そして……出たよ。

『幽霊』が。

――4月に俺が飛行機をぶつけたせいで折れ曲がり、回ることを忘れた風力発電機。

そのプロペラの1枚に、黄昏時の東京を背に腰掛けていたシルエットは――

カナ、だったのだ。

我が目を疑った俺は、カナに近づこうと未だ解体されていないＡＮＡ６００便の残骸を

よじ登っていく。

この間みたいに、理子が変装したカナかもしれない。理子の姿が見当たらないし。

最初はそうも思ったが……1メートル、また1メートル近づくにつれ、その思いは消えていった。

この、カナのオーラ。

時が止まるほどの美しさ。

それは——どんなに巧みな変装でも、作り出せるものではない。

濃厚な緋色に燃える、日没直後の美しい空と雲さえも……カナを前にしては、引き立て役の背景画に過ぎない。

ロングスカートのワンピースを着たカナは、編んだ長い後ろ髪を海風に揺らし——祈るように閉じていたその眼を、そっと、そっと、開いた。

長い睫毛の下の瞳に、魂を射抜かれる。

柔らかな視線は地球よりも強い引力で——俺の心を、ふわりと宙に浮き上がらせる。

(カナだ……！　これは、本物のカナだ……！)

遠山家に代々伝わるヒステリアモードは、性的興奮をトリガーにしている。

そして俺たちのご先祖様、名奉行・遠山の金さんは——もろ肌を脱ぐ事で、性的に興奮できる嗜好を持つ人だったらしい。

つまり、彼は自分の意思でいつでもヒステリアモードになれたのだ。
そして、21世紀。
遠山金一、つまり俺の兄さんも——その金さんのように、いつでもヒステリアモードになれる方法を見つけ出した。
兄さんに備わっていた嗜好は、ご先祖様と同じモノではなかった。
しかし、異性を必要とせず、自らの意思で自分を性的に興奮させられるものだった。
つまり、それは——絶世の美人に、化けること——！
「キンジ。ごめんね」
薄闇の中でも薔薇色だとハッキリ分かる美しい唇で、カナが言った。
「イ・ウーは遠かったわ」
驚きは、思ったより少なかった。
心のどこかで、やっぱり、という気すらした。
遠山家史上でも最強といわれた兄さんが、理子に倒されるハズがないからな。
そしてそれから、沸々と——
カナへの怒りが、生まれて初めて、沸いてきた。
「どういうことなんだ。教えてくれ、カナ——いや……」
ただ静かに長い髪を揺らしているカナに、俺は叫ぶ。

「……兄さん！」

俺の言葉に、カナ――兄さんは、応えない。

そしてその代わり、唐突な質問を返してきた。

「キンジは、神崎・H・アリアと――なかよしなの？」

な……何の話だ？

と、俺は眉を寄せる。

「――好きなの？」

聞かれて、さっき抱きついてきたアリアの可愛い仕草を思い出してしまった俺は……

かぁっ、と、頭に血が上るのを感じた。

「そんなこと……今、関係ないだろ！」

怒鳴った俺に、兄さんはおっとりとした瞬きを返す。

「キンジが肯定したら、1人でやろうと思ってたんだけどな。しなかったね」

そして――その薔薇色の唇で、言った。

「これから一緒に、アリアを殺しましょう」

あとがき

『ゴスロリ娘に好き好き言われて、ありがた迷惑！』

贅沢な叫びと共にこんにちは！　そしてホントは迷惑じゃないよねきっと！（？）

赤松です。

さてさて、お待たせいたしました！　Ⅲ巻の発売です！

今回の『緋弾のアリア』は……主人公の遠山キンジが、峰・理子・リュパン４世に好き好き大好きと言い寄られる、甘い甘ーいシーンから物語が始まります。

しかしそれは蜂蜜色の罠。

分かっていても堕ちてしまう、色じかけの落とし穴……その、ほんの入口に過ぎなかったのです。

あなたはキンジと共に、理子の甘い罠に堕ちていき――

おバカキャラの理子が実は隠していた心の闇を、キンジが優しく、時に激しく塗り替えていく様を楽しんでいってくださいね。

もちろん、ヒステリアモードのキンジも活躍します！　いろんな意味で。

そしてヒロイン、神崎・H・アリア！
彼女も様々なイベント・シーンを元気いっぱい、表情豊かにこなしていきます。
アリアは同じ『双剣双銃』の2つ名を持つ宿敵・理子を前に、どう動くのか？
キンジとの関係、ママの裁判、イ・ウーとの戦いに――どのような進展があるのか？
そして……なぜ、カラーページでメイド服を着てるのか!?
などなど、読む前は謎の多いⅢ巻ですが……ぜひお読みいただいて、いろんなアリアを楽しんでいって下さいね！
ご自慢の二丁拳銃を手にストーリーの中をぽんぽん飛び回るアリアからは、そろそろ「文庫本の中だけじゃ狭いわよ！　がう！」なんて文句が聞こえてきそうです……！

Ⅲ巻には白雪、武藤、レキといったキンジの友達も元気に出てきます。
（若干一名……元気すぎて、Ⅱ巻に引き続きキンジを困らせる女子もいるようですが！）
今回のカラーページには、そんな彼らが通う『超能力捜査研究科』『車輌科』『狙撃科』などの専門科目の一覧表をつけていただきました。
Ⅲ巻を読み終わった後の楽しみとして、想像力に自信のある方は――「自分が武偵高の生徒だったら、どの学科に所属してるかな？」と一覧表を元に空想してみてくださいね。

ゲームのキャラメイクみたいな感じで、武装などを考えるのも楽しいかもです。
そうやってバーチャル武偵高(ぶていこう)をお楽しみいただきつつ……
ますます加速する『緋弾のアリア』Ⅳ巻を待ってて下さいね！

ではまた、次の季節にお会いしましょう。

私の物語が――
読者の皆さんにとって、いつまでも、楽しい居場所であり続けてくれますように。

２００９年３月吉日　赤松(あかまつ)中学(ちゅうがく)

アリア3巻

どぅよ！

気付けば3巻！

巻を重ねるごとに

アリアはちまかわいく

白雪はころかわいく

なってますね！

キンジも大変です。

緋弾のアリアⅢ
ハニー・トラップ
蜂蜜色の罠

発行　2009年3月31日　初版第一刷発行

著者　赤松中学

発行人　三坂泰二

発行所　株式会社
メディアファクトリー
〒104-0061
東京都中央区銀座8-4-17
電話 0570-002-001
（カスタマーサポートセンター）

印刷・製本　株式会社廣済堂

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを
することは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。
©2009 Chugaku Akamatsu
Printed in Japan
ISBN 978-4-8401-2720-2 C0193

MF文庫
J

ファンレター、作品のご感想は
あて先：〒150-0002　東京都渋谷区渋谷3-3-5　NBF渋谷イースト
メディアファクトリー　MF文庫J編集部気付
「赤松中学先生」係　「こぶいち先生」係

＊この小説はフィクションであり、実在の人物・団体・地名等とは一切関係ありません